

福岡県八女市

塚ノ谷窯跡群

—八女古窯跡群調査報告 I —

1 9 6 9

八女市教育委員会

序

八女市忠見地区丘陵地一帯は、古代遺跡の宝庫といわれています。

これまでに調査発見された、古墳や窯跡群からは、貴重な資料が提供されています。

このたびこの地区に、県営パイロット事業が推進されることになり、該当地域の塚ノ谷須恵器窯跡群の調査をすすめたわけであります。

調査は国、県の補助を得て、九州大学文学部考古学研究室、及び土地所有者の方々などの、ご指導とご協力を得て実施しましたが、予期以上の成果をあげることが出来ました。

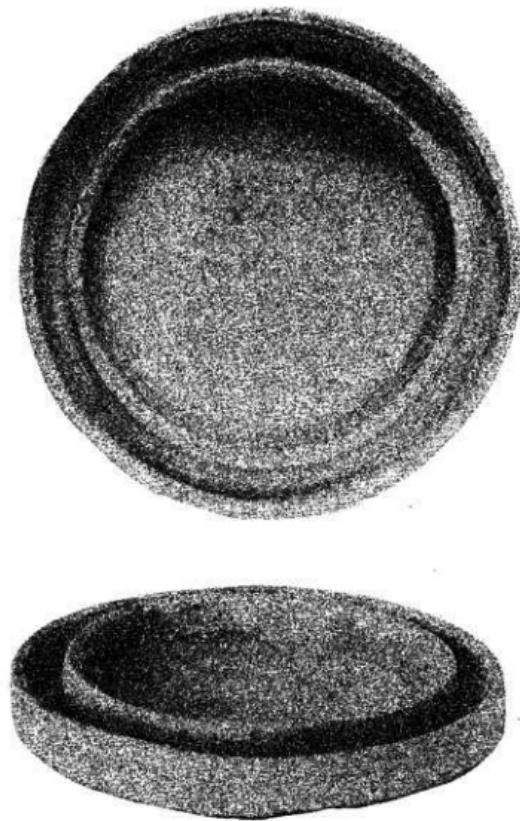
調査結果についても、早急にまとめていただき刊行できることになりました。幸いにして、この資料がわが郷土古代文化研究の参考にもなりますならば、望外の喜びとするところであります。

なお、本書の発刊にあたり、調査および原稿の執筆を担当された、九州大学文学部考古学研究室をはじめ、県教育委員会など関係各位のご協力に対し深く感謝の意を表します。

昭和44年3月20日

八市教育委員会教育長

才 所 德 次



陶製円面鏡 直径17.8厘
(塚ノ谷第1号窯跡出土)



八女古窯跡群と八女古墳群 (昭和44年3月現在)

(八女古窯跡群) I. 三助山窯跡 II. 管ノ谷窯跡 III. 塚ノ谷窯跡 IV. 牛焼谷窯跡 V. はすわ窯跡

(八女古墳群) A. 神奈無田古墳群 B. 岩戸山古墳群 C. 宅間田古墳群 D. 豊福古墳群 E. 一寺古墳群 F. 立山古墳群 G. 平原(弘法谷)古墳群

H. 日當山古墳群 I. 豊男山古墳群 J. 長野古墳群

1. 神奈無田古墳 2. 岩戸山古墳 3. 乗場古墳 4. 寿藏塚古墳 5. 鶴見山古墳 6. 釣崎2号古墳 7. 釣崎3号古墳 8. 丸山古墳

9. 豊男山古墳

本文目次

第1章 序 説	1
I 八女古窯跡群の発見	(小田富士雄) 1
II 調査の経過	(藤口 健二) 2
第2章 窯跡の立地	(石松 好雄) 6
第3章 塚ノ谷窯跡群の調査	8
I 第1号窯跡	(石松 好雄) 8
II 第2号窯跡	(真野 和夫)(松本 肇) 22
III 第3号窯跡	(松本 肇) 32
IV 第4号窯跡	(小田富士雄)(真野 和夫) 33
第4章 その他の窯跡の調査	48
I 牛焼谷窯跡	(宮小路賀宏) 48
II 三助山窯跡群	(岩崎 光)(藤口 健二) 54
第5章 総 括	62
I 塚ノ谷窯跡群の構造と特色	(小田富士雄) 62
II 筑後における須恵器の編年	(小田富士雄) 65
付 九州発見古窯出土遺跡地名表	(小田富士雄) 74
編 集 後 記	75

図版目次

- 卷首図版 陶製円面硯（塚ノ谷第4号窯跡出土）
卷首地図 八女古窯跡群と八女古墳群
- 図版第一 八女古窯跡群の立地景観
図版第二 塚ノ谷第1・3・4号窯景観
——（上）第1・3・4号窯遠望（下）第1号窯遠望
図版第三 塚ノ谷第1号窯（1）
——（右）焚口より窯内を望む（左）煙出しおよび窓内及び灰原を望む
図版第四 塚ノ谷第1号窯（2）（右）窯内全景（遺物出土状態）（左）煙出し穴
図版第五 塚ノ谷第1号窯（3）（上）焚口付近の遺物出土状態（下）同上部分
図版第六 塚ノ谷第2号窯景観（上）第2号窯遠望（下）同上
図版第七 塚ノ谷第2号窯（1）
——（右）窯内全景（遺物出土状態）（左）窯内全景（調査終了後）
図版第八 塚ノ谷第2号窯（2）（右）窯内全景（左）窯内全景（調査終了後）
図版第九 塚ノ谷第4号（1）（右）窯内全景（左）天井の残存状況
図版第一〇 塚ノ谷第4号窯（2）（上）焚口付近（下）焚口前方の凹み
図版一一 塚ノ谷第4号窯（3）（上）焚口付近東壁の重複する床面と穴
——（下）焚口付近西壁の重複する床面と穴
図版一二 塚ノ谷第4号窯（右）・（左）煙道部の構造
図版第一三 牛焼谷窯（1）（上）煙道部（下）窯内全景
図版第一四 牛焼谷窯（2）（右）焚口より燃焼部を望む
——（左）窯上方より焚口凹み穴を望む
図版第一五 遺物（1）塚ノ谷第1号窯須恵器
図版第一六 遺物（2）塚ノ谷第1号窯須恵器
図版第一七 遺物（3）塚ノ谷第1号窯円面硯
図版第一八 遺物（4）塚ノ谷第2号窯須恵器・円面硯
図版第一九 遺物（5）塚ノ谷第4号窯須恵器
図版第二〇 遺物（6）塚ノ谷第3・4号窯須恵器
図版第二一 遺物（7）牛焼谷窯瓦

挿 図 目 次

第 1 図	塚ノ谷第1号窯焚口附近の発掘	5
第 2 図	塚ノ谷、牛焼谷附近地形図	7
第 3 図	塚ノ谷第1号窯跡地形実測図(石松好雄・藤口健二実測、石松製図)	9
第 4 図	塚ノ谷第1号窯跡実測図(石松・藤口実測、石松製図)	10
第 5 図	塚ノ谷第1号・2号窯跡灰原土層図 (石松・藤口・宮小路賀宏・松本肇実測、石松・真野和夫製図)	10~11
第 6 図	塚ノ谷第1号窯跡出土須恵器実測図(藤口実測、石松製図)	13
第 7 図	塚ノ谷第1号窯跡出土須恵器実測図(藤口実測、石松製図)	15
第 8 図	塚ノ谷第1号窯跡出土須恵器実測図(藤口実測、石松製図)	17
第 9 図	塚ノ谷第1号窯跡出土須恵器甕内・外面のたき目拓影	18
第 10 図	塚ノ谷第1号窯跡出土須恵器ヘラ記号拓影	20
第 11 図	塚ノ谷第2号(上)第4号(下)窯跡附近地形実測図 (石松・宮小路・藤口・松本実測、小田富士雄製図)	23
第 12 図	塚ノ谷第2号窯跡実測図(松本・真野実測、真野製図)	24~25
第 13 図	塚ノ谷第2号窯跡出土須恵器実測図(松本実測、製図)	27
第 14 図	塚ノ谷第2号窯跡出土須恵器実測図(松本実測、製図)	28
第 15 図	塚ノ谷第2号窯跡出土須恵器拓影	29
第 16 図	塚ノ谷第1号・第2号窯跡出土円面硯実測図(藤口・松本実測、製図)	30
第 17 図	塚ノ谷第3号窯跡実測図及び出土須恵器実測図(松本実測、製図)	32
第 18 図	塚ノ谷第4号窯跡実測図(松本・前川威洋実測、小田製図)	32~33
第 19 図	塚ノ谷第4号窯跡灰原土層図(松本・前川実測、真野製図)	34~35
第 20 図	塚ノ谷第4号窯跡出土須恵器実測図(真野実測、製図)	37
第 21 図	塚ノ谷第4号窯跡出土須恵器実測図(真野実測、製図)	39
第 22 図	塚ノ谷第4号窯跡灰原土層図(真野実測、製図)	41
第 23 図	塚ノ谷第4号窯跡灰原土層図(真野実測、製図)	43
第 24 図	塚ノ谷第4号窯跡出土須恵器甕拓影(右・外面、左・内面)	44
第 25 図	塚ノ谷第4号窯跡出土須恵器ヘラ記号拓影	46
第 26 図	牛焼谷瓦窯跡地形実測図 (波多野曉三・古賀寿・岩崎光・江下淳実測、宮小路製図)	49

第 27 図	牛焼谷瓦窯跡実測図（宮小路・松本実測、宮小路製図）	50
第 28 図	牛焼谷瓦窯跡灰原土層図（宮小路・松本実測、宮小路製図）	51
第 29 図	牛焼谷瓦窯跡出土須恵器実測図（宮小路実測、製図）	52
第 30 図	牛焼谷瓦窯跡出土瓦実測図（宮小路実測、製図）	53
第 31 図	三助山古窯跡群出土須恵器実測図及びヘラ記号拓影 （小田、宮小路・松本・藤口・真野実測、藤口製図）	57
第 32 図	三助山古窯跡群出土須恵器実測図 （小田・宮小路・松本・藤口・真野実測、藤口製図）	59
第 33 図	乗場古墳の須恵器（小田実測、製図）	67
第 34 図	福岡県中間市瀬戸出土の陶製円面硯	70
第 35 図	立山古墳群の須恵器（小田・石松・宮小路実測、小田製図）	71
第 36 図	平原、日当山古墳群採集の須恵器（小田実測、製図）	72
第 37 図	三井郡小郡町三沢・古賀の土括墓出土須恵器（小田実測、製図）	72
別添付図	八女古窯跡群須恵器編年図（真野製図）	

第1章 序説

I 八女古窯跡群の発見（巻首地図参照）

筑後八女の北界を東西に越する八女丘陵上には、筑紫国造磐井の墓に比定されている岩戸山古墳をはじめ乗場古墳、善藏塚古墳などの著名な古墳群がならび、さらに北東部の大山塊の山麓に群集する古墳群につづき、総計60基以上の存在が確かめられている。この古墳群の背後を占める山中に須恵器窯跡の存在が知られたのは1965年であった。八女市忠見区三助山の窯跡群がそれである。当時蜜柑園造成のために工事をはじめて発見され、岩崎光氏が応急調査にあたり、遺物の蒐集につとめられた。当時、八女市教育委員会の江下淳主事の案内で私も現地を踏査する機を得たのであった。つづいて翌年には北方の広川町寄りの山中にあたる牛焼谷窯跡がおなじく蜜柑園造成工事によって発見され、岩崎光氏が当時の福岡学芸大学久留米分校教授波多野曉三氏や久留米市筑邦女子高校教諭古賀寿氏の援助を得て応急の調査をとげられた。⁽¹⁾ この時も江下氏の連絡によって調査中の窯跡を見学することができた。これらがあいつぐ、窯跡の発見によって、この出入の多い山中が窯の築造に適した地形であることが知られるようになった。八女市教委の江下主事の精力的な探索が熱心につづけられ、数箇所の候補地があげられた。私もそれを再三にわたりて実査することができ、篆ノ谷窯跡群もこの頃にその立地が注目されて重視されるにいたったのである。この東にあたる管ノ谷の山腹に窯の陥没穴が発見されたのもほほ同じ頃であった。さらにつづいて西方のはすわ窯跡が知られるにいたった。このようにして忠見区の後背山中のあちこちに窯跡が存在しており、将来さらに発見されるであろう見通しもきわめて大きくなってきた。我々はこれら窯跡群を擁するこの山中一帯が、旧八女郡に広げてみても最大の窯跡群を形成しているとみられるところから、これらを総合して「八女古窯跡群」と呼ぶにふさわしいと考えるにいたった。今回の調査は偶々忠見地区で県営パイロット事業による開発事業が計画されたことに端を発した緊急調査ではあったが、筑後地方におけるはじめての本格的な窯跡の学術調査という性格を負っていた。したがって我々には筑後地方における須恵器編年の確立、須恵器の需給関係、筑紫国造と工人集団の歴史的関係などの問題を追求するために不可欠の研究機会にしようという意図を抱かせるだけの意義があったわけである。さいわいにも我々に調査を依頼された八女市教委の方々には、その意図を尊重していただいて調査後の遺物整理から報告書作成にいたるまで終始かわらぬ御配慮を賜わったのは調査員一同感謝に堪えない次第である。また調査にあたっては我々の希望を容れて調査員の派遣に便宜を与えられた奈良国立文化財研究所、福岡県教育委員会にも深甚なる謝意を表したい。

（小田富士雄）

（註）岩崎光「八女市古代瓦窯址—牛焼谷上り窯—」（昭和41年西日本史学会春季大会発表要旨）九州考古学28, 1966.

I 調査の経過

発掘調査は昭和43年12月20日から翌年1月10日までの期間に実施した。調査に関係した人達は次のとおりである。

調査指導

九州大学文学部教授 鏡山 猛
同 助教授 岡崎 敬

調査員

九州大学文学部助手	小田 富士雄(調査主任)
東京大学理学部助教授	渡辺直経
奈良国立文化財研究所技官	石松 好雄
福岡県教育委員会文化財係技師	宮小路 賀宏
福岡県立福島高等学校教諭	岩崎 光
九州大学考古学研究室学生	松本 肇
"	真野 和夫
"	藤口 健二

八女市教育委員会 社会教育課長	平島 忠太郎
社会教育主事	江下 淳
"	松延 鰐太
公民館主事	渡辺 黙

なお発掘にあたっては県立福島高校、八女農業高校の学生諸氏の協力をうけた。さらに宿舎となつた忠見小学校の校務員岡田八洲御夫妻、人夫として発掘その他にあたつてもらった忠見地区の人々の御援助御協力により今回の調査を無事終了できたことを感謝致します。

12月20日 晴 午後から江下主事の案内で現地を見学する。その結果塚ノ谷には数基の窯跡が推定され、牛焼谷と合わせて今回の調査地域に決定する。南にW状に開いている塚ノ谷の西と北の迫にトレーナーを設定し、窯の存在を確認してそれぞれ1号窯、2号窯と命名し1号を石松、藤口、2号を松本、真野と発掘分担を行う。表探資料から1・2号は第VI様式の窯跡らしいと推定された。

12月21日 晴 昨日につづいて両窯跡の表土剥ぎを継続し、煙出し部焚口付近の壁を確認する。1号窯の煙出し部は地山の綿雲母片岩を長方形に掘り込んでいる。2号窯の同部の床は平坦であり、壁は地山を利用している。1号は第V期の杯の蓋、2号は第VI期の杯を出土する。

12月22日 曇一時雨後雪 1号窯は一部陥没はしていてもほぼ天井部は残っているようである。焚口付近の壁が確認され、煙出し部の方に排土して発掘をすめる。2号は煙出し部から焚口付近まで壁面を露出し床面の発掘にかかる。天井部は陥落している。昼前に雨が激しさを加え作業を中止する。午後忠見小学校保管資料の調査で、1号窯のものかとみられる蓋を検出。江下主事の案内で平原古墳

群のある丘陵を見て巡るが竈構造で破壊されている。帰路見崎中学校の資料にⅡ～V期の須恵器を検出し借用する。

12月23日 晴 1号窯は拂土作業を続行。焚口で伏せた大形甕が出土し、同レベルで約1m前庭部側によったところで脚部の欠損した円面鏡2個体が発見された。1号窯は30度を越す急傾斜の床をもつ削り抜き式登り窯と判明したが、床の段の有無は未確認である。

2号窯は床面の露出の結果38度の急傾斜に岩盤を掘下げ壁土を塗りつけている痕跡を確認する。燃焼部から焼成部への変換地点以外では段はつかない地下式無段登り窯と判明する。本日で第VI期須恵器のセット関係が把握された。灰原に縦トレンチ設定し、円面鏡の透孔脚片1個が出土。

12月24日 晴 1号窯 焚口から窯内にはいる地点の横断面図作成直後天井が陥落した。作業が危険な為に残存する天井部を破壊して発掘を進めることとする。遺物は第V期を主体として第VI期が共伴している。灰原に縦トレンチを設定し円面鏡の透孔脚部片1個と第III期の杯敷点が出土。

2号窯 焚口と燃焼部を発掘。燃焼部から急勾配に焼成部が続き、焚口の右壁は中軸線に平行であるが、左壁は前庭部に広がっている。灰原に横トレンチを設定した。新たに円面鏡片一個を発見。皿が第VI期に出現したことも注目される。出土品は第VI期だけである。灰原層は薄く操業期間が短かいことを推測させた。

12月25日 晴 1号窯 床面の清掃を残して発掘はほぼ終る。煙出し部は焼成部と同傾斜でつづき窓壁と床面は岩盤を利用していて堅固である。焼成部は徐々に狭くなつて煙出し部につづいている。前庭部に横倒しになった状態で大甕が出土する。

2号窯 焚口前庭部に凹み穴が発見され、木炭を採取した。焚口内より円面鏡の脚部が出土。本日より遺構の図面作成にとりかかる。

12月26日 雨 昨夜来の雨があがらず作業を中止する。午前中忠見小学校・見崎中学校の須恵器を実測。午後より八女市公民館で牛焼谷窯、ハスワ池窯出土の瓦、須恵器の実測、手拓を行う。

12月27日 晴 1号窯は激しい雨ではなかったが一昨夜から降り続いた雨の為、煙出し部付近の天井の崩壊が心配されたが異常なかった。床面を清掃すると焼成部は岩盤を更に掘りこんで段状をなしている。これで1号窯の形式は削り抜きの有段登り窯であることが判明する。燃焼部は一次、二次の床が確認される。2号窯と同じく前庭部に凹み穴が検出され、堆積土層中よりⅢ、Vの坏、VIの碗、甕その他の出土した。また第V期の坏の蓋が身に被さって焼け着いている状態で発見された。

2号窯は図面作成をつづける。燃焼部の床は堅く焼き締り、灰層の下部は破片が出土するので幾度か使用したと推察される。焚口付近より円面鏡の脚部破片をとりあげる。塚ノ谷1・2号窯の調査はほぼ順調に進行しているので後半新たに発掘予定の塚ノ谷2号窯の東側鞍部を越えた斜面に三箇所トレンチを設定する。

第3号窯 東むき斜面の農道断面に窯の横断面が現れており、農道によって破壊されたものである。

第4号窯 3号窯より更に道路を上ったところに灰原らしき断面がみえ、ここより第III期を主とする破片を発見。トレンチを設定して発掘にかかる。この窯は第III期を主体とする窯跡である。小田、真野が発掘を担当する。

12月28日 晴 1号窯は一次床面に着いている遺物を残して二次床面を剥ぐ。両床面とも須恵器は第V・VI期が共伴する。一次床上より通算7個体目の円面硯片が出土する。2号窯は引続いて図面作成を行う。4号窯は発掘と平行して遺構付近の下刈りを行う。

本日をもって前半の調査を終了し、来春4日発掘再開を約して解散。

1月4日 曇 本日よりの後半の調査に宮小路が参加する。1号窯は図面作成に着手。2号窯の人員は4号窯に移り、雜木の伐採と平行して表土剥ぎ作業を続行する。

1月5日 小雨時々曇 悪天候のため1号窯の図面作成を中断して、牛焼谷窯に人員を移し、発掘を開始する。牛焼谷窯の発掘分担は宮小路、松本である。同窯は1966年蜜柑園造成の際に発見され、岩崎光氏が調査されたが遺存状態は良い。主体部はトンネル状態に残り、塚ノ谷の各窯と同様に凹み穴を有する。焚口では二期の床が認められ、灰原は非常に薄く二層に分かれている。同窯は削抜き式無段登り窯で、老司系正格子叩きのある平瓦、行基葺丸瓦と第VI期の須恵器が出土している。

2号窯の実測も中止して4号窯へ人員を移す。これまで掘っていたところは灰原部分であり、それより上位斜面に4号窯主体部を発見する。第III期の須恵器が出土し、灰原中の資料と一致する。これまで時期を下げる考えられていた小形の高杯が、この時期であると考えざるをえなくなってきた。表土中に若干第V・VI期の須恵器が混っている。

1月6日 曇時々小雨 1号窯は灰原に横トレチを入れて十字状トレチにする。図面作成はほぼ終り焼成部付近の第二次床面設定の廢つきこまれた遺物の取上げを行う。

4号窯は昨日入れたトレチで焼成部床面が確認された。壁の保存状態は悪く、ただ煙出し部付近で天井部が残っている。1号・2号窯よりも窯体は長く古い形式であることが知られる。

牛焼谷窯は第二次焚口部の遺物を取り上げ後、第一次床面まで掘り下げる。農道下の凹み穴を拡張して掘る為地主との交渉が必要となる。

1月7日 晴時々小雪 1号窯は焚口付近の遺物の取上げ後平板地形図の作成にとりかかる。4号窯は床面は緩い傾斜をもち無段である。焼成部上半部は壁がかなり良い状態で残っており、煙出し部付近の天井には、張り天井を作る際の骨組みを組んだ痕跡が良く残っている。

牛焼谷窯は地主との交渉がまとまり農道にトレチを拡張する。焚口の前面の凹み穴は、昨日より更に広く深く拡張されており二次的に拡張されたことが知られた。

鏡山教授、岡崎助教授、学生3名を伴ない來訪。

1月8日 晴 1号窯の地形実測図終了し、つづいて2号窯の地形作成にかかる。

2号窯は灰原トレチ土層図作成をもって1号窯とともに発掘を終了した。

4号窯は全面露出を終る。焚口は床上げされており、窯を短くして使用したことが考えられる。焚口の両端に小ピットが発見された。灰原発掘により上部灰層は少量で次に間層があり、更に下層に伴う炭の層が下方の農道による切通しまで続いているので、これまで採集した灰原の須恵器は殆んど下層灰原の遺物と考えられる。

牛焼谷窯は図面作成後埋めもどしを行い調査は終了する。

1月9日 晴 2号窯の地形図終了し、4号窯に着手する。4号窯は煙出し部の奥行きの壁が十分確認出来ないので切り割りを行う。床は若干張出して深くなり排水溝の役をなすのではないかと考え

られる。焚口付近に十字状トレンチを入れ、床上げの際の第一次の床面との重複関係を調べる。上層床面と下層の遺物を分離して取り上げる。焚口前方に凹み穴が発見される。図面作成に着手。

1月10日 曇のち小雨 4号窯の煙出し部は片岩の露頭を利用しているので窯に直結するところは赤く焼けている。床面は貼り床らしく、露頭との境はV字状の小溝を形成し、これが窯の周辺に延びているようで一種の排水溝を形成するようである。本日が調査最終日で時間の余裕が無いので床の切り割り、排水溝の可能性のある凹みの追求は断念し、次回の調査に行なうこととする。

地形測量図終了。3号窯の実測終了。本日をもって5基の窯跡を発掘して調査を完了する。

少し長い発掘の最終日になると誰もが経験する満足感、安堵感と感情のいらだちとが渾然と漂う。家ノ谷に午後より小雨が降り始め、谷にたちこめる薄霧の中に焚火の淡い煙が静かに流れていった。

(藤口 健二)



第1図 家ノ谷第1号窯焚口附近の発掘

第2章 窯跡の立地 (巻首地図参照)

塚ノ谷古窯跡群は福岡県八女市忠見区本字塚ノ谷にある。八女市は筑後川及び矢部川がつくる広大な筑後平野の南に位置し、北及び東は水繩山系に、南は矢部川によって画され、西にひらけた地形的環境にある。

この八女市の北縁部を水繩山系からわかれれた標高40~200mの丘陵が東から西へ長くのびているが、塚ノ谷は、この丘陵のちょうどつけ根に位置している。この丘陵は一般に長峰丘陵(八女丘陵)とよばれ、多数の古墳が点在している。丘陵の西端には5世紀の中頃に比定され、棺蓋に直弧文・同心円文の彫刻をもった横口式家形石棺を内部構造にする石人山古墳があり、さらにその東約2キロのところには、前方後円墳一基(神奈無田古墳、現在は消滅)を間にはさんで、筑紫国造磐井の墳墓として著名な岩戸山古墳及び拔鉢古墳である乗場古墳が東西にならんでいる。

この岩戸山古墳周辺から、さらにその東方の平野部がつくる字山内にかけての丘陵の南側には横穴式石室を内部構造とする古墳時代中期末から後期にかけての前方後円墳及び多数の円墳が点在し、八女市の南に接した立花町の矢部川南岸の丘陵にある横穴群とは対照をなしている。

特に字山内にある童男山古墳は巨大な横穴式石室の中に石星形を設けた終末期の古墳であるが、この古墳を中心として多数の円墳が点在し、いわゆる童男山古墳群を形成している。この童男山古墳群を東限として、それより奥の黒木町・星野町には、今までのところ古墳は発見されていない。

以上述べたように、この丘陵上には多数の古墳が存在するが、中にはすでにこれまでの開墾等によって、内部が破壊されたものも数多い。これらの古墳からは副葬品としての須恵器も発見されており、近くの小学校などに保管されているものもある。古墳時代この土地において多数の須恵器が消費されたことは容易に推察できるところである。

このような歴史的環境の中にあって、今回我々が発掘調査した塚ノ谷古窯跡群は、これらの古墳群からは少しはなれた北側の山中にある。標高100~130m位で細長い谷が八手状にのび、非常に複雑な地形をなしている。谷間は水田として利用され、各々の谷を流れて来た水は一旦灌漑用の池(清尾池)に貯水され、さらに下流の平野部に放水される。この谷と丘陵頂部との比高は大体30~40mで急斜面をなし、この斜面にそってひらかれた農道の「り面」には、いたる所に絹雲母片岩の岩盤がみられ、地形的、地質的に窯の築かれる良好な条件の一つとなっている。塚ノ谷古窯跡群は清尾池のすぐ北側に位置し、瓦陶兼業の窯である牛焼谷窯跡は、この塚ノ谷から約350mほど西の谷に面した斜面に築かれている。

さらに塚ノ谷の東約300mのところには今回の調査の対象とはならなかったが管ノ谷古窯跡群が確認されている。

(石松 好雄)

(註1) 墓丘の全長140m、後円部径80m、前方部巾95mの九州における屈指の前方後円墳で、多数の石人、石馬類の表飾物をもった古墳としても有名である。大正13年8月、後円部に神社の社殿新築工事の際に地下約2尺~3尺5寸位の深さから大形器台・萬葉・匁・提瓶・甕が発見されている。

(註2) 岩戸山古墳のすぐ東にある前方後円墳で、複室式の横穴式石室が変成岩の大きな石で築かれている。前室・玄室には同心円文・三角形文の装飾がある。この古墳からはかって金銅製の杏葉（東京国立博物館蔵）と第Ⅲ様式に相当する須恵器が発見されている。

(註3) この菅ノ谷古窯跡群のある丘陵も今度の県営パイロット事業計画区域に入ってしまっており、早急な分布調査などの基礎的調査が必要であるが、現在雑木・雑草が繁茂しており、正確なデータを知ることができない。

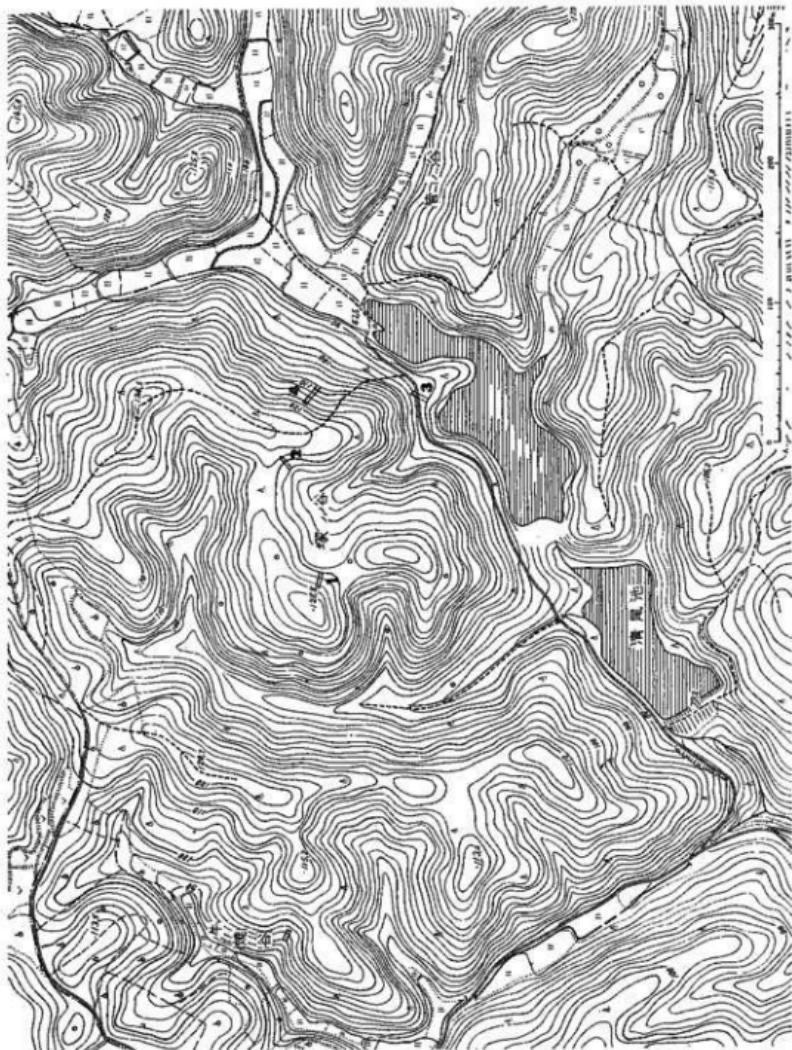


圖 2 番 地図 牛、谷、菅、窯、跡、古、遺、跡

第3章 塚ノ谷窯跡群の調査

I 第1号窯跡

(1) 立地 (図版第二)

1号窯・2号窯は清尾池のすぐ北の丘陵上にあり、北からびてくる丘陵によって三方をかこまれた頂度すり鉢状を呈する地形の中にある。1号窯は、その西北部の標高120mほどのところに東南に面して築かれている。塚ノ谷古窯跡群のうちではもっとも高い位置にあり、すでに頂部に近い。

(2) 調査の経過

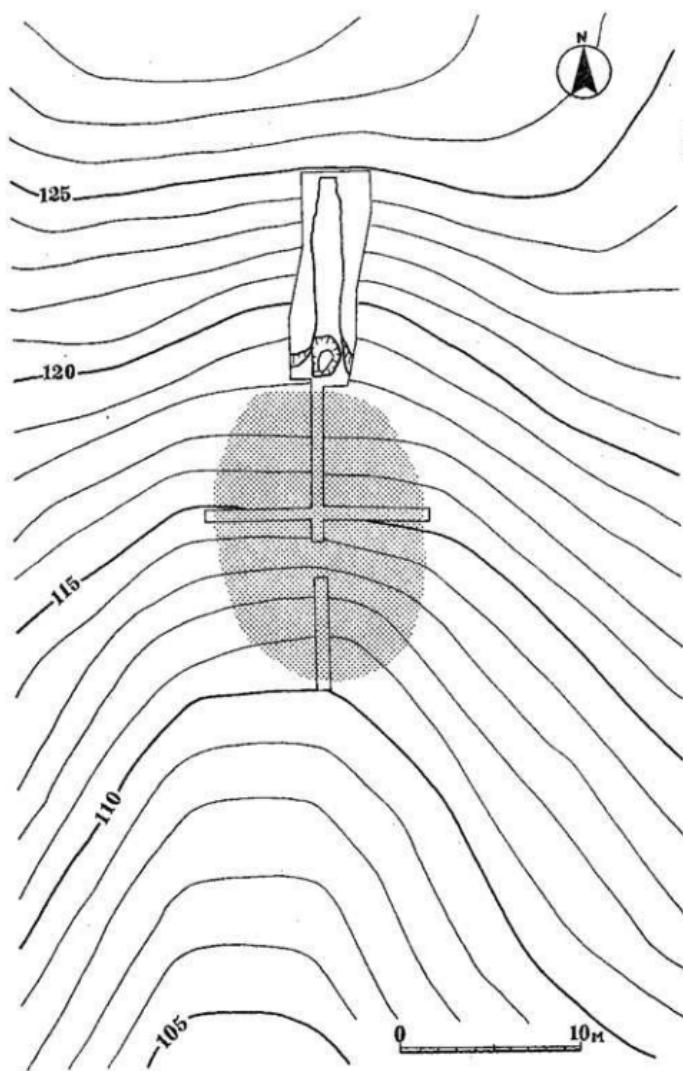
地形的に凹地になっているところをえらび、その付近の表面観察を行ったところ須恵器破片および暗黒色の灰土らしきものが認められたので、一応この地域を灰原と推定し、さらにその上部の観察を行った。その結果標高125m付近のところで直径約1mほどの陥没状の穴が発見された。この部分の清掃を行ったところ、その穴の周囲の壁は赤く焼けており、位置的にも煙道にあたるのではないかと推定された。またこの穴から約6m下方にステップ状に傾斜が変化する部分が認められたので、この付近を焚口と推定して発掘を開始した。この結果煙道と推定した穴の方向に向って右側の一部に窯体側壁を確認したので、これを手懸りとして発掘調査を進めた。約2mほど掘り進んだところで天井が残っていることが確認できたが内部は土砂が充満し、その土砂の中には崩壊したと思われる壁の破片がブロック状に入っていることがわかった。そこで土砂の一部を取り去って天井部を観察したところ、窯の主軸とほぼ平行に亀裂が入り一部では落盤しかかっていることが判明したので、写真撮影及び横断面の実測を行って、やむなくその一部を取りはずした。しかし煙道部付近で、わずかではあるがその一部を残したことは幸いであった。

床面については地表から1.5mほど掘りさげたところで大甕・灰・蓋・円面鏡等の破片がかなり密集した状態で検出された。この面を一応床面として発掘を進めたが、これは後に第二次床面として、焚口の部分が一部補修されたものであることが判明した。

以上の窯本体の調査と一部平行して、灰原の調査を行った。この灰原については、時間的な制約から窯の主軸方向及びこれに直交する巾1mのトレンチを十文字に入れて、遺物をできるだけ多く採集するとともに、灰原の範囲を確認する程度にとどめた。

(3) 構造 (図版第三～第五)

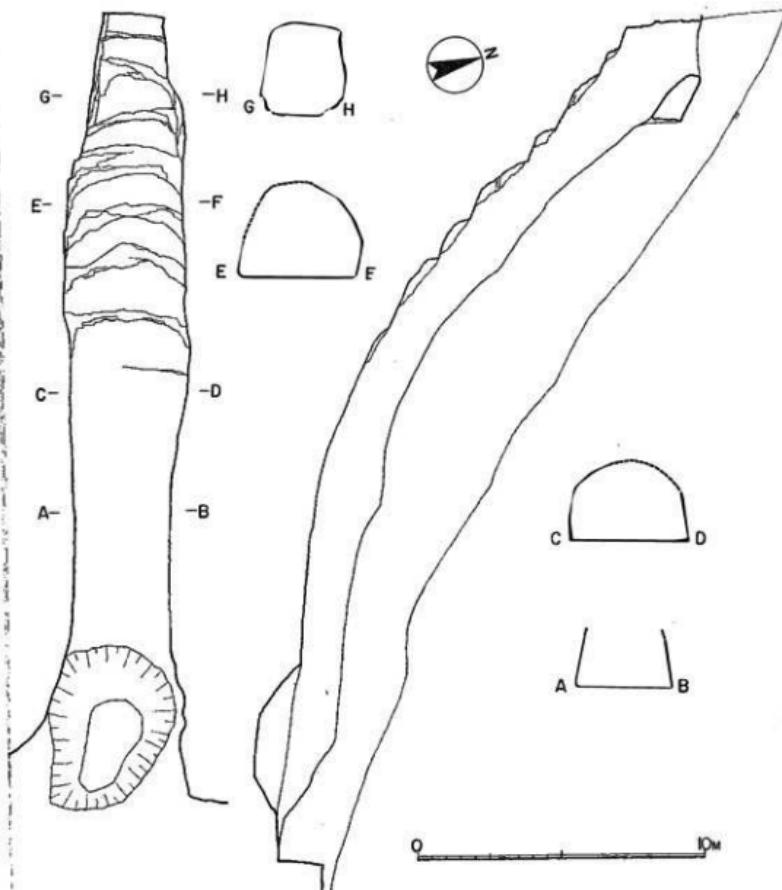
第1号窯は前庭部の舟底状ピットの上端から盛出し部までの長さが11mをはかる長大なもので、窯体主軸の方向はW-16°-Nである。窯体は絹雲母片岩の岩盤をベースとして、それにくりぬかれた地下式のものである。付近はしだ類、雜木におおわれており、発掘着手前は天井部の崩壊しているこ



第3図 崑ノ谷第1号窓跡地形実測図

とが予想されたが、実際には窯体内部に流れこんだ土砂にささえられて残っており比較的良好な保存状態であった。

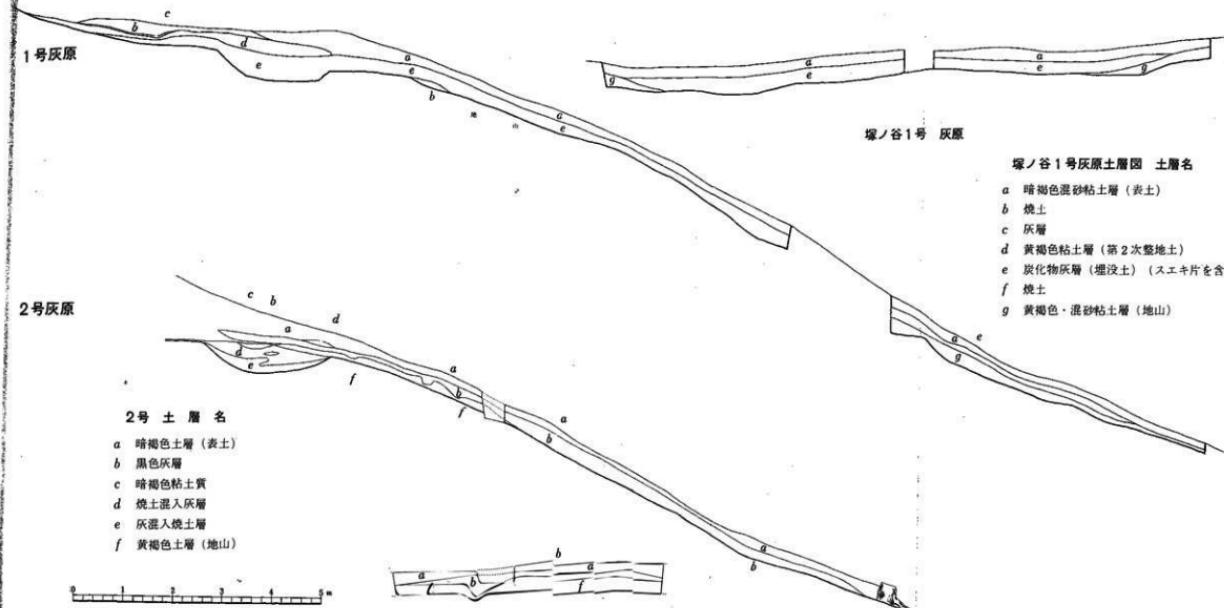
前部 左側壁に接して窯体主軸方向に2.2m、それと直角に1.6m、深さ0.5mの不整形の凹みがある。底部は舟底状を呈し、そこには炭化物及び灰が充満し、少量ではあるが須恵器の破片が採集された。この凹みは後に第二次床面として焚口付近が補修された際には、焚口付近同様に赤褐色粘土でならされていた。その用途については窯体構築に関連するものではないかとの意見もあったが、確実な証拠もないため、その点については究明することはできなかった。左側壁の開口部のところではほぼ完



第4図 塚ノ谷第1号窯跡実測図

良好な保存
の凹みがあ
が採集され
る粘土でな
が、確實な
らではば完

1号灰原



第5図 塚ノ谷1号・2号窓跡灰原土層図

塚ノ谷1号灰原土層図 土層名

- a 暗褐色混砂粘土層（表土）
- b 焼土
- c 灰層
- d 黄褐色粘土層（第2次整地土）
- e 炭化灰層（埋没土）（スエキ片を含む）
- f 焼土
- g 黄褐色・混砂粘土層（地山）

全な大窯（第⑧図⑥）を遺棄した状態で検出した。

焚口・燃焼部 焚口の巾は1.3mで床面・両側壁は赤色に焼けていた。燃焼部は長さ1.2mほどで、この部分と焼成部の一部にかけては後に床面及び両側壁が補修されている。この補修前・後の両床面からは、それぞれ灰にまじって蓋・坏・模・窯・円面鏡等の破片が検出された。

焼成部 全長約6mで側壁が若干広がりほぼ中央部で最大巾1.7mになる。窯体の下半部は絹雲母片岩の岩盤で、上部は疊まじりの赤褐色粘土である。床面はこの岩盤を利用して階段状につくられ、7段をかぞえる。床面傾斜角は入口付近と階段部では少し異なるが37°～38°で急傾斜をなしている。

両側壁は保存がわるく、右側壁にスサ入り粘土を貼ったらしい部分が一部残っているのみで他ははく落している。

天井部は発掘終了時に煙り出し付近に一部を残し得たのみで他は結果的にくずさざるを得なかつたが内部に充満した土砂にさえられて比較的良好に残っていた。高さは床面から1.2m前後である。

奥壁と煙り出し 奥壁は岩盤の節理のため平面をなし、両側壁に対して、ほぼ直角になって全体として平面は矩形をなしている。煙り出しは床面から1mの高さまで残っており、この高さの所で直径0.8mである。これから上部は露出していたため、崩壊しており詳細は不明である。

灰原 時間的制約から窯体主軸方向とこれに直交する巾1mのトレンチを十文字に入れるにとどまった範囲はそれぞれ18m、11mで灰層の厚さは20～30cmで比較的薄い状態であった。

(4) 出土遺物(図版第一五～一七)

坏身(第6図③～④、⑩～⑫)

形態のうえから2種に分類できる。

[I] 古墳時代須恵器の形態をもつたもので、内面にたちあがりのあるものである。数量的には非常に少い。直径10～12cmの比較的小形のもので、蓋受けがやや短く、巾1cmほどのたちあがりは基部から口端部へ、やや外反しながら内傾する。底部はヘラケズリのまま、この部分とロクロ整形による胸部の境に大きな段がつく。坏蓋の[I]とセットになる。

[II] 蓋受けのないもので、口径が12～13cmのもの(a類)と10cm前後のもの(b類)との2つに細分できる。製作手法のうえからは二者とも全く同じである。平たい底部から胸部への境が明瞭で、この部分に稜線がはいることもある。胸部下方に2～3条の沈線がはいるものが多い。底部はほとんどヘラケズリである。II-a、II-bは個体数のうえでも多く出土しており、また坏蓋[II]がかぶさったままの状態で焼きついたものが採集されており、これらはセットになると思われる。

坏蓋(第6図①～⑤)(第7図⑪)

蓋は形態により2種に大別されるが、さらにその大きさによってそれを2類に細分することができる。

[I] 出土数は非常に少い。口縁部内面に、かえりのないもので、頂部と胸部の境に不明瞭な段がつく。頂部はヘラケズリのまま、直径が13cm位のもの(a類)第7図⑪と、10cm位のもの(b類)①がある。

[II] 口縁部内面にかえりのあるもので、出土個体数の上から量的にいちばん多い。これも直径の大

きさから11~12cm (a類) のものと10cm程度の小形 (b類) のふたつに細分することができる。

製作手法のうえからはa類、b類とも全く同じで、つまみがつく頂部は回転を利用して桶状のもので整形したものが多い。つまみは円錐台状で中央部がややくぼむものが多く、このつまみは非常に特徴的である。そのほかにやや扁平な円錐台状で頂部でまるくふくらむものや円筒形のもの、さらに擬宝珠形のものも若干まじっている。

口縁部内面のかえりは、その先端が口縁部と平行か、ないしはやや内側にはいったものが多い。a類、b類とも表面にヘラ描き記号をもつものが多い。

高 壱 (第6図 ⑩~⑭)

数量的には非常に少いが、形態の上から4種に分類できる。

[I] 杯[I]に脚のついた有蓋高杯で、杯部の内側に内傾するたらあがりがある。脚部は大半を欠いており、ほんの一部が残っているのみで形態は不明である⑩。図⑪・⑫とセットになる可能性がある。[II] 杯部は焼けひずみのためわん曲しているが杯[II]類と同じ形態で、内わんする脚部の下方に3条の沈線がはいっている。脚部は杯部よりも短く円筒部と杯部の境は焼成時の焼けひずみもあると思われるが直角に近く聞く。胎土には小さい砂粒を多量に含んでいる⑬。

[III] 杯部の一部と脚部を残すのみである。脚は円筒部を細くしぼり、中央部に不明瞭ではあるが2条の沈線をいれている。円筒部から杯部にかけてはラッパ状にひろがり、端部はやや上方へはねあがっている。円筒部内面にはしぼり目が顕著にみられる⑭。

[IV] 脚の一部を残すのみで、その形状は[II]にやや似ている。三個所に透しがはいっている⑮。

楕 (第7図 ①~⑤)

脚部はやや内側に広がり口縁部はまるく整形している。一部に若干外反するものが認められる。底部と脚部の境はまるくつくり、桶状のもので丁寧に整形している。

高台は高く、外方へ大きく広がり安定感がある。またその端部は上方へはねあげている。高台の取り付けに際しては杯の底部に1~2条の沈線をいれ、接合を良くしている。底部はほとんどへラケズリのまま、蓋と同じT字形のヘラ描き記号をいたるものが多い。内面はロクロ整形のあとでたて、よこに丁寧になでつけている。

楕の蓋 (第6図 ⑩~⑭)

形態的には杯蓋[II]と全く同じであるが、直径が13~14cmで大形である。つまみも同じく円錐台状を呈するものが多い。

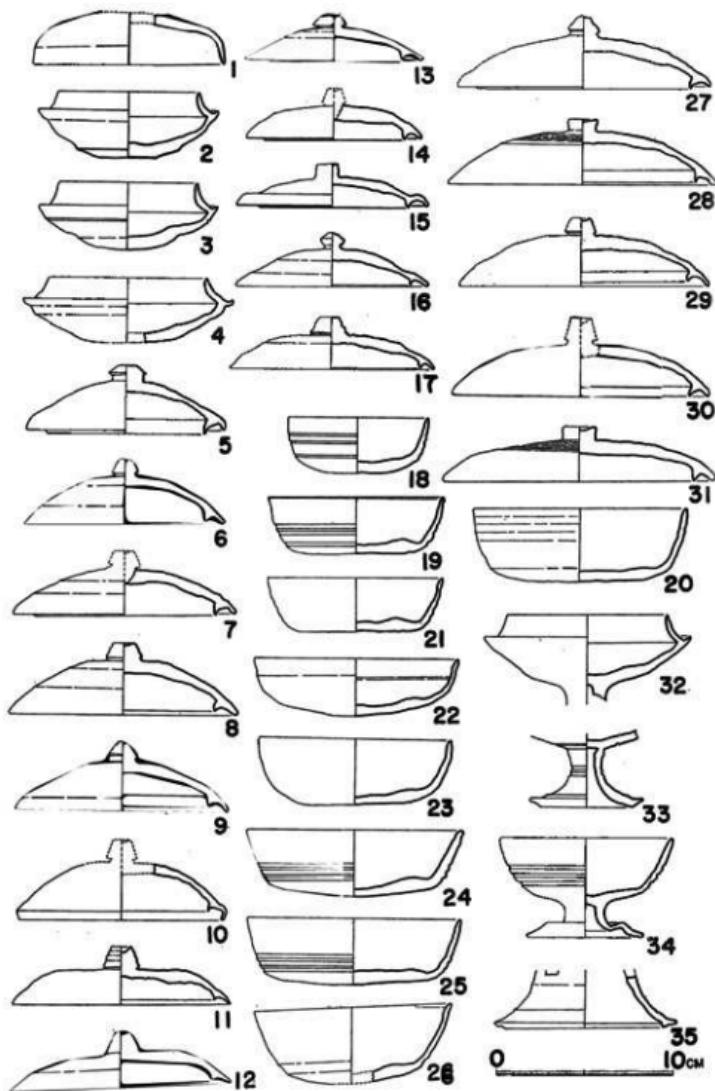
つまみのつく頂部は、桶状のもので整形されたものが多い。口縁部内側のかえりも端部より突きでるものはない。つまみと口縁部のほぼ中間にT字形のヘラ描き記号をもつものが多い。この蓋については、楕にかぶせた状態で焼きついたものが採集されており、セットになると思われる。

壺以外の蓋 (第7図 ⑥~⑩ ⑪~⑭)

大別して2種に分類されるが、大きさの相違により、それぞれ2類に細分される。

[I] つまみのないもので、直径10cm程度のもの (a類) と8cmの小形のもの (b類) とに細分される。

a類はへラケズリのままの平たい頂部に対して脚部が直角に近くおれまがり、その境には内、外面



第6図 雪ノ谷第1号墓出土須恵器実測図

ともに稜線がはいる。口縁部はまるくつくっている。外面頂部にヘラ描き記号をもつものがある。
b類はa類の脛部が内反ぎみに立ちあがるのに対して若干外開きになる。口縁部は外反し内外面にぶい稜線がつく、胎土に砂粒を多くふくんでいる。

[II] 頂部につまみがつくもので、これも大きさによって2類に細分される。a類はその頂部がII-aと比較してゆるいカーブをもち丸味をおびている。また頂部はヘラケズリのままで、平たい擬宝珠形のつまみがつく。

b類はI-bとほとんど同じ大きさであるが、口縁部はまるくつくっている。また頂部と脣部の境はI-bほど明瞭でなく、ゆるい一ブをなす。頂部にはボタン状のつまみがついている。胎土には多量の砂をふくんでいる。

皿(盤) (第7図 ⑩)

1点のみ採集されたが焼けひずみが大きくしかも小さな破片であるため正確な直径はわからないが、およそ19cmていどと思われる。

壺 (第7図 ⑪⑫⑬)

形態及び大きさのうえから3種に分けられる。いずれも口縁部の破片のみである。

[I] 口径が7cmの小形のもので、口縁部はわずかに外反ぎみになっている。肩部が蓋をうけるためにくぼみ、このため明瞭な稜線がつく。胎土に比較的多く砂をふくんでいる⑪。

[II] 大きく外反する口縁部の直下がわずかに張り出し、脣部へと続く。底部を欠いている⑫。

[III] 口径7.5cmで全体的に[I]よりも大形である。口縁部は少し内傾して短くたちあがり、端部はまるくつくっている。肩部に3条の沈線をめぐらしている。これと同じもので肩部の2条の沈線の間を一種の竹管文状のもので密にうめたものもある⑬。

壺 (第7図 ⑭)

⑭は底部のみで、少しまるみをもった平底状のものである。⑮は口縁部断面が三角形を呈し、器壁がやや厚い。

提瓶 (第7図 ⑯)

口縁部のみであるため正確な器種を定め難いが一応提瓶としてあつかった。

頸部はゆるく外反ぎみにたち、口縁部はわずかに内傾する、端部は平面をなし、内外に稜線がはいる。この口頸部の形態は比較的古い要素をもっており、杯Iと同時期になる可能性がつよい。

平瓶 (第7図 ⑰~⑲)

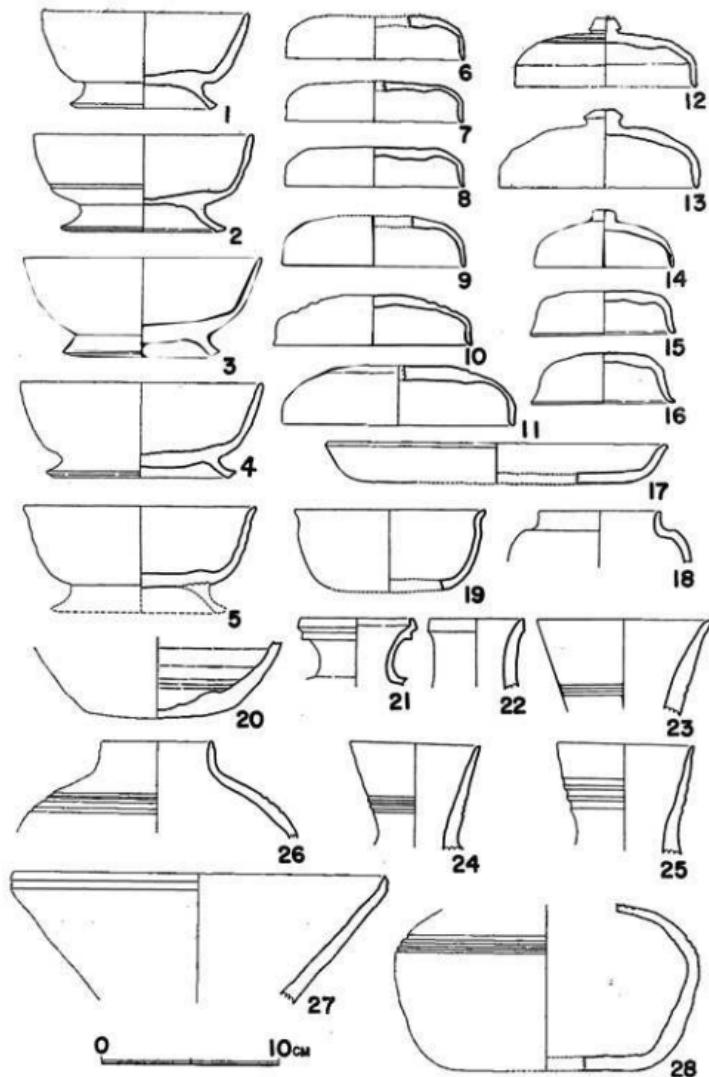
口縁部はすべて直線的に外開きにたちあがる。端部はまるくつくったものがほとんどであるが、1例だけ面をなすものがある。またいずれにも頸部に2~3条の沈線をめぐらしている。

脣部は総じて丸味をもち底部から脣部へはカーブを描いて変化してゆく。また脣部から肩部にかけても曲面をなして変化するが、その境に3条の沈線をめぐらしている。胎工に多量の荒い砂をふくんでいるのが目立つ。底部は一部にヘラケズリが認められるが、ほとんど未調整のままで粗雑である。

鉢 (第7図 ⑳)

口縁部は断面が三角形をなし、口端部直下に1条の巾の広い沈線がまわっている。

甕 (第8図)



第7図　琴ノ谷第1号窯出土須恵器実測図

大きさによって大、中の2種に大別される。

[I] 大形のもので、口縁部の形状によってさらに3類に細分される。

(a類) ⑥は前底部の左側壁にたてかけるようにして発見されたもので、甕の中では唯一の完全に復元できる資料である。

口縁部は朝顔に大きく開き、端部直下には櫛描き波状文がめぐらされ、さらにその下に1~2条の沈線がめぐらされている。肩部が比較的張り出し、底は丸底に終る。

(b類) ①~④の口縁部のみで全体の形状は明らかでない。口縁部には帯状の粘土をはりつけて、その上に2~3条の巾の広い凹線がめぐらされている。端部はやや内傾して平面をなし、内外に明瞭な稜線がつく。この口縁部からややはなれて下方に2~3条の沈線をめぐらし、その間を二段にわけて櫛描き波状文をめぐらしている。

(c類) ⑦も口縁部のみで、全体の形状は不明である。端部はするどく外反し、その下に一つの巾の広い凹線をつくるように凸帯をつけて、形態を複雑にしている。さらに下方に沈線をめぐらし、その上下に櫛描き波状文をめぐらしている。中にはこの波状文の下にさらに3条の沈線をめぐらしたものもある。

[II] 中形のもので、口縁部の形態によってさらに3類に細分される。肩部にT字形のヘラ描き記号をもつものがある。

(a類) 口縁部は少し外反し外開きなる。端部直下に1条の凸帯をはりつけて変化させている。⑧

(b類) 口縁部はほとんど直線的に外開きになる。その断面は三角形をなす。内外のたたき目は(a類)にくらべて荒い。⑨

(c類) 口縁部は若干外反し外開きになる。端部の断面はI-⑦に近い。

円面観(巻首図版、図版第一七、第16図①②③④)

7個体分あるが、大きく3種に分類できる。

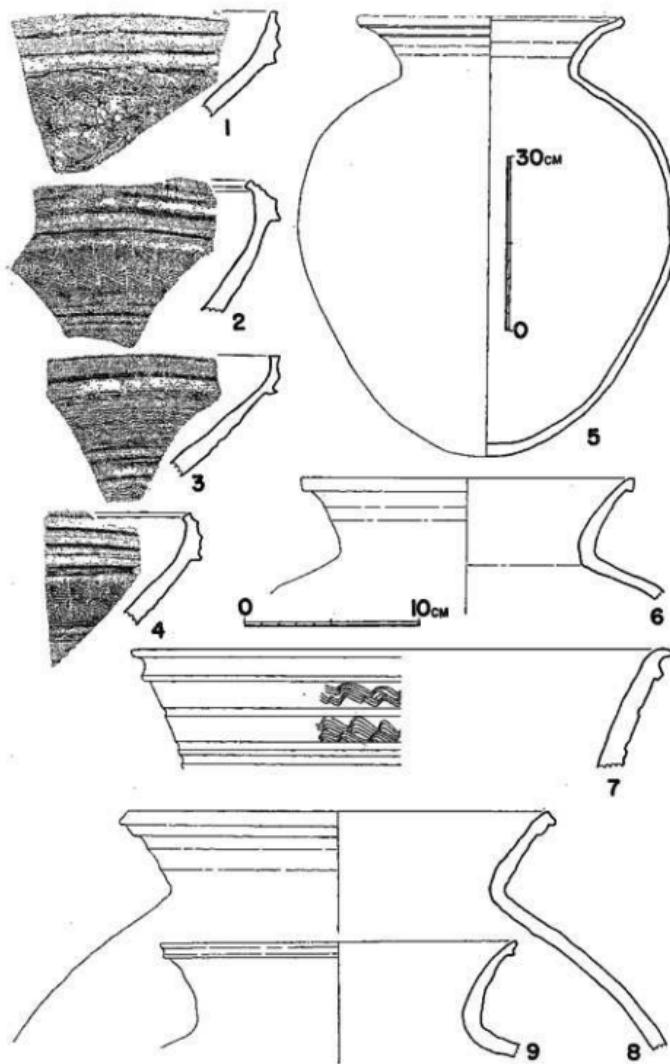
[I] 焼成部床面から2点、前底部の舟底状の凹部から1点、灰原から2点の計5点を採集した。

①は陸が海よりもほんの少し高くなり、陸の周囲は断面三角形の凸帯をはりつけたような感じで少し高くなっている。海の部分は巾1.5cmくらいで、その外側も少し内よりに三角形状に高くなっている。側面に2条の沈線を入れたものと、ロクロ整形そのままのものとがある。これらはいずれも焼成の窓の変形や、粘土の結合が不良のためレンズ状に焼きぶくれができる。このため正確な厚さを計測することができない。

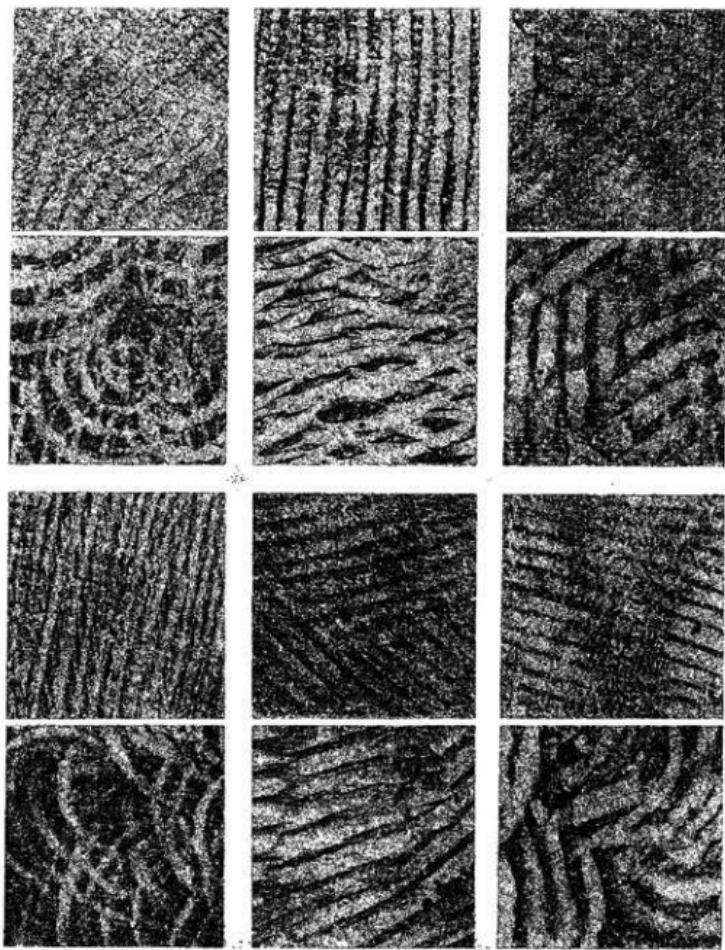
③は直径14.4cmで4cm間隔くらいで7個の透しがはいっている。また中央よりやや下に1条の沈線を入れている。

[II] 炎口付近の第二次の床面から2個体分が採集された。2つとも焼成が不十分で土師質を量する。おそらく不良品として廃棄されたものであろう。⑧は直径18cm、他の一つは16.5cmでどちらも脚の部分を完全に欠失している。厚さ1cmほどの円盤の上面周囲に粘土帯をはりつけ、さらに1.3cmの間をおいてその内側にも粘土帯をはりつけて、海と陸の部分を分けている。

内側の粘土帯は外側のものよりもわずかに高くやや内傾している。この粘土帯をはりつけに際しては指でなでついているが、内側すなはち海の部分にあたる側は、このなでつけが強く浅いU字形の溝を



第8図 塚ノ谷第1号窯出土須恵器実測図



第9図 寒ノ谷第1号墓出土須恵器裏内・外面のたたき目拓影(実大)

つくっている。裏面は刷毛で丁寧に整形されている。脚の形態及び全体の器高などについては不明である。(註1)

〔III〕④は海の外側の縁が外彎して外開きになり、他のものとは少し趣きを異にしている。ほぼ中央に2条の断面三角形の凸帯をはりつけている。直径19.2cm。

脚は端部のたたみつきが平坦でなく、中央が凸帯をはりつけたように複雑な形状をなしている。これにも透しがあるが、その形は不明である。胎土に多量の砂をふくんでいる。

(註1) この円面鏡については、これと同じ形式のものと思われるものが「考古学ジャーナル」2月号に出土状態の写真が掲載されている。この円面鏡は明治大学考古学研究室によって調査された千葉県市川市須和田遺跡出土のもので、国分寺に属する住居址から出土したものである。写真が出土状況を撮したものであるため細部について判然としないところがあるが、同じ形式のものと思われる。「千葉県市川市須和田遺跡の調査」(考古学ジャーナル2) No.29. 1969

ヘラ記号について

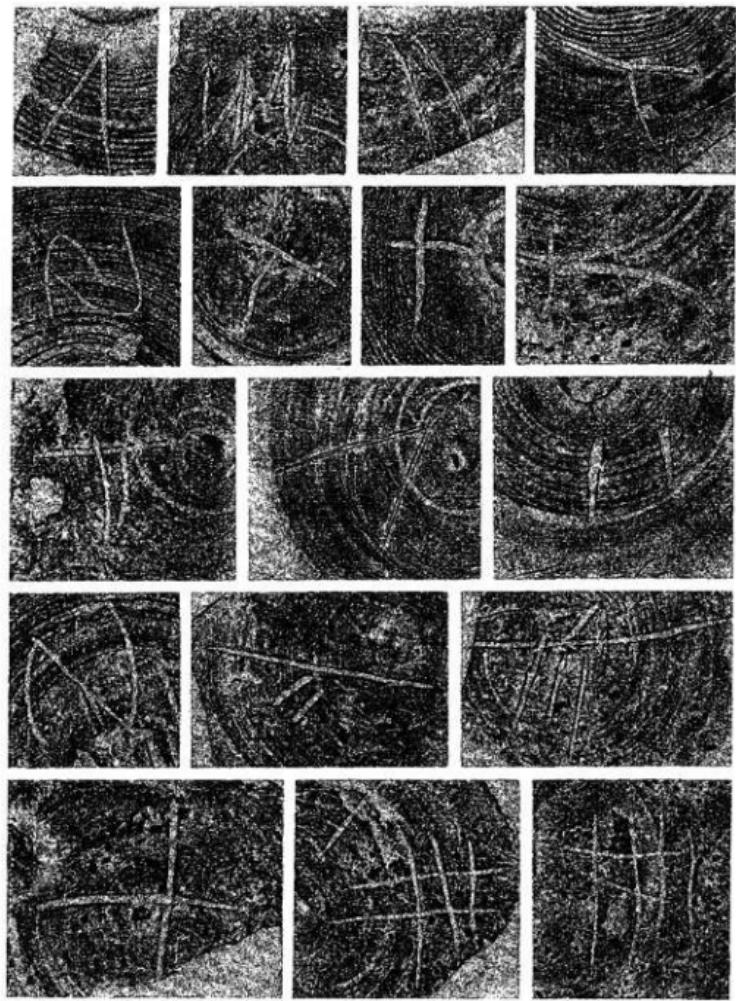
今回われわれが調査にあたった第1号窯からは、いわゆる一般に「窯じるし」と呼ばれているヘラ描きの記号をもつ壺・蓋・甕類がかなりの点数採集された。これらのヘラ記号をもつものについて、これまでに検討したところ第10図の如く、16種類の数に分類できた。この他にも別の種類に属すると思われるが破片がちょうどヘラ記号のところで割れたりして明確に全体が識別できなかったものについては、これを除外したし、また灰原全体を全面調査したわけではないので、種類的には、もっと増える可能性が十分にある。

さて、これらのヘラ記号については、これまでにもいろいろ論議がなされてきたが、その意味については未だ十分な解答は得られていない。一般にいわれている、いわゆる「窯じるし」ではないことは、すでに大川清氏ものべている如く一つの窯から數種類のものが出土することによって明らかであろう。

このヘラ記号の意味については、これを解説する方法としては、その須恵器を製作したいわゆる生産者の立場からする場合と、これとは反対に、使用する消費者の立場から解説する二つの考え方があり立つ。後者については久永春男氏がこれを使用者の側の必要にもとづいたものとして「使用者が自己の占用であることを示すため、または一定の用途に専属する器物であることを示すために、生産者にあらかじめ依頼した記号」であろうとしている。この久永氏の考え方に対して田辺昭三氏は、「もしこのような仮説から出発してヘラ記号を意味づけようとするなら、対象とする資料には、それらを使用する集落址や古墳の出土品を選ぶべきで、窯跡出土品を対象とするのは不適当である」として、これをしりぞけている。

われわれもこのヘラ記号についてさまざま検討を試みたが、結論は得られなかった。ここでは検討した過程で気がついた点を述べるにとどめる。

- ① 第1号窯には少くとも16種類という多くのヘラ記号が見られる。
- ② ヘラ記号をもつ器形は、そのほとんどが壺・蓋・甕にかぎられている。しかし甕・高壺にも若干例それがある。
- ③ 第1号窯の16種類の記号のうち「T」字形のヘラ記号1種類のみが圧倒的に多く、器形的には壺・蓋・甕・甕にみられる。
- ④ 「T」字形記号の如く点数の多いヘラ記号を詳細に観察すると筆順・施文位置・方向等記号の入れ方に規則性がみられる。このことはひとつの記号が複数の工人によって描かれたものではなく、一人の工人によって描かれたことを推測せしめる。



第10図 塚ノ谷1号窯出土須恵器ヘラ記号拓影(約4%大)

以上のような点から、われわれは積極的な根拠はないが、このヘラ記号は生産者の立場から必要とされたものではないかと考えている。

(註1) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園創立十周年記念 研究論集 第10号 昭和41年3月

小 結

これまで窯の構造、出土遺物について述べてきたが、次にそれについての特徴・問題点などについて若干考察を加えたい。

まず窯体については本窯は塚ノ谷窯跡群の中では唯一の階段式のもので、長さも11mに及ぶ長大なものである。階段は7段を数えるが、かなり雑然としたものである。これは基盤が特有の節理をもつ網状母片岩からなる岩盤であるためと考えられる。

床面傾斜角が37°～38°という稀にみる急傾斜であることは本窯のひとつの大きな特色でもあるが、これは煙出しが短いこととも考え合せて窯全体が煙突の役割をもつたしているためと考えられる。

次に前庭部にある大きな舟底状の凹みについては先にも述べたごとく、その用途については明確な解釈を得るにいたっていない。これについては、ひとつの「ものわら」とみる意見もあるが、その中からは少量の破片が採集されたのみであることから、この考え方は妥当な解釈とはいえないであろう。

この凹みを詳細に観察すると、その内部は灰・炭化物が充満し、その上に第2次床面とした焚口付近の補修の際の赤褐色粘土がおかれていることからみると、窯使用の段階では不用なものになっていたものと考えることができる。このようなことから、われわれはこれを窯使用以前の段階すなわち窯構築の段階で必要とされたものではないかと推測している。

次に出土遺物としての須恵器についてみると器形としては蓋・壺・椀が数量的に多く、特に直径が10～12cmの口縁部内面にかえりのあるもの（壺蓋II-④⑤）とそれとセットになると思われる杯身（II-④⑤）が多い。

これに高く外方に大きくはり出す高台をもつ椀と口縁内部にかえりのある大形の蓋が加わってくる。しかしこの椀の蓋は壺の蓋と比較してつまみおよび口縁部等の手法は全く同じである。このような壺および椀のあり方から見て、これらを様式的に分類するとすれば前者を第V様式に、後者を第VI様式にあてることができると思われる。これを時期的にみると第V様式を主体とするものに新しく第VI様式が加わりはじめた頃、実年代のうえからはおおよそ7世紀前半代におくことができるものと考える。

しかしこのように見て来た場合第6図③～④の壺と第7図②の口縁部および第8図④⑤の壺の口縁部破片について疑問が残る。この杯は小形であるといえ、外反しながら内傾してたらあがる口縁部の形態は古墳時代須恵器（第III様式）のものであり、第7図②の口縁部についても同様である。また壺の口縁部破片についてみてても口縁の形態および口縁直下の描き波状文のあり方は、これと全く形態を同じくしたものが第III様式のみを出土した第4号窯跡からも発見されている。このことは壺・椀を主体とする一群の須恵器との間に、形式的な大きな差が大きく、両者はスムーズにつながらなくなる。これについてはひとつの解釈として古い一群のものが少數であることから、これを他の窯からの流れ込みと考えることもできる。またこれとは別に、この1号窯の生産期間をある程度広くとる見方もできるが、そうした場合この両者の間に少くとも、あと一様式の一群の須恵器が必要であろう。いずれにしても古い要素をもつ一群の須恵器については疑問として残さざるを得ない。

次に円面鏡については第1号窯では7個体分を採集したが、中でも第16図②は通常の円面鏡とは

形態を異にしており注目される遺物である。これと同じような例は先にも述べた如く千葉県須和田遺跡からも発見されているが本例とは時期的に開きがある。

これらの冢ノ谷1号窯出土の円面硯は、他の共伴須恵器の様式のうえからも比較的古い例として資料的に注目されるものであろう。

(石松 好雄)

II 第2号窯跡

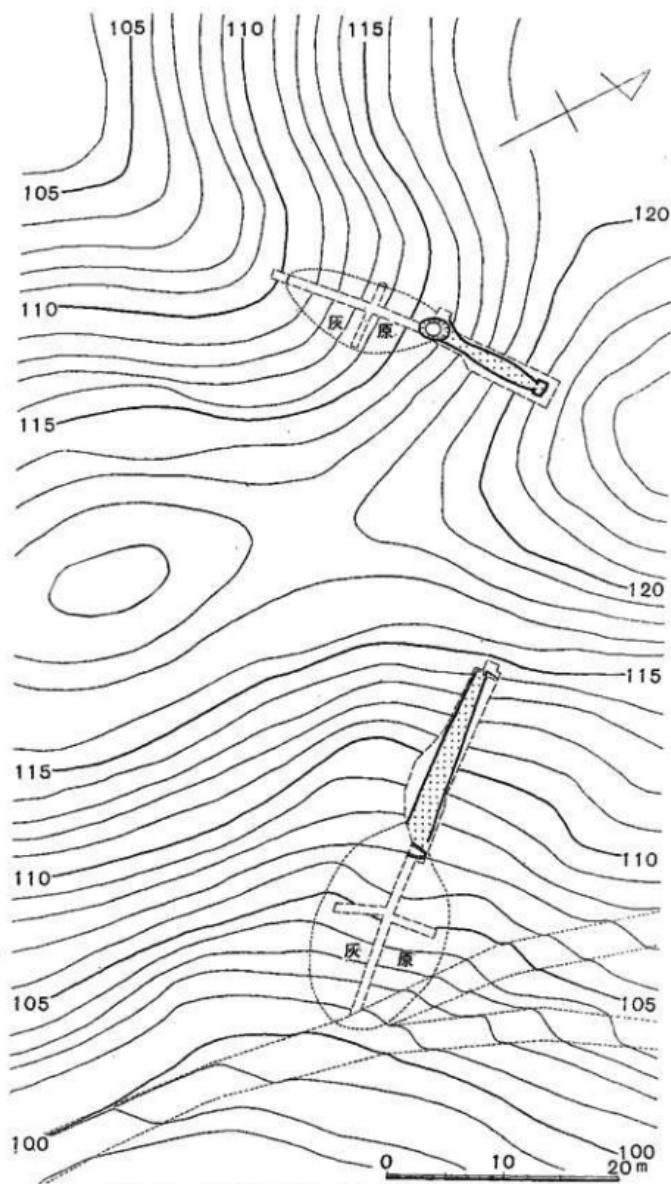
(1) 立 地 (図版第六)

第2号窯は、小高い尾根が環状にめぐって壠鉢状をなす塚ノ谷地区の北東斜面にある。窯体主軸の方向はN-55°-E。1号窯跡とは主軸延長がほぼ直交する位置関係にある。焚口床面で標高約115m、直上の尾根の標高は約126mである。付近一帯は伐採前竹や灌木によっておおわれていたが伐採後の地形によって窯体の発見は比較的容易であった。斜面の中間地点に灰原らしき狭い扇状の平坦部がみられ、その上部斜面には、幅約1mの陥没溝が尾根に向っている。扇状の平坦部以下からは、多数の須恵器片が表面採集され、灰原が続いている状態とみられる。発掘された窯体全長は約8m、灰原の全長は、12mであった。

(2) 窯 の 構 造 (図版第七~第八)

本窯の全長は主軸線上で8.6mを測る。黄褐色砂質粘土層の地山及び絹雲母片岩の岩盤を掘り下げて構築されており、スサ入り粘土で壁と天井を築き全体を地下に埋めた所謂密窯と思われる。ベースとなっている絹雲母片岩の岩盤は付近の切通しなどでもその露頭を見ることができるが、剥離しやすいものであり、その上に貼りつけた壁は非常にもらくて、原状の壁面をとどめていなかった。焚口から燃焼部に至る床は殆んど水平に近いものであったが、焼成部は地形の傾斜に伴って38°という急勾配をなす。そして煙道部に至ってまたほぼ水平に戻っている。床面のプランは、焚口が幅0.98mで焼成部中央まで徐々に広がり、最大幅1.48mとなる。煙道部入口は、幅0.64mを測りくびれ部を形成している。煙道部は洞丸の方形プランをなす。床は絹雲母片岩の岩盤がそのまま利用されており、傾斜は急であるが特に階段が造られたとは認め難い。それでも焼成部には岩盤が剥離して階段状をなす部分が數ヶ所あった。天井はすべて陥没して残存しない。

焚口、燃焼部 焚口は、床面とほぼ垂直に壁が築かれていて床幅0.98mである。この部分の壁は、スサ入り粘土の塗り壁ではなく掘り下げた地山の面をそのまま利用しており、青灰色に焼けてしまっている。焚口から約2mで焼成部の傾斜変換部に達する。焚口、燃焼部ともに床面の勾配は5-6°で水平に近いものであり、左右の壁は垂直からだいに蒲鉾状になり広がっていく。燃焼部に入ると岩盤を掘り下げて構築した壁に、さらにスサ入り粘土を貼りついているが岩盤自体剥離しやすく、壁は非常に崩れやすいガラ状の細片となっていた。勿論天井は全く残存していない。床面には多量の炭化物の層が認められた。



第11図 琴ノ谷第2号(上)、第4号(下)窓跡附近地形実測図

焼成部 煙道部へ至る傾斜の変換部まで約5.5mを測る。床表面は剥離して、所々に凹凸が見られる。焼成部との傾斜変換部から2mで最大幅となり床面で1.48mである。そこから煙道部にかけては徐々に狭くなり、煙道部入口において床幅0.64mと最もくびれる。また焼成部中央においては天井の推定高約1.2mであるのに対し、煙道部入口に至っては推定高0.6mと非常に低くなるようである。塗り壁の保存は極めて悪く、左壁においては焼成部の大部分で剥離した岩はだが露出していた。床面岩盤にはとくに階段を構築したとは認め難いが、数ヶ所段状を呈する部分がみられた。それは焼く須恵器を並べて置くには適当でなく、むしろ登るための足掛りとしての役を果すと考えられる。床の両端に互い違いになっており、実測の際には便利であった。床面岩盤は赤褐色を呈している。

煙道部 焼成部との傾斜変換部から5~10°の勾配で緩いカーブをなして約1.1mで奥壁へ達する。右壁の崩壊のため確認できなかつたが推定幅1.25mの隅丸の方形プランである。この部分は、もはや細雲母片岩は露出しておらず、地山粘土の表面が赤褐色に焼けている。壁は焼けしまっておらず崩れやすい状態となっている。奥壁および左右の壁はしだいに広がりながら煙突状に地表に抜けていたものと考えられる。

前部 焚口から約1mほど外に、前部床面をさらに約0.5m掘り下げた長径約1.5mの凹み穴が認められた。地山を掘り下げて造ったもので、長径約1.5m、短径約1mの楕円形をなす。凹み穴は、とくに焼けたような痕跡は認められず、最下部に約0.3mの炭混入焼土層、その上部に約0.2mの焼土混入炭層がレンズ状に堆積しており、このうち下層中には須恵器の破片は全く確認されていない。上部はさらに灰原炭層へとつながっていくものである。

窯内遺物の出土状態

本窯の出土遺物は、窯床面にはりついた状態ですべて破片となって出土した。器形のわかるものには、杯の蓋身、2点の円面鏡胸部があり、その他多くの大形甕の脣部破片があった。焼成部上部においてそれら遺物の出土は少く、むしろ傾斜変換部あたりから下部の燃焼部、焚口において出土した。これは窯体の傾斜に関係するとみられる。大形甕の同部破片は熱のためにかなり変形しており、置き台としての使用も考えられる。円面鏡胸部は1点は窯床面より、他の1点は窯口に堆積していた黄褐色土層中より発見された。

(3) 灰原の調査

灰原は焚口より斜面下方へ扇形に広がる。窯跡主軸を延長するトレンチとこれに直交するトレンチを設置して、堆積の状況と範囲を調査した。これによると灰原は、水平距離で長径約12m短径約6mの楕円形をしており、黒色灰層は地山の上に一層であり、最も厚いところで約0.3mを測ることができる。炭層の上には約0.15mの表土がおおついていて表面からは観察することができない。黒色灰層中には窯壁細片、焼土などは殆んど含まれず、窯体を再構築したような痕跡は認められない。

灰原の遺物の出土状態は、トレンチの調査で知見する限りでは層位的な差異は認められず、灰原全域に散布しているとみられる。

(真野和夫)

所分に凸凹が見られ
たら普通はかけては
中央においては天井の
ことをようである。塗
出していた。床面岩
だ。それは焼く須度
される。床の両端
ている。

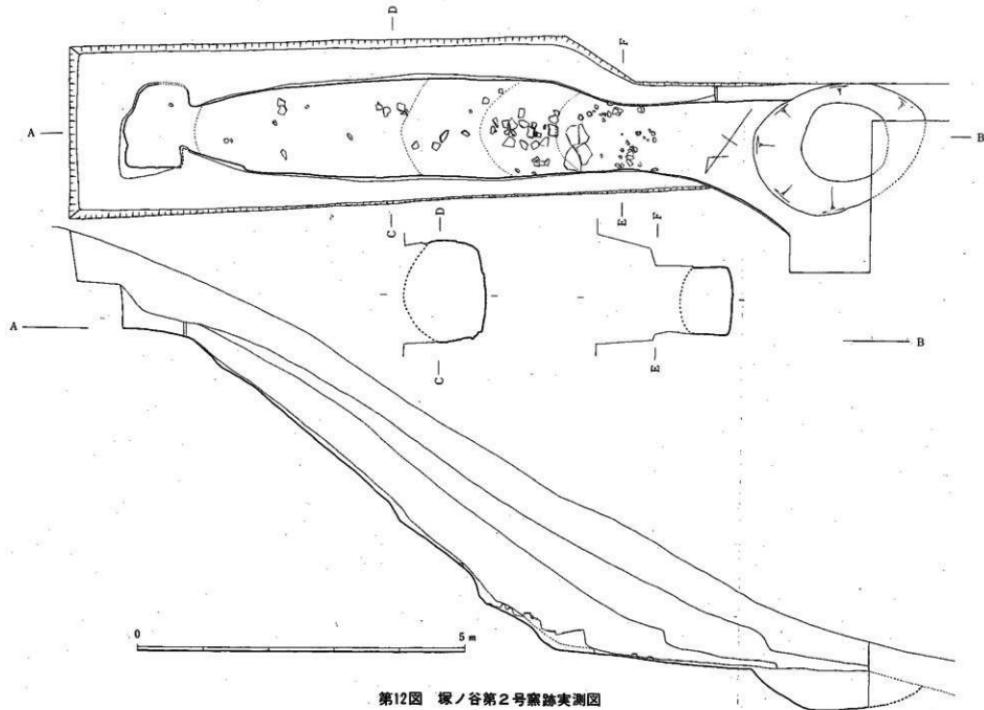
1mで奥壁へ達する。
この部分は、もはや
しまっておらず崩れ
地表に抜けていたも

約1.5mの凹み穴が
なす。凹み穴は、
部に約0.2mの焼
離されていない。

透影のわかるものに
は、焼成部上部にお
いて出土した。
透影しており、置き
て堆積していた黄

直交するトレンチ
約12m短径約6m
3mを測ることが
ない。黒色灰層
られない。

かられず、灰原全
野和夫)



第12図 掘ノ谷第2号窯跡実測図

(4) 2号窯出土遺物(図版第一八図)

壺(第13図17~23)

a類 口径14cm前後で、器高約4cmである。口縁部はわずかに外反し、口端面は丸味を帯びている。底部と体部の境界は不明瞭であり、ほぼ半円形状断面をなす。粘土紐の継ぎ目は明確に残っているが、横なで調整をしている。(1)・(2)がこれに属す。

b類 口径13cmから15cm前後のものまであるが、大きさではa類とそれほど大差がない。器高は3cm内外の浅いものである。(3)・(4)・(5)・(6)が属す。また(7)は口径は同程度であるが、器高が5cm以上もあり、他の壺にくらべて口径と器高との比が小さく楕状を呈している。これらは不完全な平底であるが、体部との境界は明瞭である。しかし、境が丸味を帯びるものと稜がはっきりするものの二種類であるが、一般に体部から口縁部への外傾度がはげしく、口唇部が外反するものもある。底部を含む内外面共に横なで調整がよく行なわれていて、粘土紐の継ぎ目は確かではない。(7)だけは底部外面をカキ目調整し、完全な平底になっている。

高壺(第14図34、35)

(1)は杯底部と脚部の上半部だけであるが、杯部はゆるやかに屈曲するもので、前項「壺 b類」で述べたように外傾度が大きくて浅くなるようである。脚部の径4.5cmで、下方に行くに従がって急に広がって短脚になると考えられる。壺底部外面にカキ目がみられるが、そのほかは横なで調整である。(2)は脚部の下半分のみである。脚端10cmで、脚部は丸く外懋し、その広がりは大きい。端部は内側に折り返えされ稜をもつ。厚みが脚端に至るにしたがい薄くなっている。裾になって急に広がる短脚のものである。

榪(第13図2、4、6、8、24~32)

a類 高台はあまり高くなく、脚端面が外側を向く。(2)・(4)・(6)のように脚先が極端に外を向き、上に向かってはねあがっているものと(3)・(5)のようにそうでないものがある。これらは前段階の特徴を残している。体部は外反するようであるが、体部と底部との境は丸味を帯びているものと、稜がはっきりつくものとがある。内外両面共に横なで調整をしているが、底部内面には粘土紐の継ぎ目をのこしている。

b類 (8)・(9)・(10)・(11)・(12)・(13)・(14)がこの類に属す。高台はわずかに外にひろがっているが、脚端面は水平となる。体部と底部との境の屈曲はわずかに稜を持ち、外傾度は大きくない。ほとんどのものが、高台の高さが1cm以内、脚端径9cm前後であるが、高台が約1.5cmもあるものや、脚端径6cm以内という小形のものもある。表面は内外共に横なで調整しているが、(8)のように粘土紐の継ぎ目を丁寧に平らにへら削り整形を施しているものもある。

蓋(第13図1、3、5、7、9~16)

a類 扁平な宝珠形つまみを有するもの(1)と、つまみを持たないもの(3)・(5)とがある。口径は16cm前後と大きく、口縁部の内面にかえりを付けて身受けとなしている。かえりの先端は、口端部よりも下に出るものはない。つまみのない(3)・(5)は頂部が扁平である。(1)の器高は他のものにくらべて高く弓状をなしている。器面は横なで調整で仕上げている。

b類 (7)・(8)・(11)は扁平な宝珠形つまみを有し、肩のところで下方に急に屈折しており、その高さ1cm前後である。口唇部はいくらか外反するが、口端面は水平である。口径は15cm前後で器高はつまみを入れて3~4cmである。つまみ周辺にはカキ目調整が行なわれているが、内外面は横なで調整で仕上げている。(10)は他のものと形態的には同様であるが、つまみを有せず、肩部付近から頂上部にかけての広い範囲にカキ目を行なっている。

c類 (9)・(10)は断面菱形状の宝珠形つまみを有し、肩部では直角またはそれ以上に下方に屈折しており、口縁部が他の類の蓋にくらべて非常に薄い。口径14cm前後で、器高2~3cmである。器面は横なで調整をしている。

d類 断面菱形状の宝珠形つまみを有する(10)と、扁平な宝珠形つまみを有する(9)・(10)がある、口縁部は折りまげられているが簡略化され、短かくて断面三角形状を呈す。口径は14~16cmあり、器高はつまみまでいれて2~3cmと非常に浅い。器面は各々ヘラ削やカキ目を行なっているが、仕上は横なでである。

壇 (第14図39)

(9)は口径9cm、器高10cmのやや大形の短頸壇で底部は約6cmの平底である。口縁部は垂直に立ちあがり、肩部はゆるやかに下がり気味で胴の上部で最大径を持つ。表面に粘土紐の継ぎ目をのこしている。肩部及び底部と付近はヘラ削りを行なっているが、その他は横なで調整をしている。

提 瓶 (第13図33)

(9)は口縁部の破片が出土している。口径は5.4cmであり、口頸部は短かく外反し、口唇部で折り返えして段をついている。口端面は斜向し、器壁は非常に薄い。

壺 (第14図36~38)

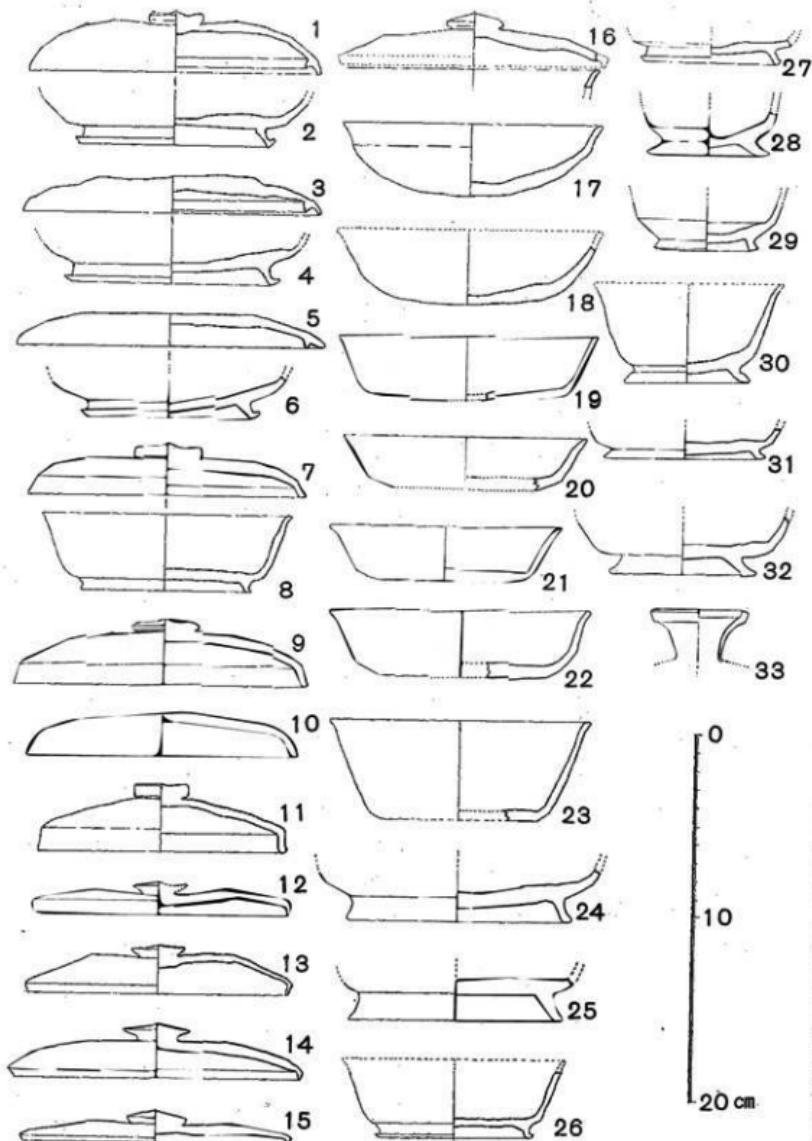
口径14~15cmの小形のものである。口頸部は短かく、口縁は外反している。肩部はなだらかであるが最大径を持つ(9)・(10)と、胴部が最大径となると思われる(9)がある。これは外面の口頸部と胴部の境より下方にカキ目を行なっている。いづれも器面は横なで調整している。

甕 (第14図40~47)

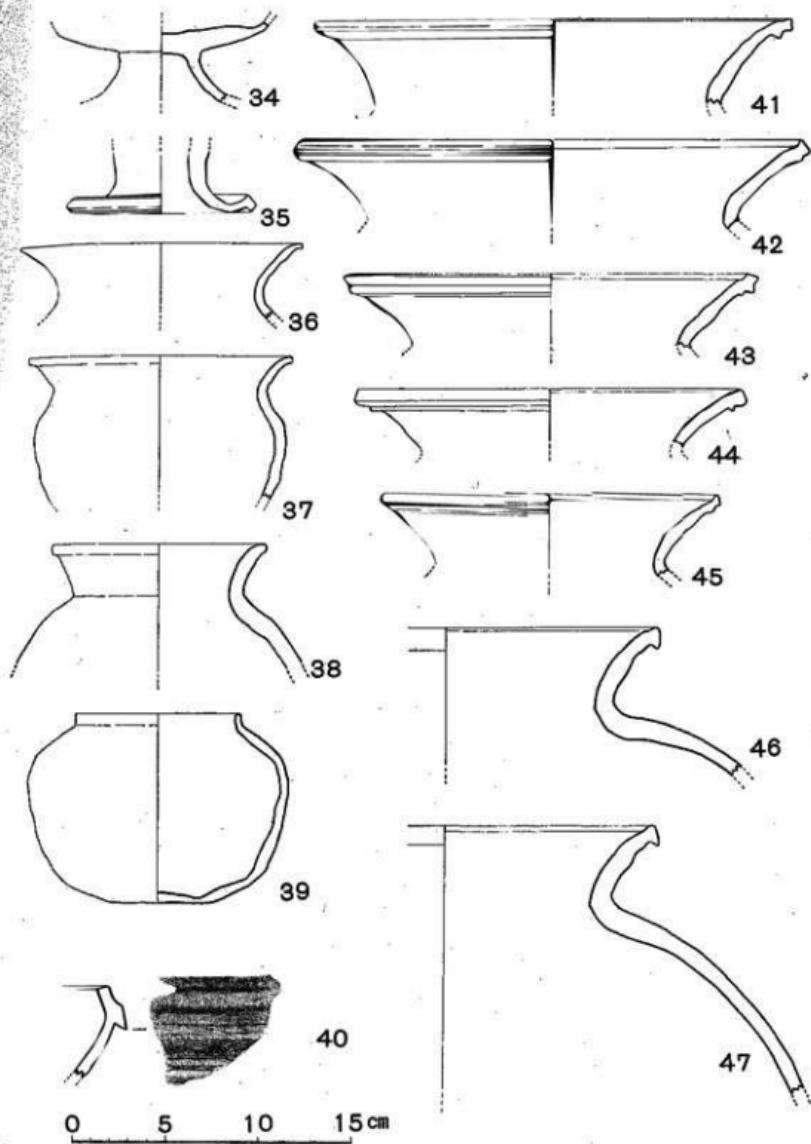
口径20~27cmの中形の甕で、口縁部が変化に富んでいる。口頸部は総体的に短かく、大きく外反し、口縁の外面に断面三角形の突帶をめぐらしているもの(9)・(10)・(11)・(12)と、口端を下方に屈曲させ折り返えしているもの(9)・(10)がある。器面調整いづれも横なでである。(9)・(10)は内面の口頸部と胴部の境より下方に同心円のタタキがある。(9)には外面にもわずかであるが斜行タタキがある。(10)は大形の甕になると考えられる。口径は57cmあり、口縁部は内彎している。外面に突帶をめぐらし、その下に横書き波状文を施している。(9)・(10)・(11)は、胴部の破片である。(9)は厚さ1.2cmで外面に横4cm縦2.5cmのタタキ目を施している内面は同心円のタタキ目の上を斜行タタキ目により消している部分もある。(10)は厚さ1cmで外面に細い斜行タタキ目を施している。内面は弧状のタタキ目を施している。(11)は厚さ1.5cmで外面格子目のタタキ目を施している。内面には同心円のタタキを焼重にも繰り返している。

円面鏡 (図版第一八、第16図)

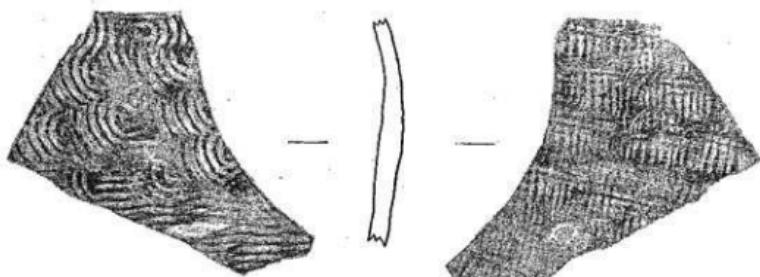
a類 脚部だけの出土であるが、(5)・(6)は脚部が大きく外反し、脚端径15cm、脚高2cm



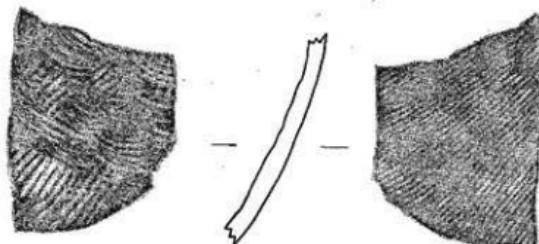
第 13 図 墓ノ谷 2 号墓跡出土須恵器実測図



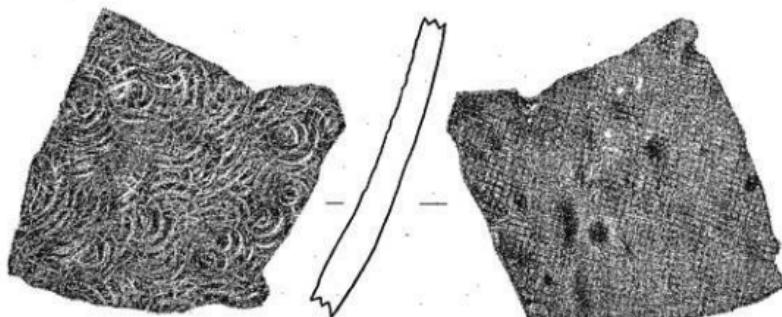
第 14 図 家ノ谷 2 号墓出土須恵器実測図



48



49



50

0 5 10 15 cm

第 15 図 琴ノ谷 2 号窯跡出土須恵器撮影

第13図(16)からこの時期はまだ瓶に蓋をかぶせた状態で焼いていたことがわかる。円面鏡も、a類の方がb類より古いが、土器の年代と時期を同じくして良いであろう。

(松本 豊・真野 和夫)

III 第3号窯跡

窯の位置と現状

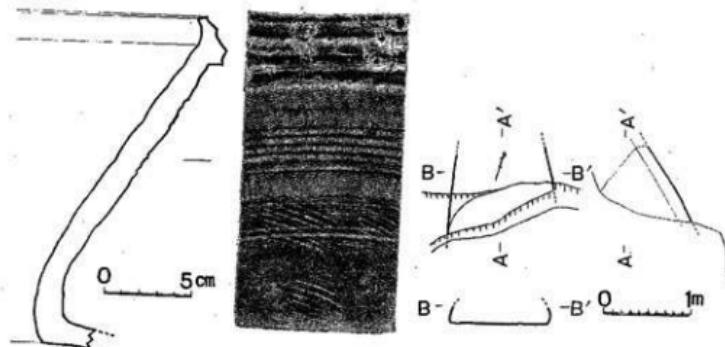
塚ノ谷の東側丘陵斜面の裾部付近で、第4号窯跡の南側に位置し、4号窯跡より低位ではほぼ並行している。窯体は、丘陵斜面の等高線に垂直に構築されているが、今日では焚口及び灰原部分は灌漑用溜池の内に埋没しているし、また焼成部のはとんどの部分は林道開墾工事の際に破壊され消滅しているので原形をとどめていない。わずかに、煙り出し付近と考えられるあたりの床面を長さ1m程度残すのみである。

窯体の標高はこの煙り出し付近の床面で100m余であり、主軸線の方向はN-18°-Wである。

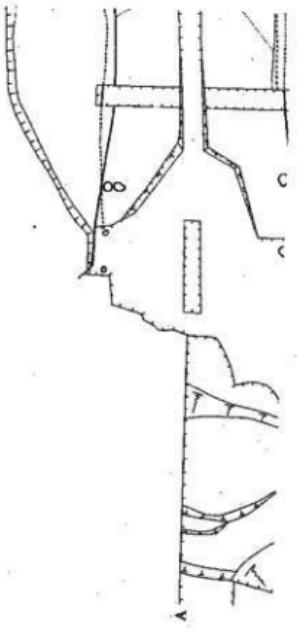
構造

現存する部分から考えて、この窯体は粘板岩の互層による地山を20cm内外掘り込んで、スサ入り粘土を貼りつけて側壁となし同様の粘土により天井を葺いている。側壁は床面より10cm上がったところで最大幅をとり、天井までの高さは約45cmで断面は扁平な半円形を呈している。なおガケ面での床面の幅1.2mである。

床面傾斜角は32度を示し傾斜は急である。焼成部は床面傾斜や地山の傾斜から考えて奥に行くにしたがって先ほそりの、わりに短く天井もそれほど高くない窯と思われる。床面壁面共に赤紫色を呈し堅く焼けている。



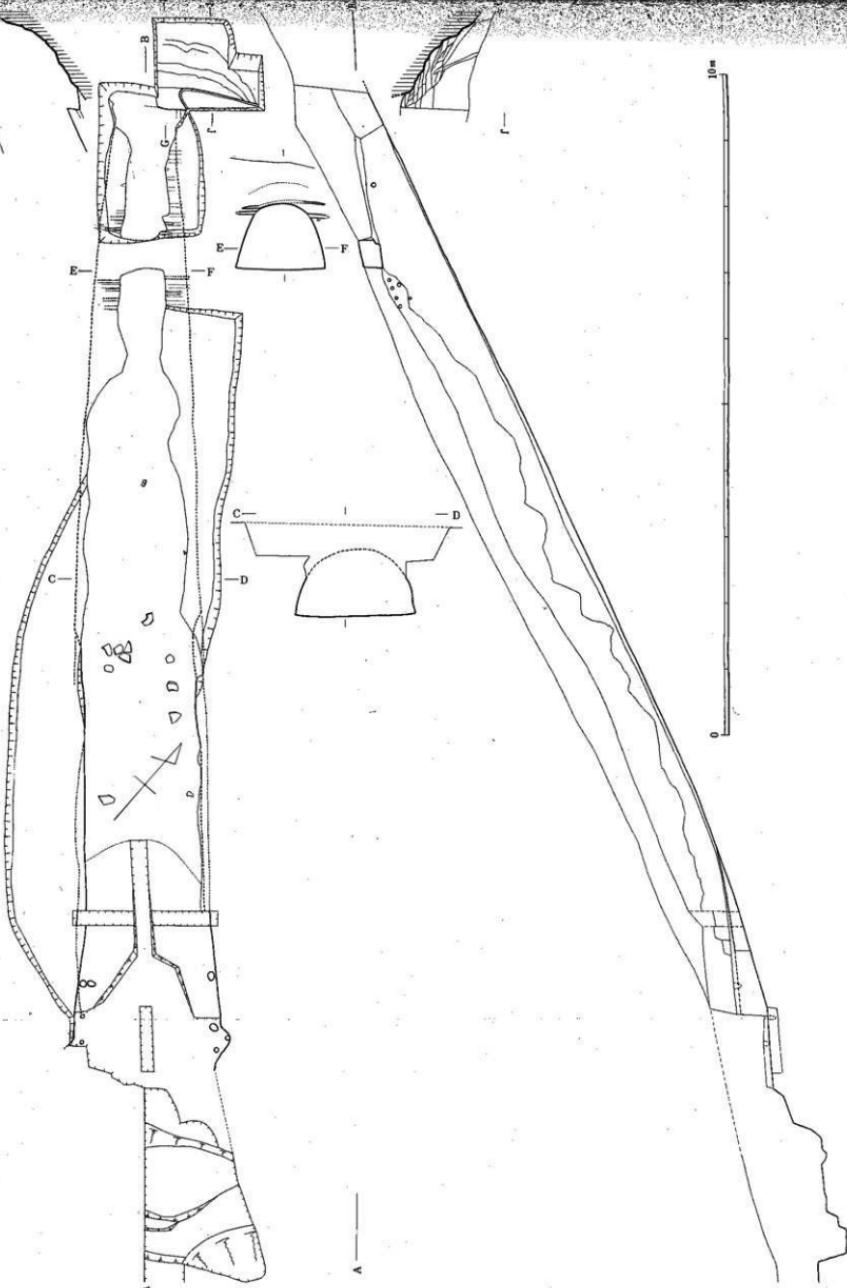
第17図 塚ノ谷3号窯跡実測図及び出土須恵器実測図拓影



行
使
能
用
で
い
複
雑

な
入
っ
た
面

こ
し
ま
し



第18図 塚ノ谷第4号窓跡実測図

遺 物 (図版第二〇の7)

壺 口径が42cmを測る大形の壺と考えられる。口頸部は外反し、口唇部において「く」字状にゆるやかに内彎している。口端面は平らに面取りされて上を向き、口縁直下に凸帶を貼付している。文様は櫛描き波状文と、ヘラ状施文具による擦痕との組合せである。頸部の下半分は斜行のタタキ目の上を横なでを行い磨り消している。

小 結

現存する窯体焼成部が1m余しかないので確実なことは言えないが、天井が低く断面は扁平な半円形であることや、焼成部が奥に行くに従がって先細りになるなど、第4号窯跡に類似の形態を示しているようである。

唯一の出土遺物である大形壺の施文の方法や形態が、4号窯跡より出土した大形壺に類似しているなどの点を考え合せると、この3号窯跡も須恵第III様式を下だらない時期に使用したと思われる。

(松 本 豊)

IV 第4号窯跡

(1) 立 地 (第11図)

塚ノ谷地区の東斜面に位置している。標高107mから115mのあたりに窯を構築しており、117mで尾根に達する。東麓眼下には北及び東に延びるせまい谷を望み、水田を形成している。1号窯及び2号窯にくらべて地形の傾斜はゆるく、ために窯の傾斜も緩傾斜である。発見の端緒となつたのは、この窯跡の下方、標高100mあたりから北上方にむけてブルトーザーによって切通された応急道の切通しに混えて須恵器片が露出したことであった。そこでこのあたりを上方に伐採していくところ、尾根にむかってやや斜交気味に細い陥没部があらわれ、一部には天井が陥没しないままに保存されているところも現われるにいたった。窯の全長は1号窯、2号窯にくらべてもはるかに長く、14mに達するものであった。発掘された窯の主軸方位はN40°Wである。窯の焚口下方には灰原が形成されることとは他の窯跡の場合と変りない。

(2) 窯 の 構 造 (図版第九～第一二)

窯の全長14.7mを測り、地山を切り下げて築造し、天井をつくって土砂をかぶせ、全体を地下に埋めた窑窟である。焚口から燃焼部・焼成部にいたる各部に特別の変化はなく徐々に煙出しにむかって幅せまくつくられている。天井はほとんど陥没てしまっているが、焼成部の煙出しに近いあたりに一部分天井の保存された状態がみられた。窯の中軸線はN40°Wで、床面の傾斜は通じて22°を示している。

焚 口 最も幅広く、2.2mを測る。この付近では床面がやわらかく壊れやすい傾向があって、50cmほど下部にさらに焼きしまった床面があって、床上げしている様子が知られた。第二次床面の焚

口は第一次床面のそれよりも50~60cmばかり内側にすんでいたらしく、第一次焚口の南西壁沿いに径6cm、深さ8~10cmの穴二個があり、また北東壁治いに径8~10cm、深さ6~10cmの穴三個があるが、第二次床面では50~60cmすんだ南西壁沿いに径10cm、深さ5~10cmの穴二個が、また北東壁沿いに径10cm、深さ20cmの穴一個がみられて、第一次焚口の場合に対応していると思われる。この両壁沿いの穴は天井部分の構造に関連するものであろう。また平面形で焚口がせばまるような様子はみられない。

燃焼部 第一次焚口から約3m窓内にすんだあたりまでが燃焼部にある。第二次床面は5°の傾斜でゆるく焼成部へとつながってゆく、また両壁はすき入り粘土を第一次壁の上に塗りかけて窓幅を各々10cmずつせまくしているので、平均して1.8mばかりとなる。第二次窓壁は過熱して剥落しやすくなり、壁面も荒れてガラ状塊となって落ちてくるのである。焼成部では十文字にトレーニングを設けて第一次床面と壁面を露出してみると、床面は16°の傾斜を示しながら奥にすすみ、燃焼部との境界あたりで床上げした部分と第一次床面が接合する。乃ち第二次床面は燃焼部だけにみられるわけである。また第一次壁面は第二次のそれより10cm広いので幅2mとなる。第二次床面つくりにあたっては粘土で床張りしているが、その下には第一次床面との間を第一次操業時の須恵器破片をつきこんで埋めている。

焼成部 本窓の大部分を占めるのは燃焼部につづく焼成部である。煙出しまで約11mの長さを占め、窓幅は燃焼部との境界あたりで1.8mあるが徐々に煙出しにむかってせばまり、1mまでになる。また第二次壁面の塗りかけは燃焼部の境界から3.4mほど奥まで及んでいるが、これより奥は第一次壁面のままである。床面は赤褐色に焼けて固く、煙出しまで見事な斜面をなし、傾斜は一様に22°である。焼成部の8mばかり奥のあたりに天井の保存されたところがあり、横断面蒲鉾形をなす。高さ1mを測る。このあたりから煙出しにかけては壁面が天井近くまでよくのこっていて、焼きしまりも固いが、注意をひくのは天井に近い両壁の部分に二段式或は一段にならんだ徑5cmほどの孔がほぼ水平に壁面深く穿たれていることである。これは天井を構築する際に粘土を塗りかけるための骨組として水平に張りわたした丸木の痕跡であろうと考えられる。天井部近くまでよく保存されたために確認できた重要な発見であった。

天井部が保存されたところを境として、これより焚口までは陥没した天井の焼け土などが床面に密着しているが、これより煙出しまでの部分には床面と陥没した天井との間に約5cmばかりの厚みをもった泥土の堆積層がある。これは降雨などによって流入した堆積土と考えられる。このことは焼成部の上方が廃窓になってからも或る期間窓内が空虚のままに保存されていて、煙出しがから泥土が流入し、やがて天井の陥没がおこったことを物語るものであろう。この泥土の中から塚ノ谷1号窓と共通した擬宝珠彫みをもった蓋の発見があったことから、少く共7世紀頃まで焼成部上方の天井が保存されていたといえよう。

煙道部（煙出し） 焼成部と特別区別されるような状態ではないが、先端で床面が垂直に切れていて、厚み18cmのはり床であることがたしかめられた。床の東端から排水溝と思われる溝状遺構が東側に延びている。煙出しこの床面の切れたところと考えられるが、これより北側では岩盤が露出して急に高くなり、岩肌が赤く焼けていて、岩盤の露出斜面を利用して煙道にしていたことがうかがわ

れる。

前庭部 第一次焚口から外に1mばかりのところで床面がさらに下って凹み穴がみられる。特別焼けているような痕跡はなく、黄褐色粘質の地山を掘り凹めたもので、1号窯や2号窯でみられた定形をなしてもいい。凹み穴内からその上部は炭層でおおわれ、灰原へとつながってゆく。この中にはほとんど遺物は含まれていない。この凹み穴の全貌を露出することは時間の関係上断念せざるをえなかつた。

(小田富士雄)

(3) 窯内遺物の出土状態

本窯内上層において遺物は、11mにおよぶ焼成部の中央以下の部分で殆んど一塊となって出土をみた。遺物の種類は壺・高壺・壠・壺・大甕など種類、量ともに豊富で、とくに壺が多い。中には、身と蓋と組み合わされて、あるいはそれに近い状態で完形のまま出土した2例もある。この位置で出土をみたものの殆どが、黄褐色の焼成不十分のものであること、また床上粗砂の混った窯壁の破碎細片の層中からの出土であることなどからして、焼成段階での窯体の崩壊または取り残しということも考えられる。しかし出土の状態は原状を保つものとは言い難く、その後の土砂の流入によって動いたとみられる。

また、第二次の床を構築して焚口を一次のものより内側へ設けた際に壁を貼り足して、窯幅を狭まくしているが、この壁の内部からも遺物の出土があった。

一方、十字形トレンチを切って二次の床を一次面まで掘り下げたが、ここでも窯壁破碎片・炭の混入した赤褐色焼土層などとともに突き壓められている遺物の出土をみた。煙道部床上に堆積している黄褐色土層を除去作業中に、1号窯跡出土のものと同種と考えられる杯蓋が出土したがこれはおそらく後世の流れ込みと考えられるものである。

(真野和夫)

(4) 灰原の調査

窯跡の前方にやや盛りあがった部分があり、これが下方のブルトーザーによる切通し面までつづいて灰原であることがわかった。窯跡の主軸を延長するトレンチとこれに交叉するトレンチを設けて堆積状況と範囲をさぐる調査を行った。範囲は窯の前庭部につづいて下方15m幅12mくらいにわたって広がっているが、それは等高線にして107mから100mのあたりに相当する。前庭部のあたりではほぼ水平であるが、これより下方30°の傾斜で下る斜面にそつて炭・焼土・須恵器片が堆積し、その厚さは40cmで、さらにその上を15~20cmの厚さで表土がおおっているので、灰原は現地表にはまったく露出していない。この窯跡主軸線上が最も高く盛りあがって両側になだらかに下る。この最高所では灰原層が凸レンズ状断面をなす堆積を示し、縦断面にくらべて複雑であるが、各層もうすいので、短期間の頻繁な操業による窯からのかきおとしを物語るものであろうか。

(小田富士雄)

(5) 灰原遺物の出土状態

灰原出土遺物の器種は窯内出土のものよりさらに豊富な資料を提供してくれたが、発掘に当つて明

瞭な層位的変化は認め得なかった。灰原に入れた十字形トレンチによって知る限りでは、どちらかと言ふと中央部よりも周辺において量的には多く出土をみた。とくに切通しに面した部分では浅い表土層下の黒色灰層から杯・甕片などとともに多量の小形高杯の脚部破片を得た。黒色灰層の深いところでは遺物を包含する割合はしだいに少くなっていた。

(6) 遺 物 (図版第一九～第二〇)

a) 窯内の遺物 灰原においても同様であるが遺物のはほとんど全部が細片となっており、実用に供し得る完形品は杯が蓋身それぞれ2個出土しているのみである。この杯はヘラ記号も全く同じであり本来セットになるものであろう。品質は濃灰色を呈しきわめて硬質のものもあれば、黄褐色を呈して焼成不十分なもので一見土師的なものもある。胎土は砂粒が少量混入したものがみられる程度で一般に精良である。成形は焼き損じのため変形したものを受けければ、入念に仕上げられたことが観察される。

i) 窯内上層の遺物 この中には窯が最後に廃棄されたときに窯内に残っていたものと、二次壁内塗り込められていたものがある。二次壁が崩れやすく厳密な区別が不可能であった。

杯 (第20図)

I式 蓋うけをもつものをI式とした。

a類 蓋うけたちあがりの高さが1.5～1.9cmのものをa類とした。(1)は最大径13.6cm高5.3cmたちあがりの高さ1.9cmである。殆んど完形で焼成不十分のため黄褐色を呈している。内側に傾きつつ外縁する蓋うけたちあがりが高いので蓋をした場合に蓋上部に接する。受け部先端はたちあがりとなどらかに連なって丸くおさめている。蓋(1)とヘラ記号も同一であり重なった状態で出土をみた。

b類 蓋うけたちあがりの高さが1.4cm以下のものである。(2)は最大径12.4cm高4.6cmたちあがりの高さ1.2cmである。高さ4.3cmの蓋(1)と組みあわされた状態で出土した完形品である。

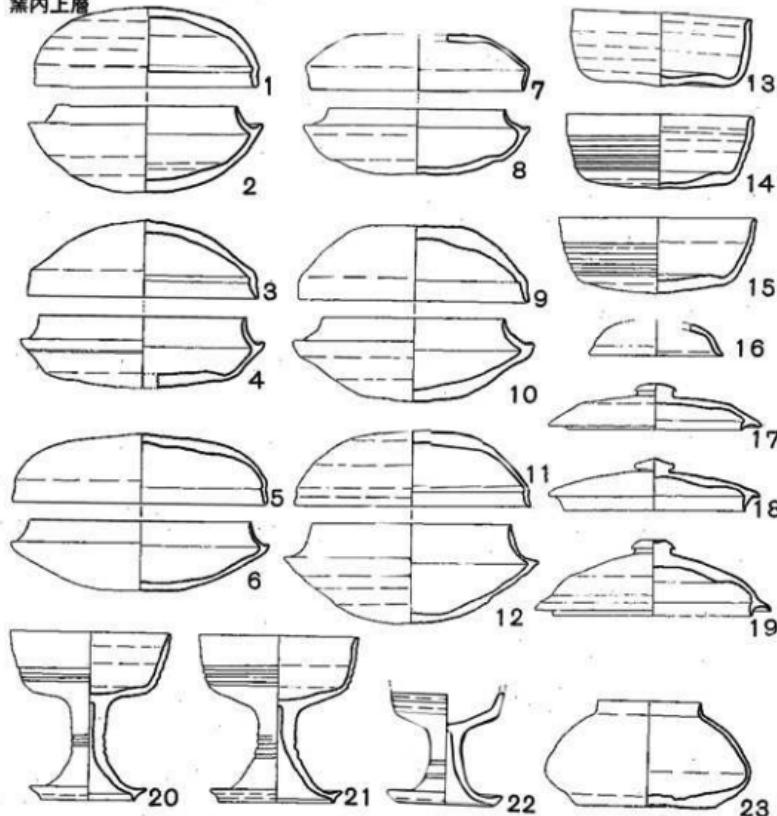
受け部は外上方に延びている点で(1)と異なる。焼成不十分で黄褐色を呈するが、全体に調整はきわめて入念になされている。(3)は最大径13.8cm高さ3.7cmで径に比して扁平な感じである。受け部が非常に狭く端部も小さい。薄手で調整もよく焼成は青灰色硬質である。(8)は最大径12cm高さ3.6cmたちあがりの高さ1.0cm。小形で薄手の造りとともにたちあがりの形に特徴をもつ。たちあがりの外縁度が大きく、しかも受け部に至るあたりで一度内縁してから体部に接合されている。青灰色で焼成は良好である。(9)最大径12.8cm高さ4.5cmたちあがりの高さ1.3cm。非常に厚手で蓋受けたちあがりは(8)の特徴を多少もっている。赤褐色を呈し、底部約1cmがヘラ削りされている。(9)の蓋とはセットになる。

杯 I式 の 蓋 (第20図)

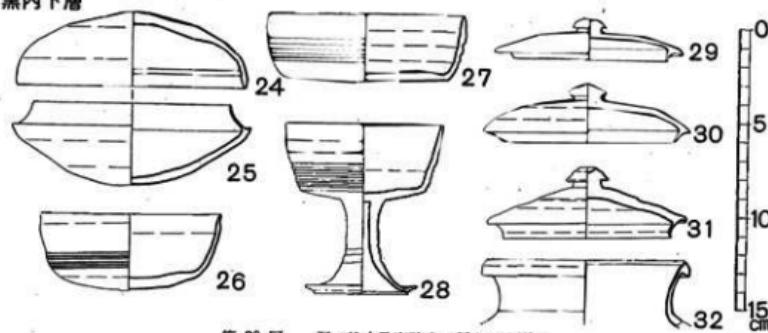
a類 (1)によって代表される口縁部の形態である。(1.3.9.11) 口縁部の高さ1～1.3cmのところで外側では肩がはって、体部と天井部との境をなし、内側では幅2～3mmの沈線が入る。口縁は一般にやや外反した形態をとる。

b類 (5)によって代表される口縁部の形態である。外部はa類と大差ないが、内側a類では沈線が入るところが一条の鋭い稜となっている。全体からみると数は少い。

窯内上層



窯内下層



第 20 図　　琴ノ谷 4 号窯跡出土須恵器実測図

c 類 (?)によって代表される口縁部の形態である。肩部でカーブを変えて内傾して口縁を形成する。数は少い。

II式 この時期で出現する蓋うけのつかない形式のものをII式とした。(第20図13、14、15)

a 類 ⑩最大径9.6cm高さ4.0cm。体部の沈線がなく、底は平底に近くて口縁部でわずかに外反する。茶褐色を呈し硬質で焼成はよい。1点出土している。

b 類 ⑩最大径10cm高さ4.0cm。体部に5条の沈線がめぐり底部は丸みをもつ。口縁はa類に比べやや広がり気味である。

高 壺 (第20図20~22)

II式 小形の高壺をII式とした。

a 類 ⑩で代表される小型の高壺をa類とした。壺部最大径8.4cm高さ8.9cm壺部に2~3条の沈線がめぐり脚中央に沈線がめぐる。脚中央のものは一見2~3条のように見えるが実は螺旋形にめぐっている。壺底部から体部へカーブする部分に明瞭な稜がつかないことでb類と区別される。脚端部は斜上方に鋭い稜をもつものと鈍くまがるものとある。壺底部外面には粗い調整のカキ目が残っている。

b 類 ⑩でa類に比べると小形である。他の個体から壺部を復原すると最大径7.4cmとなる。壺底部から体部への移り変りに明瞭な稜がつく以外はa類と大差はない。

蓋 (第20図)

I式 身受けかえりを有するもの。

a 類 口径は種々あるが壺II式に伴なうとみられるものをa類とした。(17.18.19)天井頂部に扁平なつまみがつく。形態は一様ではないが、17.18.19に示すものが基本的である。高さは2.5~4cm。口縁部に近く内面に身受けのかえりをもつが、すべてかえりの方が口端より突出した形となる。

II式 壺に伴なわないと思われる蓋をII式とした。(10は最大径7.1cm復原高1.9cmを測る。薄手でゆるやかに外彎する口縁部をもつ。赤褐色で焼成不十分である。

壺 (第20図23)

窯内から唯1点出土した。⑩最大径10.8cm口径5.4cm高さ5.6cmである。底部は厚みをもつが体部は薄手で調整も入念である。頸部最大径が下方にあり安定を示している。赤褐色を呈する。蓋II式とはセットになるのではないかと考える。

壺 (第21図33)

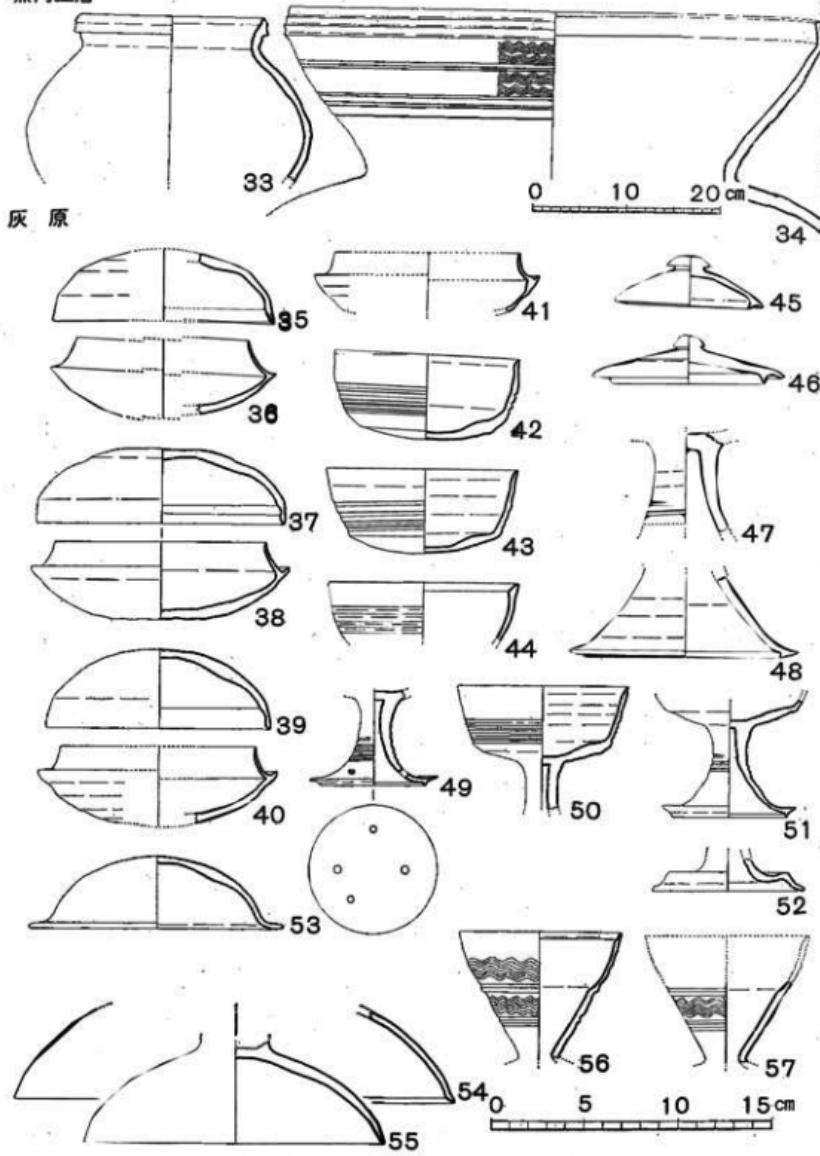
窯内からは⑩の1点のみである。最大径15cm口径9.4cmで高さは不明である。やや外彎する口縁部に凸帯をめぐらすのは蓋にみる手法と同じである。体部はゆるやかなカーブでふくらんでいる。赤褐色で硬いが焼成不十分と思われる。調整は入念であり陶土も精良である。

壺 (第21図34)

口径56cmを測る大壺である。⑩口縁端がく字形に内彎し外面に3条の沈線がめぐる。頸部はすばまって3条と5条との沈線によって3つの部分に分割され上部2つに横描波状文が施されている。体部内面には同心円の叩きが入る。暗褐色硬質で焼成は十分である。

ii) 窯内下層の遺物 二次床面に入れた十字形トレンチ内よりの出土である。

窯内上層



第 21 図 磐ノ谷 4 号窯跡出土須恵器実測図

坏 (第20図25、26、27)

I式 b類 壴は最大径 12.6cm 高さ 4.3cm 蓋うけたちあがり 1.3cm である。蓋うけたちあがりが非常に薄いのが目立つ。底部は多少とがり気味となる。調整、焼成ともに良好である。蓋のa類に属しヘラ記号は身と一致している。

II式 b類 壴は沈線が細くて 6 条入り、仰では平底になる点が b類のうちでも異色のものである。

高坏

II式 a類 壴は杯部口径 8.4 cm 高さ 9.0cm である体部に 5 条、脚部に螺旋状に沈線がめぐる。杯底面にヘラ記号が描かれている。脚端は斜上方に鋸い稜をもつ。焼成は十分になされており濃青灰色を呈する。

蓋 (第20図29~31)

I式 a類 (29. 30. 31) 窯内上出土のものと殆んど同じであるが、(29. 31) では天井に粗い同心円のカキ目が残っている。つまみの形状も上層のものと変らない。

壺 (第20図32)

壺が一点出土した。口径 10.6cm を測る、口縁部凸帯が上層のものより誇張されている。口縁内面はわずかに段がつく。

b) 灰原の遺物

壺 (第21図36~44)

I式 a類 (36. 38) 壴はやや小形であるが蓋うけたちあがりが非常に高くて、(38)にみるとように受け部先端になだらかにつらなる。整形のよいものである。壺は蓋うけの落ち込みについて鈍い先端へとつながる。

b類 (40) 蓋うけたちあがりの接合にクセが見られる。体部が薄手であるため接合部の厚さが目立つ。最大径 11.8cm 蓋うけたちあがり 1.4cm。

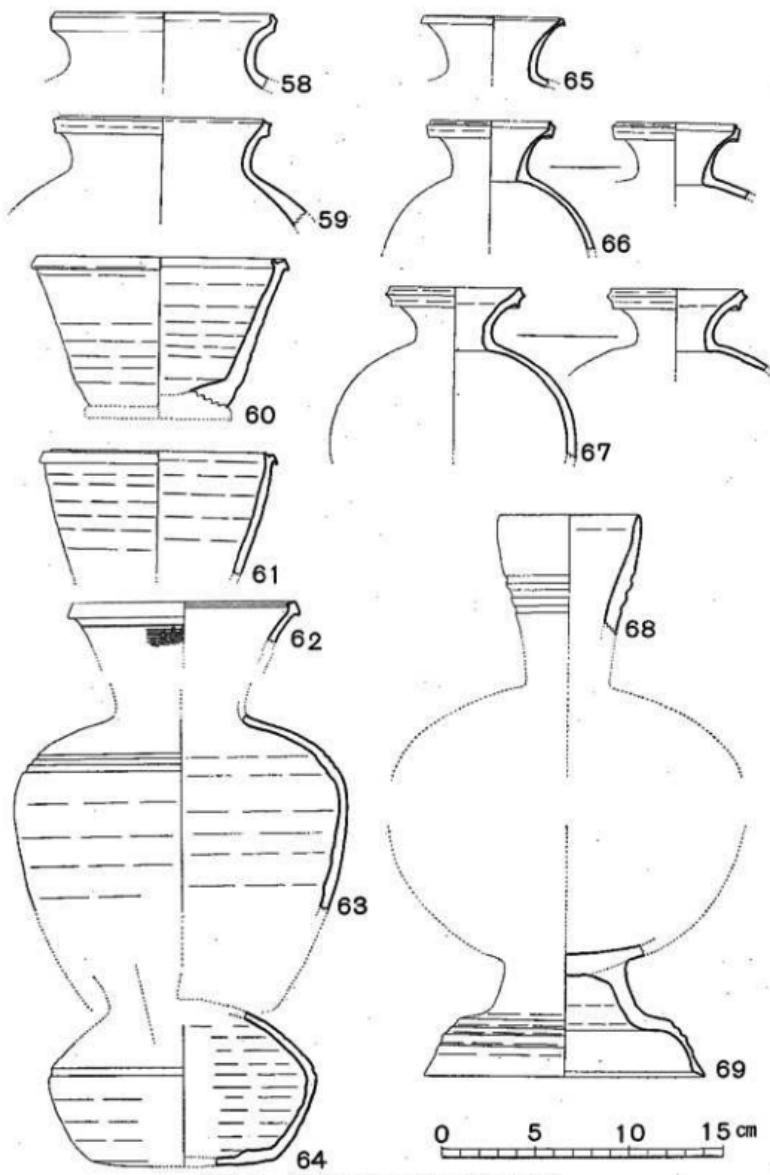
II式 a類 (42. 43. 44) (40)は小片であるが形状にはほとんど大差はない。口縁の形がそれぞれ少しづつ違いをみせている。すなわち仰ではやや内傾のきざしがあり、(40)は直線的に延びており、(44)では口縁内側に稜のつくくらみをもたせている。(40)は沈線の位置がやや高く調整に当たって入念である。

蓋 (第21図45、46、53、54、55)

I式 a類 (40) 天井部にうすい粘土の貼りつけのあとが残っている。つまみを取付けた時のものであろうか。断面台形のつまみがつく。

I式 b類 壴身受け・つまみのつく点では a類と同じであるが、径が著しく小さい。身受け内側のかえりも口縁の高さに近いものになっている。径 7.8cm を測る。杯 II式にはこのような径をもつものは出土していないところから杯の蓋ではないとみられる。径から言えれば小形高杯に適するのであるが小形高杯がこのような蓋を伴なうという確証はない。台形に近いやや大形のつまみがつく。1点のみである。

III式 (53. 54. 55) 蓋状のもので用途不明のものを III式とした。(53)はあたかも杯の蓋につばをつけたかのような形態をしている。灰白色で焼成不十分である。(54)は口径 23.5cm の大形のもので、薄手でゆるやかに彎曲している。黄褐色で一見土師のようである。(55)逆にして土師の高杯を思わせる。



第 22 図 桑ノ谷 4 号窯跡灰原出土須恵器実測図

るような形状である。つまみ状の痕跡が残る部分には接合に便利なようにう同心円の溝が数条刻んである。黄褐色土師質である。

高 壺 (第21図47~52)

I式 (47.48) 小片であるため全体の形状は不明であるが大形の高壺である。脚部に透しは入らないと思われる。

II式 a類 (49, 50, 51)(50)は大形の壺部をもち口径 9cm を測る。口縁は直線的である。(49)は壺部を欠くが脚部に円形の透しがある点で独創的である。透しの位置は不規則である。1点出土した。

III式 (52) 脚部のみ1点の出土例である。鈍い脚端から大きく彎曲して脚柱へと移る。塚ノ谷1号窯から類似の脚をもつ高壺が出土している。(52)では脚内面にヘラ記号が描かれており、灰原出土のものによく見かけるものと同じであるので本窯のものに違いない。茶褐色である。

壺 (第21図56, 57)

(56.57) 頸部から口縁にかけての部分のみ出土した。最大径8.8cmで壺としては小形のものである。口縁部内側には古い特徴を残してはいるが、頸部から口縁にかけての部分ではラッパ状に広がらずむしろ退化の傾向をみせている。上下2段に横描波文がめぐっている。

壺 (第22図58, 59)

(58.59) 頸部で外彎し口縁に凸帯をもつ点では共通する。(58)では外彎した頸部から直立ぎみの口唇部が誇張されている。

長頸壺 (第22図62、63)

(62.63) 壺と大差ないとみられるが、口縁内側に稜をもつ小凸帯がつくことと、頸部に横描波文が施されている点が異っている。口径12cmを測る。(63)は肩部に3条の沈線がめぐっている。最大径17.8cm黄褐色焼成不十分である。

脚付長頸壺 (第22図68, 69)

(68.69) 口径 7.4cm 頸部に3条の沈線がめぐる。(68)でみると平瓶の口縁とも考えられるが、他の出土例をみると 8cm 以上の高さがあり平瓶の口縁とはなり得ない。青灰色の硬質である。(69)は脚端径は15cmである。肩がはって3条の沈線がめぐる。透しは入らない。淡黄色で焼成不十分である。1点出土した。

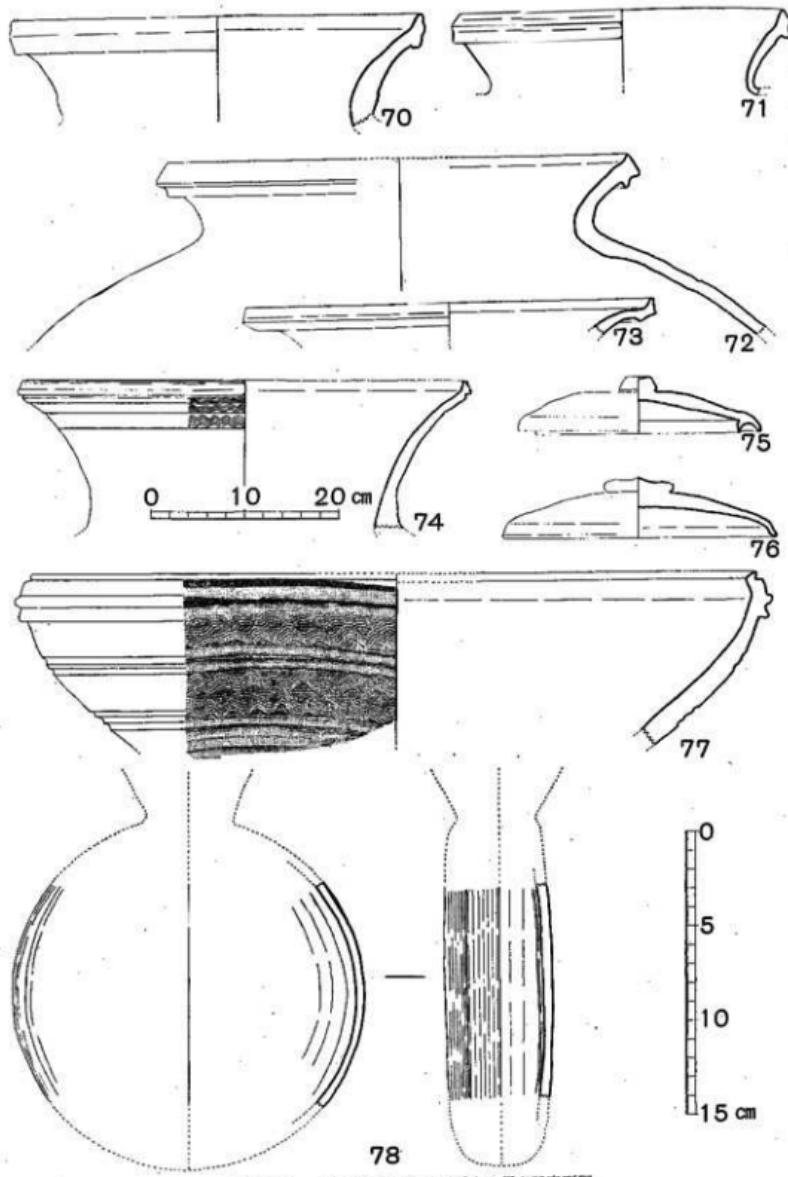
鉢 (第22図60、61)

(60.61) 底部を欠く。体部は外上方へ直線的に延びている。口縁では壺の蓋うけ状の小突起が内側に出て、外面にわずかに凸帯をつけている。口径 12.8~13.6cm。体部には沈線などの施文がなされていない。青灰色硬質である。

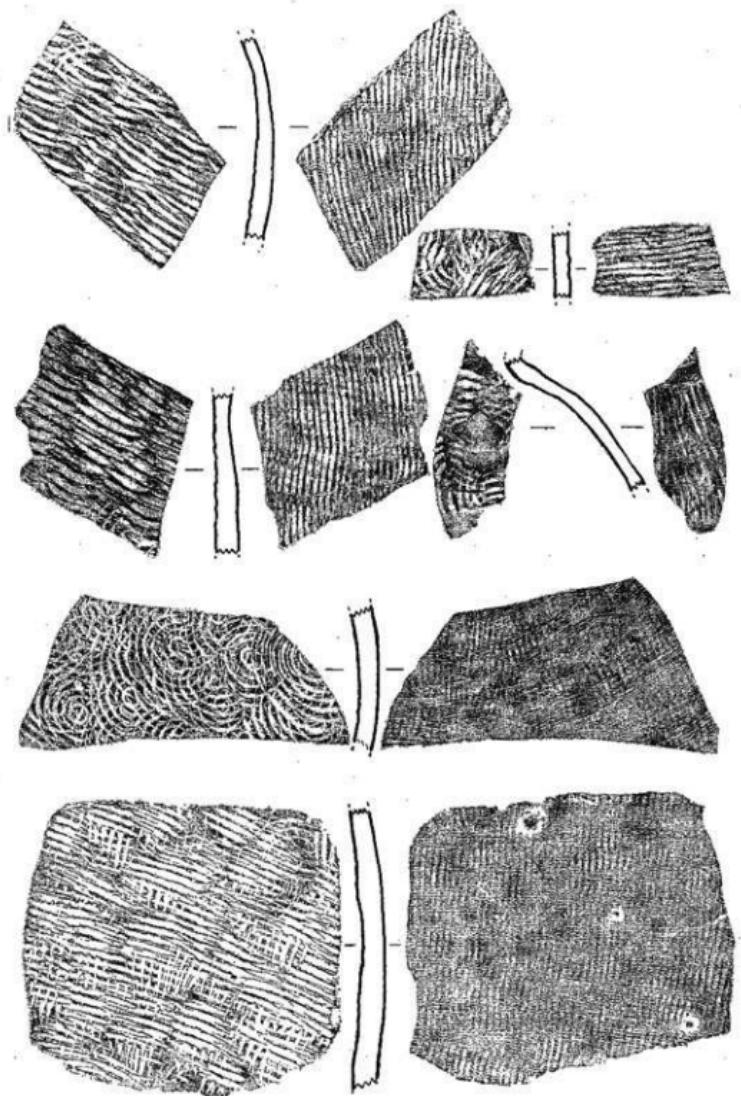
提 瓶 (第22図65~67) (第23図78)

I式 (65.66.67)(65)は脚部の形態が不明である。他の2つは球形の脚部をもつ。口縁の形状がそれぞれ少しづつ違うをみせている。(65)は長頸壺(62)の形態と類似しており、(66)は壺(58)と、(67)は壺(33)と類似している。口径 7~8cm の小形の提瓶である。焼成は十分でところどころに黒色の自然釉がかかっている。

II式 (78) 脚部の少部分しか出土していないので全体の形態は確かではない。脚部径 18.6cm のや



第 23 図 塚ノ谷 4 号窯跡灰原出土須直器実測図



第 24 図 墓ノ谷 4 号窯跡出土須恵器裏拓影（右・外面、左・内面）（3大）

や大形のものである。I式との違いはI式では頸部が球形であるのに対して(78)では扁平な頸部となる。外面は調整のカキ目が残っている。青灰色。

平瓶(第22図64)

(64)頸部復原径14cm。頸部を欠く。頸部中央肩のところに沈線を1条めぐらしている。底部は平底に近いものとなる。暗灰色。

壺(第23図70~74、77)

(70. 71. 72. 73. 74)このうち70. 71. 72は頸部が短かく、施文されていない。小形の壺である。口縁部の形状も壺などとの類似するもので1~2の凸帯をもつ。(73)は小片であるが頸部が大きく外彎して口縁に至り小さな直立した口縁端をもっている。(74. 77)は大形で頸部が沈線、櫛描波状文によって施文され、口縁凸帯も派手で多分に装飾的である。また口縁でく字形に内彎する特徴もよく表われている。(74)は口径48cmである。

蓋(第23図75、76)

(75. 76)2号窯と同時期の杯蓋とみられる。(75)は径13cm厚手で断面台形の小形のつまみがつく。身受け部内側のかえりは口縁の高さに近いものになっている。石英砂粒を含む。焼成はよい。煙道部床上の黒土層から出土した。(76)は身受けかえりの省略されたもので扁平な大形の擬宝珠形のつまみがついている。径は14.8cm。

ヘラ記号について

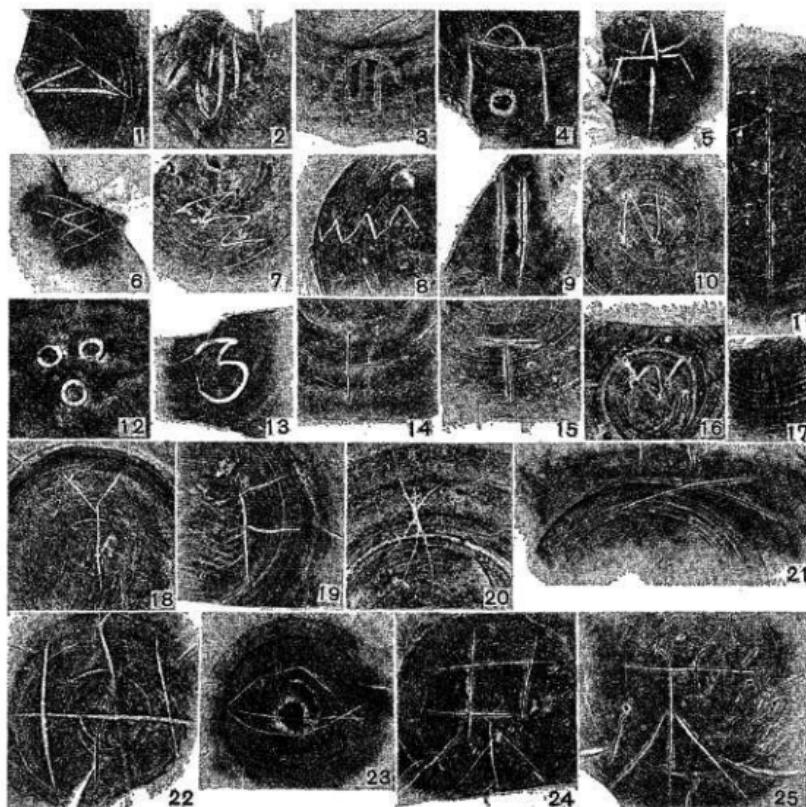
須恵器の表面や内面にさまざまのヘラ書きの記号があることは、これまでにも多くの論議がなされている。ここで塚ノ谷第4号窯出土の須恵器を対象にして、そのヘラ記号の意味について検討をこころみ、気づいた点をあげて今後の研究の一資料としたい。

1. ヘラ記号の判別できる須恵器の種類は杯・高杯・蓋・壺・提瓶・壺である。
2. このうち壺以下は出土例も少ないが杯・蓋・高杯については殆んどすべてにヘラ記号がつけられていたと考えられる。少くとも莞形に近いもので記号のないものは見ない。
3. 第25図は杯・蓋・高杯に施されたヘラ記号の一部であるが、これをみると簡単なものから、かなり意匠をこらしたものまであることがわかる。
4. 杯・蓋の場合、記号のつけられる位置は外面に限られており、内部につけられたものはない。小形高杯では外面と脚内面につけられたものとの2種類がある。
5. 窯内部から同一のヘラ記号をもつ杯蓋が重ねられて、あるいはそれに近い状態で出土した2例がある。
6. 二つ以上の器種にわたる同一ヘラ記号をもつ須恵器について詳細な分析はできなかったが、杯・蓋に関する限りでは、器高・径・蓋うけの形状など技術的または手クセなどから、同一のヘラ記号をもつものは明らかに同一工人のものと考えられる。これは発掘場においても口縁部やその他の成形のクセを観察することによってヘラ記号が想像できたほどである。
7. ヘラ記号のあるものには同じ記号を裏返しにしたるものもある。
8. 例えば第25図(25)の場合、筆順は出土例で変化がない。

9. 4号窯出土のヘラ記号は30種以上にのぼる。

以上のようなことが4号窯出土物の観察から得た知見であるが、これらの結果からヘラ記号の意味を考察してみよう。4号窯出土須恵器のヘラ記号からは「窯印」という表現はまったく意味をなさない。30余種という多数のヘラ記号は全く工人の自由な好みによってつけられたものではないだろうか。ヘラ記号が工人毎のものであるとすると、ヘラ記号がなぜつけられねばならなかったかが問題となろう。

この点では、大川清氏の説に一致するものである。すなわち、成形・乾燥・窯詰・焼成という生産段階、又駒ノ谷各地区では高所のため運搬の問題もあるうし、そういった過程での仕分けや識別の利のための必要性によるものと考えるものである。



第25図 駒ノ谷4号窯跡出土須恵器ヘラ記号拓影 (1/4大)

今後は、これらのヘラ記号をもつ須恵器が使用者側でどのようなあり方を示すかが問題とされねばならない。

(7) 小 結

われわれは塚ノ谷4号窯によって筑後地方の須恵器の窯としては現在最も古いものをつきとめることができた。しかも14m以上におよぶ長大な規模と見事な張床をもつものであった。構造上の特徴は古式須恵器窯をよく示すものである。塚ノ谷地区の時期の下る窯の模範となつたであろうことは推測に難くない。塚ノ谷地区的1号、2号窯に比べて傾斜が小さいが、窯全体の長さからみて温度を上昇させるのにして問題はないと考えられる。本窯では床上げした時点で、窯の長さを短縮して使用しているがこれに対しては明確な解釈を得るに至っていない。あるいはその長さの故に火力不足を招くのであつたろうか。また、灰原からかなり多量の壁体の破砕片が層となつていたことから考えて、使用中に天井が崩壊しそれを修理して再度使用したこととも考えられる。前底部凹穴については確証を得ないが、窯体構築時に何らかの目的で使用されたとするのが一致した見解であった。

次に遺物については時期的には須恵器第III様式のbにおさまると思われるが、小形化の傾向が著しい。器形では杯I、II式、および蓋、小形高杯、甕が圧倒的多数を占めている。特に杯I式はヘラ記号の項で述べたように30数種におよぶヘラ記号を示し、われわれに新たな問題点を提供した。4号窯の遺物で特筆されるべきは、小形高杯であろう。從来古墳から出土した場合もっと時期の下るものとして扱かれていたのであるが、本窯では甕とともに早くも小形化している。これらはその出土状態・量からみて当然本窯のものであり從って時期も他の出土遺物と一致するとみてしかるべきであるまい。

このように塚ノ谷4号窯は筑後地方須恵器編年にとって重要な意味をもつものであった。

(真野和夫)

第4章 その他の窯跡の調査

I 牛焼谷窯跡

立地

本窯跡は、八女市大字牛焼谷に所在し、塚ノ谷窯跡群から西方約0.4kmの地点にある。

昭和41年ミカン園造成の際ブルドーザーの削平を受けて発見された。

立地は西から北にくびれる地形をわずかにさけて、西向の傾斜面にそって築造されている。窯は、標高94~97mの間にある。窯の保存状態はかなり良好であるが、煙道部と焚口部が破かいを受けていた。また、灰原は、相当削平されていた。

41年発見された際、岩崎光氏により焚口部分が若干調査されたが、本格的調査の必要のため、今まで保存されていたものである。

方位

ミカン園造成により階段状に削平盛土が行なわれているために、地形図は極めて不利な状態を示している。しかし、地表面や断面等の観察により旧地表面のおおよその傾斜を推測することができる。窯は、約31°の傾斜を示す東斜面に、傾斜にそって築かれている。窯の中軸線はE15°Nである。

経過における観察

窯体内においては、主に燃焼部から焼成部に至る変換点において遺物が発見された。瓦が最も多く、蓋杯・甕と少なくなる。焚口前面の凹み穴内にも発見された。

本窯は、二時期に分けられ、第Ⅰ期床面に密着して発見されたものは極めて少なく、須恵器蓋杯・甕の破片が少量である。瓦は発見されないので、第Ⅰ期は須恵器を焼く窯であったと考えられる。

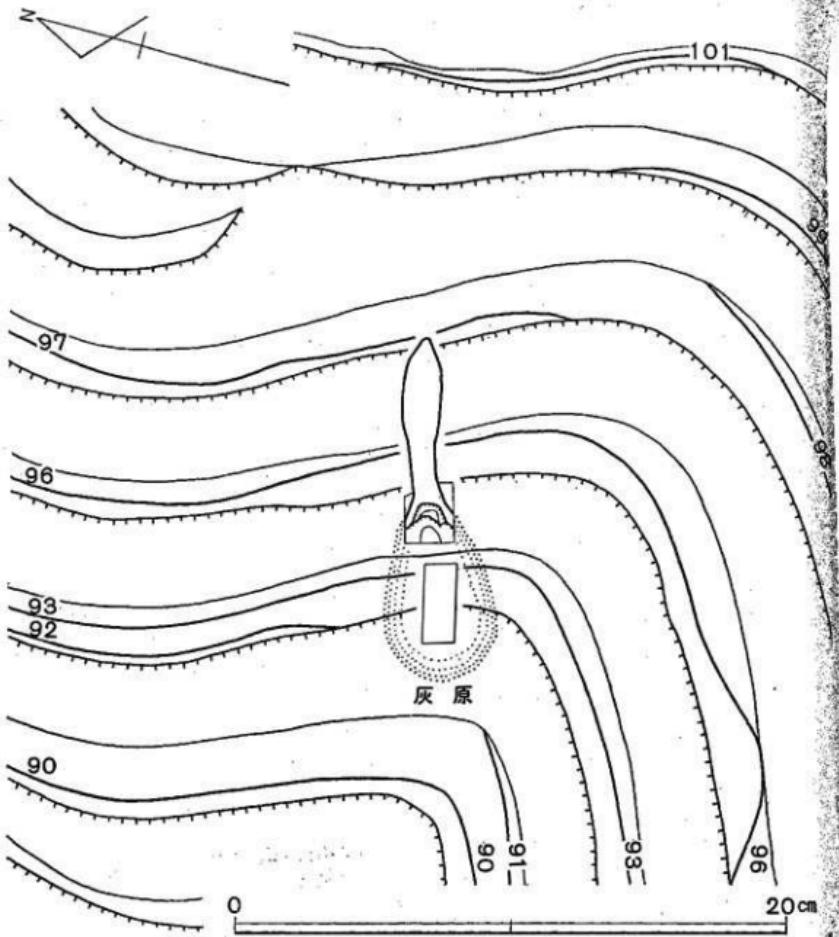
全体的に窯内の遺物は少なく、製品の窯出し後遺棄されたものと考えられる。

構造(第27図)

傾斜面を利用し、黄褐色粘質の地山層と、その下部の絹雲母片岩々盤をくりぬいて築造された無段登窯である。全長は約5.4mである。

掘抜がりの焚口がすばまり、燃焼部を作り、また広がって焼成部を作る。燃焼部中央部で巾92cmである。焼成部での最大巾は130cmである。焼成部上方はミカン園造成工事以前に陥没したらしく、黄褐色土におおわれていた。窯体の平面形を見ると、燃焼部と焼成部の変換点から「く」字形に曲っている。

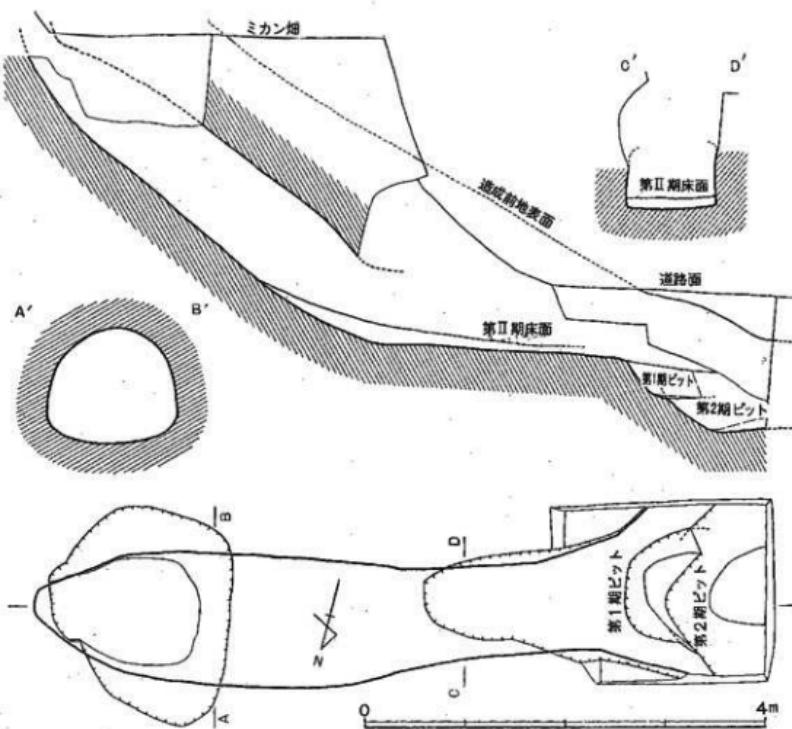
焚口前面の凹み穴は、第Ⅰ期、第Ⅱ期それぞれに造られていて、第Ⅱ期ではさらに拡張されている。道路下であるため最少限度の調査にとどめた。



第26図 牛焼谷瓦窯跡地形実測図

焚口部 保存状態は良好であるが、道路下にあるため十分な調査はできなかった。床面及び側壁は赤茶色に固く焼きしまり、外方に拡がっている。第Ⅰ期と第Ⅱ期の床面は約6cmの差がある。第Ⅱ期床面には黒色の炭と灰の層が堆積していた。

燃焼部 焚口部からしだいにつぼまで燃焼部をつくっている。天井部は、ブルドーザーにより削平を受け破損している。床は平組であるが、天井はドーム状に丸くなると考えられる。燃焼部は、長



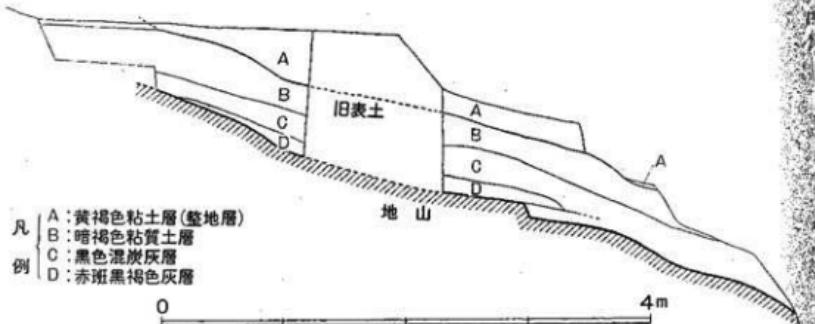
第27図 牛焼谷瓦窯跡実測図

さ1.6m、中央部で巾0.9mを測る。勾配は5°前後である。

焼成部 煙道部とその付近の天井が破損している。燃焼室から外に拡らまって焼成部となる。全長3.6mで、中央で巾1.3m、高さ1.14mである。勾配は急で、40°前後である。天井はドーム状に丸く、床も丸味を帯びている。焼成部の床面の大部分は、片岩の岩盤を約20cm掘り下げている。天井部は粘土を張りつけていて、鼠灰色に固く焼きしまっている。上端はしだいにつぼまって煙道部となっている。第Ⅱ期床面は、この焼成部下半より始まっている。

煙道部・煙出し 破損のため全く不明である。

灰原 (第28図) 灰原は、ミカン園造成工事のため削平され、断片状に遭残している。第1層は造成による盛土である。第2層は暗褐色粘質土層で、造成前の表土層である第3層の黒色混炭灰層からは瓦等が出土するので、第Ⅱ期の堆積と考えられる。第4層は、赤斑黒褐色灰層で第Ⅰ期と考えられる。



第28図 牛焼谷瓦窯跡灰原土層図

遺物

当窯跡から出土した遺物は、須恵器と瓦である。瓦が最も多く、甕は極めて少ない。また、発見された遺物は小片で全形を知り得るものは少ない。

蓋 第I期床面直上から発見されたものに第29図1・2があり、第II期のものが3である。共に撫宝珠形のつまみを持っているが、第II期の方が低平で径が大きい。口縁部は、2はくの字形に曲がっているが、3は垂直に箆切りされている。

甕口前面のピット及び灰原からも発見されたが、I期・II期の区別はつかない。口唇部が丸くなるもの(5)、口縁部が直角に近く内傾し、変換点に凸帯状に突きでるもの(6)、ゆるやかに内傾して若干口唇部が反転するもの(7)、内傾し口唇部がさらに外方に突きでるもの(8)、口縁部が厚くくの字形に曲がるもの(9・10)、撫宝珠形つまみをもち、口縁部がくの字形に曲がるもの(11)がある。

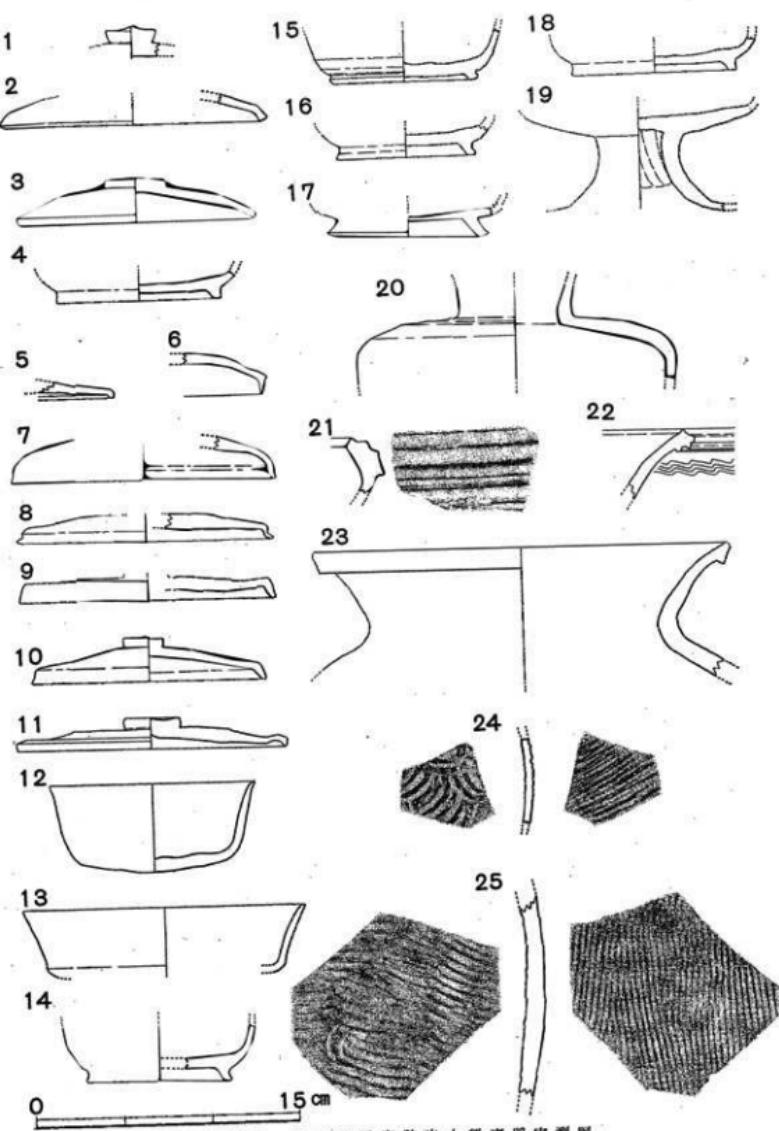
坏身 唯一の坏身である。全体にゆるやかな曲線で、口唇は若干外反する。口径11.6cm、高さ5cmである(12)。

楕 全て、ほぼ同大のもので、高台径が8.3cmから9.4cmの間におさまる。4は第II期床面に密着して発見された。断面コの字形の単調な高台を持つのが特徴で、18と類似している。高台が高く、下端が若干外方に張り出すもの(14・16・17)、高台が低く外上方に丸く張り出すもの(15)の三種がある。13は高台部を欠失しているが、口径18cmを測り、特に大型である。

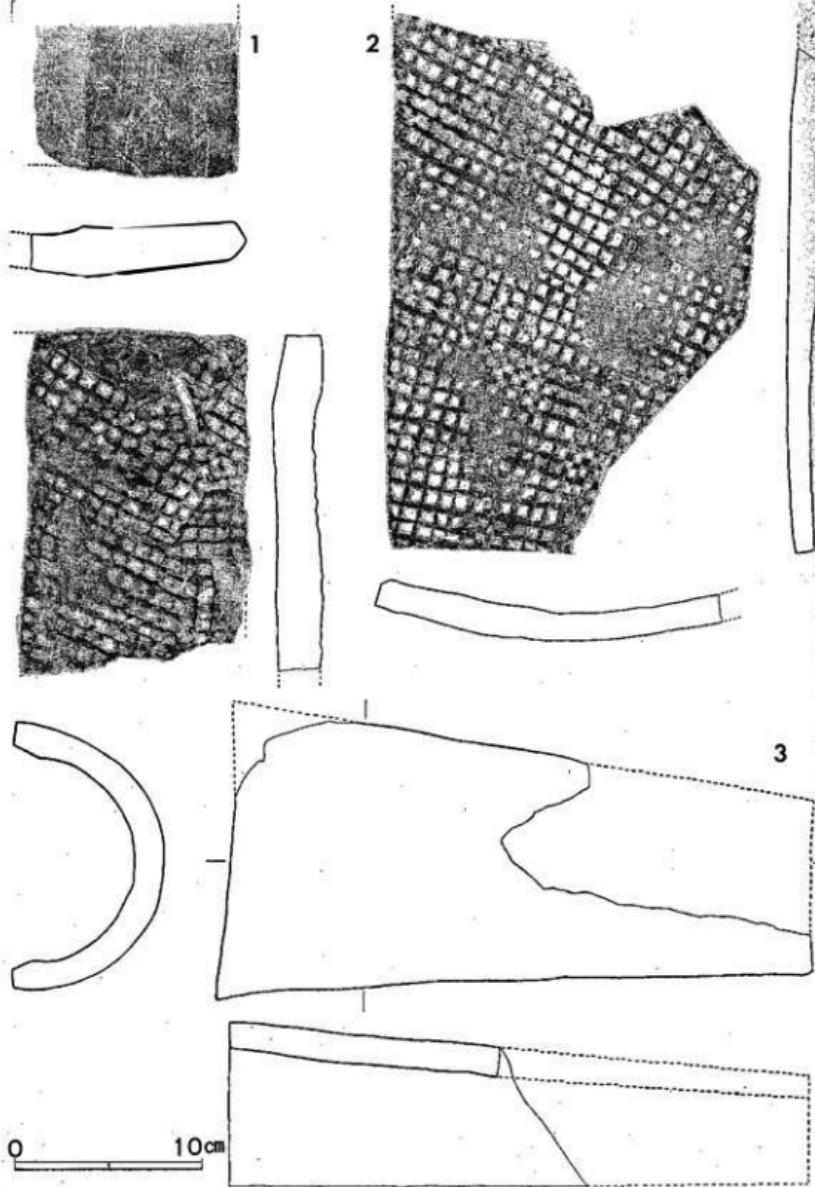
高坏 上下端を欠失し、灰原から発見された。焼成が悪く褐色を帯びやわらかい。脚部は厚く、裾にゆくにしたがって薄くなる。脚部内側は箆による整形痕が残っている(19)。

甕 口縁部に4条の凸起帯を持ち、その直下に4条の波状沈線文がほどこされたもの(21)、薄手で口縁部に3条の凸起を持ち、4条の波状沈線文がほどこされたもの(22)、口縁部を厚くした無文のもの(23)がある。脚部は、外面に平行叩目文、内面青海波文のある薄手のもの(24)と、外面に小さな格子状叩き目文、内面に青海波文のある厚手のもの(25)とがある。

平瓶 頸部の一部と肩の部分の破片である(20)。



第29圖 牛燒谷瓦窯跡出土須惠器實測圖



第30図 牛焼谷瓦窯跡出土瓦実測図

瓦（図版第二一・第30図）平瓦と丸瓦とがあり、軒先瓦がない。製作されなかったものと考えられる。平瓦は、薄いもの（1.5cm）と厚いもの（3cm）とがある。外面には布目が残り、内面には正方形に近い格子目文により整形されている。周縁の断面は鋸くぎ切りされている。長さは不明であるが、巾は28cmである。

丸瓦は、行基瓦で、外面は鎧により整形され、内面には布目が残っている。長さは31.5cm、先端部巾約9cm、後端部巾約16cmである。

小 結

以上が牛焼谷瓦窯跡のあらましである。

牛焼谷の小字名は、本来「瓦焼谷」と書かれたものと思われる。「瓦」が「丑」に似ているところから「丑焼谷」に変化し、さらに現代に至つて「牛焼谷」と書かれるようになったものと考えられる。

当窯跡は、第Ⅰ期においては須恵器を、第Ⅱ期においては須恵器と瓦とが焼成された。第Ⅰ期の遺物が極めて若干数であるため十分比較することができないが、比較的接近した時期であろうことは推測できる。相方の遺物の示す当窯跡が使用された時期は、塚ノ谷第2号窯跡とほぼ平行していると考えられ、土器様式としては、第VI様式にあたる。

土器によりこの種古瓦の正しい時期を決定することができるが、まだ、当古瓦の供給された頃所については不明である。

なお、他の窯跡の報告のなかで、窯跡出土遺物分類表を記載しているが、ここでは小片が多く不充分であるため省略する。

（宮小路賀宏）

II 三助山窯跡群

(1) 位 置

八女市大字忠見小字三助山（岩戸山古墳の真東4軒）

(2) 発見の動機

昭和40年5月8日八女市大字忠見小字三助山で蜜柑園造成のため、ブルドーザーを入れたところ、焼土と須恵器多數出土したことが所有者緒方氏より通報あり。福島高校教諭岩崎光、八女市教委平島忠太郎、江下淳、福岡学芸大学教授波多野曉三氏により、視察及び調査方法を検討した。5月14.15.21.22.28.29の6日間、土曜日曜を利用し、福島、黒木、八女津3高校社会部員の労力率仕によって炎天下発掘調査を行なった。その後雨期に入り、調査を打切ったため、第1号と第2号窯とのみ発掘したが、3号以下は位置と窯の方向を確認するに留めた。九州大学考古学教室小田富士雄氏の示教を仰いだ。

(3) 立地と須恵器の分布

三助山窯は、八女市北部を東西に走っている長峯台地（標高40m）に近く自金山塊南麓部に当る。
(1) 標高84mから91mの間にある。いわゆる高位段丘斜面にある。他の八女市塚ノ谷、管ノ谷、牛焼谷など古代窯跡の立地も大体、ここと同じ高度にある。

(2) 高位段丘の斜面には、古生層筑後变成岩のびらん土壤が拡がっており、上には火山灰ローム層、即ち八女粘土がのっており、これが材料となっている。

(3) 窯が 25° ～ 45° の丘陵斜面、底部は 10° 前後の傾斜に設定されている。東西25m、南北25mの内部に10基の窯跡が分布している。

(4) 窯群の立地には、水が近くに得易い、湧水又は溪谷が必要である。窯群のある斜面は南東に三日月状に張り出しその両端は入江状谷が開んでいる。現在1号窯の焚口から南々東45mの地点に小溜池がある。

(4) 窯の構造

1.2.3号窯のあった地点は天井全部、側壁の大半がブルドーザーで削り去られ分散していた。この三窯ともブルドーザーの動いた方向に焼土、須恵器片が集積していた。

(1) 1号窯の規模は、巾1m、長さ5m、2号窯は巾1.2m、長さ4.5mで尖端部に向かって拡がりを示す長円状となっている。構築に当り、丘陵斜面に深さ1m前後の溝を掘り、その上に天井部を塗り張ったものと受けとられる。

(2) 上述のように1・2号窯の構造は焚口、燃焼部、焼成部とから成っている。1号窯の焚口は窯の南北方向に直交しており、東口から燃料を入れている。焚口を東に転じてことにより1号窯と2号窯が同時に使用されたことを示している。燃焼部と焼成部との間には、支柱台が3個残っている。燃焼室は高さ1.1m、焼成室より18cm低くなっている。支柱石の残っているもの6個。第2号窯も焚口の手前が低くなっている。燃焼室、焼成室の区分には、筑後变成岩即ち綠泥片岩が立てられ、その両端に1辺12cmの支柱台が設けられていた。燃焼部と焼成部の落差は中央部28cm、焚口と焼成部の尖端部で40cmある。

(3) 焼成部の壁と支柱台 1号2号窯共に、側壁は底部に対し垂直に近い掘込みを行なって居り、火焰の強く当っている壁は、鉛錆状で固い。1号窯の焼成部尖端部、2号窯の焼成部内壁などはその例である。

上述のように焼成部の焼口には、1辺12cmの方形支柱台が設けられている。中央に円筒状穴が穿たれている。これは天井部構築の際の支柱台石になったものであろう。石質は岩戸山古墳副葬の石造物と同様凝灰岩（八女地方では長野石と呼ぶ）である。器台であればこれに溶着している須恵器があるはずだが、これは見あたらない。

(岩崎 光)

(5) 出土遺物

1965年に岩崎光氏が試掘により10基の窯跡を推察され、探集された須恵器を今回の八女市古窯跡発掘調査の際に実測したものである。ここでは三助山古窯跡群出土一括遺物として取扱うこととする。器種としては壺の身と蓋・高壺・碗・蓋・甕・壺・瓶・甕の七種である。

壺の身(第31図)

大別して蓋受けを有するものと無いものの二種に分けられる。更に形状の差異により四種に細分される。

I式a類 立ち上がりは1.5cm以上で延びきり、最大径は14cmを越す大形品である。器高は5cmを越して深く底部は丸味を有する(2)。

I式b類 a類と同じ位の最大径を有するが立ち上がりが1.5cm以下でかつ内傾し、底部はa類に較べてやや扁平味を有する(4)(6)は立ち上がり1.5cmだがb類に入る。

I式c類 底部及び立ち上がりの両端を欠失しているが復原高4.3cmであり、立ち上がりは1.5cm以下で、b類よりも更に内傾する。最大径12cmの小形品で底部は扁平さが加わり、全体的に厚手の作りである(11)。

II式 蓋受けが無く肩部からやや内巻しながら直線状に広がる口縁部に続く。肩部の下部に一本の広い沈線を有する。底部は平底でやや厚手の作りである(14)。

蓋(第31図)

明かに壺に付くものだけをここでとりあげ、碗の蓋になる可能性のあるものは別項でとりあつかう。

I式a類 天井部から肩部の変換点に段を有して肩部からは急傾斜で口縁に続く。口縁端内側に段を有する。最大径15cm、器高4.3cmで全体的に箱形に近い形態を残している(1)。

I式b類 a類にあった肩部で、器高3cm内外と低くなってくる。口縁端は段を有するが、その断面は鋭角三角形を呈する。最大径は13cmである(5.9.13)。肩部に一本沈線を有するものもある。(7.8)

I式c類 最大径14cm以下で小形化し、天井部から肩部にかけて丸味を有するが、肩部から口縁端にはぼまっすぐ下りてゆく。口縁の断面は段がなく三角形を呈する(12)。肩部に沈線を有するものもある(10)。

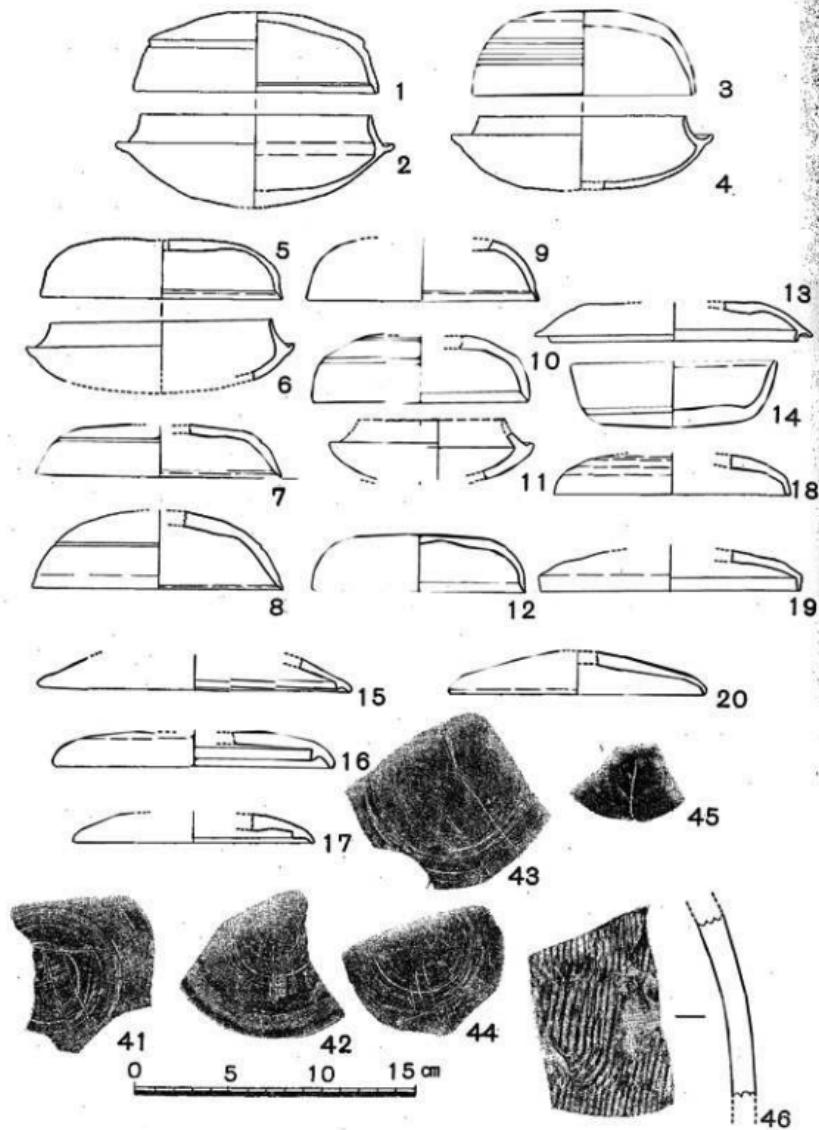
I式d類 最大径12cm器高4.5cmで半球形に近い形状をもつ。肩部に4本の沈線を有して、口縁部までの1cmは、まっすぐに下りてゆく(3)。

高壺(第32図)

六個出土し杯部1個と脚部5個である。

I式a類 壺部の最大径9cm深さ4.2cmで5本の沈線がはいる肩部の立ちは急であり逆梯形に近い形態を示す。脚部では脚端部が長めで内傾するかえりがやや丸味を帯び、透し孔がはいる(28)。(27)も同様の脚端部がつくものと考える。断面三角形の切り込みを三ヵ所に有する脚部(23)がある。

I式b類 慢かな立ちの脚部で、端部のかえりは鋭角的に鈎の手状に内傾する。脚端部径15cmである(22)。



第31図 三助山古窯跡群出土須恵器実測図及びヘラ記号拓影

I式 c 類 脚端部の形状が b 類の退化した形態を示し、端部を引きのばして稜をついている(31)。

I式 d 類 最大径 7 cm 複原脚部高約 5 cm で非常に小形の高坏である。脚端部は c 類が更に退化した形状を示す(30)。

榦 (第32図)

腰部に稜が付くものと付かないものの二種に分けられる。

I式 a 類 複原器高 5 cm で体部と底部の変換点 (腰部) は明瞭でなく稜はつかずに立ち上がる。高台は外方に張り、端は一部が地につき短かい高台である(24)。若干長い高台が付き外反氣味に折り曲げている形状を示す(26)。

I式 b 類 腰部まで底部がやや直線状につづいて稜がつく。高台は短かく底部と平行するように曲がり地には端が一部着く(25)。

蓋 (第31図)

坏又は榦につく蓋は身受け部のかえりの有無により二種に大別され、さらに形状の差異により六種に細分される。別に高杯の蓋の可能性があるものもこの項であつかう。

I式 摺宝珠形つまみを有し、肩部で小さな突出部を有し、一段入りこんで直線的に口縁部につづく(29)がある。高坏の蓋と考えられ、器形として古い形状を示している。

II式 a 類 身受け部は鋭角的なカーブでかえりが長くのび、丈高い摺宝珠形つまみがつくものと考えられる。最大径 15cm の大形の蓋である(13)。

II式 b 類 身受けを有し、天井部中央を欠失しているが丈の高い摺宝珠形つまみがつくものと考えられる。最大径は 17cm と 15cm で大形品である。口縁部は厚ぼったく、幾分なまつた鏡のする蓋である(15・16)。

II式 c 類 摺宝珠形つまみがつくと考えられ、身受け部は極度には内彎せず、b 類のかえりが退化したものと考えられる(17)。

III式 a 類 かえりが無く低平な天井部につづいて肩部から約 1 cm 急角度に折れ曲っている。径 3 cm 程の低平なつまみがつくと考えられる。最大径約 12.6 cm である(18)。

III式 b 類 天井部から口縁部に直線的に続き稜をもって折れ曲り垂直に立つ。口径 14 cm である。つまみが付くことが考えられる(19)。

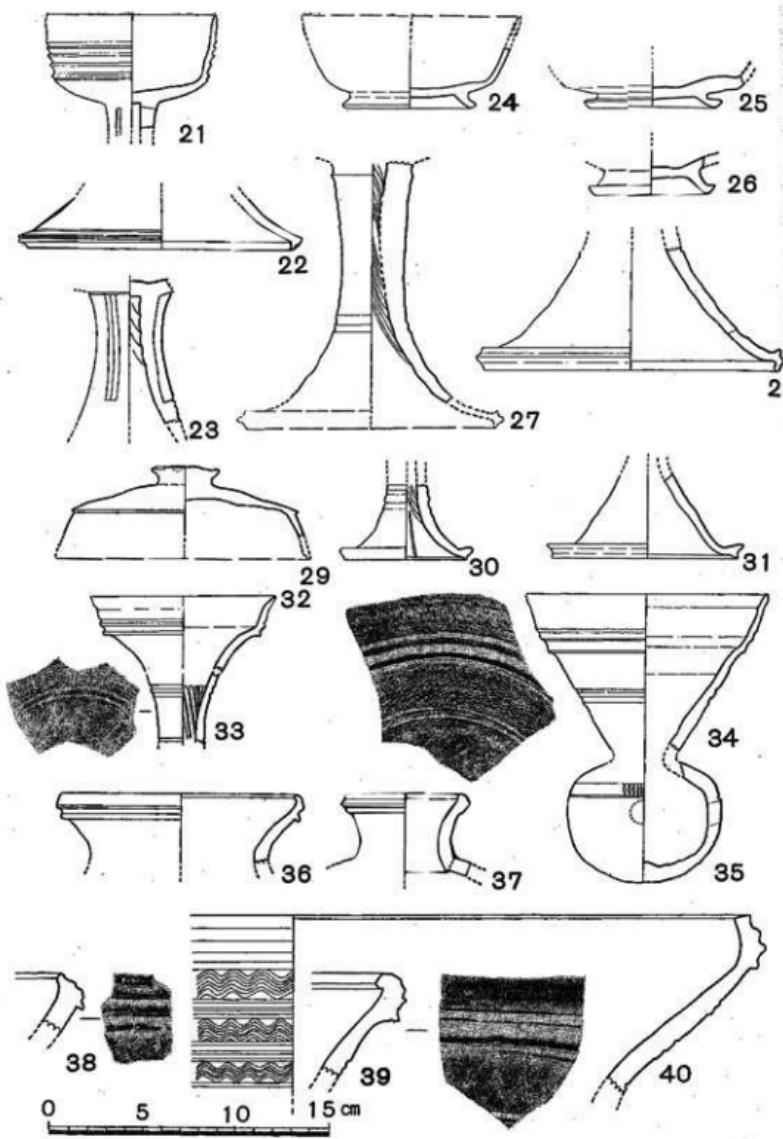
III式 c 類 断面が横にひらいた小さな U 字状をなす口縁部は、天井部の胎土を引きのばし、内にわずかに折り曲げた形状を呈する。口径 14 cm の大形品である(20)。断面菱形のつまみが付くことが考えられる。

越 (第32図)

口縁部と体部計 4 個がそれぞれ形状として二個体を成すと考える。

I式 a 類 腕部に接合する部分から沈線部分まで(33)と口縁部まで(32)とが略々一個体の形状を示すと考えられる。口縁下の沈線までラッパ状に外反して、再び内に反りつつ、外反する口縁部分である。下位の沈線部と腕部との接合部の間に櫛描き波状文がはいる。口縁径 10 cm である。

I式 b 類 口縁部下 3 cm まで幾分丸く外に張りだし 以下腕部まで略々 直線的につづく 口縁部分(34)と最大径 8.2 cm が球形の腕部の中央にくる腕部(35)が一個体をなすと考えられる。二カ所の沈線



第32図 三助山古窯跡群出土須恵器実測図

間に横書き波状文がはいる。口径13cmである。球体部の肩にヘラによる縦細い施文と沈線がはいつている。

壺 (第32図)

短かくラッパ状に開く頸部につづき口縁部は若干折れ曲り、鈎の手状をなす。口径13cmの口縁部外面には小さな二つの突帯がつく(36)。

提 瓶 (第32図)

肩部につづいて緩かに外反する口縁部である。M字状の突帯を有し、口縁端内面に小さな段がつく。口径6.8cmである(37)。窓印のある胴部片(43)もある。

壺 (第32図)

a 類 大きくラッパ状に広がる頸部が口縁部で内燃気味に立ち上がり、口縁外面には三突帯が付く。突帯と上位の三沈線間、下位の沈線間、下位沈線下方に横書き波状文が三条巡っている。口径49.2cmの大形品である(40)。

b 類 外反してゆく口縁端が内に折れ曲って内面の突帯を形成し、口縁部外面には四つの稜を有する。口縁部と二条の沈線間に横書き波状文が巡っている(39)。

c 類 内傾する口縁部外面に四突帯をつくり突帯下には横書き波状文が巡っている(38)。

ヘラ記号

個数が少なく、ここでは資料紹介に止める。(第31図)

(41)(42)は第III様式の壺であり(44)もその可能性が強い。(43)は第III様式の提瓶胴部である。(45)は第III様式の小形高壺(30)の脚部内面の拓影である。(46)は大形壺の破片内面の拓影である。

(6) 小 結

三助山古窯跡群の出土須恵器には第III様式、第V様式、第VI様式の三様式があり、本項で使用した式、類との対比を行なうと下記の表のようになる。

器種 \ 様式	IIIa	b	V	VIa	b	c
壺 身	Ia	I b. c	II			
壺	Ia	I b. c. d				
高 壺	Ia	I b. c. d				
楕				Ia	Ib	
壺	I			IIa. b. c	IIIa	b. c.
壺	Ia	Ib				
壺	I					
提 瓶		I (?)				
壺		a. b. c				

蓋類のII式、III式は、すべて極につく可能性が大きくII式a・b・c類は第V様式の蓋のかえりの形態を引き継いで器形が大形化している。

三助山古窯跡群の出土須恵器の第III様式は塚ノ谷4号窯、第V様式は塚ノ谷1号窯、第VI様式は塚ノ谷2号窯の出土須恵器と符号する。忠見三助山には三時期の窯跡が推察されるが、十分な調査が行なわれないままに埋滅したのは惜しまれる。

(藤口 健二)

第5章 総括

I 塚ノ谷窯跡群の構造と特色

八女古窯跡群は八女の北東境を占める山中深くにあって、まだ窯跡群の所在のすべてを明らかにできない。この山塊は古生界に形成されたといわれる三郡本山変成岩類（結晶片岩類）を基盤とするものである。これまでに調査をとげた塚ノ谷、牛焼谷、三助山などの窯跡はこの山塊間に西南から北東に細長く入る谷の支谷を利用してつくられている。これまで森林でおおわれていたのが開墾などの偶然の機会で発見されるという状況であったから、今後このような地形の多い山中を注意してさがせばさらに多くの古窯跡群が発見されるであろう。

窯を構築する場合、適度の傾斜をもった地形と風向、水、薪材の豊富なところなどの条件が必要となってくる。そこで塚ノ谷窯跡群についてその立地をみると、掘鉢状に中央が低く、周囲が壁をなす地形をえらび、その尾根に近い急傾斜の高所を利用するもの（第1・2号窯）と、その東側で谷に面した斜面の中腹から尾根に近いやや緩傾斜の地形を利用するもの（第3・4号窯）の二つのタイプがある。牛焼谷窯は前者に、また三助山窯群は後者にほぼ分類することができよう。今回調査した五基の窯についてその規模、構造などをまとめれば次表のようになる。

	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	方位	傾斜	出土器
塚ノ谷 1号	880	170	130	W16°N	38°	須恵器・円面鏡
2号	860	148	120	N55°E	38°	須恵器・円面鏡
3号	?	102	88(?)	N18°E	32°	須恵器
4号	1470	180	100	N40°W	22°	須恵器
牛焼谷	540	130	116	E15°N	40°	須恵器・瓦

このうち、6世紀代に比定される塚ノ谷第3・4号窯と、7世紀代に比定される塚ノ谷第1・2号窯、牛焼谷についてみると、両者の間にはいくつかの相違点を指摘することができる。このことは古墳時代と歴史時代初期の窯構造の比較という意義がある点で重要である。塚ノ谷第4号窯は上述したように立地も緩傾斜の中腹からその上位付近をえらび、全長10m以上の細長い窯である、傾斜も20°～30°の間にあって、窯体は地下にあるが、地表から竪穴を穿って天井を構架し、床面も貼り床である。これに対して塚ノ谷第1・2号窯、牛焼谷窯は傾斜の急な尾根近くの高所をえらび、全長も10mをこえるものはないが、長さに対して高さの占める割合は塚ノ谷第4号窯にくらべて大きい。傾斜は30°を越え、40°まであってきわめて急である。窯体は地下にあるが、傾斜を急にしているためか床面を地下深くに定める必要があり、結晶片岩系の岩盤を掘り下げて床面と側面の下半部は岩盤を利用している。塚ノ谷第2号窯は4号窯と同じく竪穴を穿って天井を構架しているが、塚ノ谷第1号窯、牛焼谷窯では横穴式に削りぬいてつくられている。このような両時代の著しい相違点がただ今回調査し

た一地域においてのみの特色であるのか、少くとも西日本地域の普遍性として認識すべきかはもっと各地における窯跡調査の実例が加わってから判定すべきであろう。しかしながら古墳時代から歴史時代への転換を窯業史の面から把握しようとする場合、八女古窯跡群では中腹から頂上近くへ、緩傾斜から急傾斜へ、長大な窯から短かい窯へ、堅穴式から割りぬき式へという推移をみることができた。九州地方での窯跡調査のおくれはこれらの問題をさらに地域的に広げて検討しようとするとき、最も大きな支障となっているのが現状である。ただし、我々がこれまで行なってきた窯跡調査の少ない事例ながら、7世紀代でとどまった塚ノ谷窯跡や牛焼谷窯跡に後続する8世紀代のものについてみると、豊前・トギバ窯跡や薩摩・鶴峯窯跡などの須恵器窯では八女古窯跡群と共通した特徴を継承しているのである。ところが筑前・肥後・日向などの調査例では必ずしもそうではない。したがって現状では八女古窯跡群のみの孤立した特性とのみは断定できない、ある程度の普遍性を認めてよいのではないかという見通しを抱いているが、さらに今後検討してゆかねばならない。

次に今回発掘した窯跡に共通してみられたのは、窯跡の焚口から灰原にかかるあたりに外見上一種のテラス状の平坦面をつくり、それより下方の地形斜面が灰原に利用されているということであった。このテラス状平坦面にはいずれも凹み穴が設けられていて、炭灰層が堆積して凹み穴を埋め灰原へとつながっている。この凹み穴の存在は我々がこれまで調査してきた窯跡の例には見られなかったものであるが、その用途については各地の例を参考してみても満足すべき説明はなされていない。この凹み穴は焚口の前方につくられているので、製品の搬入・搬出などの操業時には支障となつた筈である。ただ各窯跡における凹み穴の発掘を通じて観察されたところでは、いずれも凹み穴内には炭灰層が堆積していて底部にまで遺物が発見されるような場合がなかった。勿論穴の壁や底が焼きしまった状態もない。窯の操業時にはこの凹み穴が埋まっている状態を考えるならば、この上を通て窯と外部との出入は不便ではない。窯を構築する際、天井から側壁にはスサ入り粘土を塗りかけて仕上げをし、空焚きをするという手順が考えられる。この凹み穴はそのような構築段階における構築粘土のこね湯などの材料溜めとしての用途が考えられる、空焚き後に炭灰をかき出して埋めれば操業時には不用のものとなろう。牛焼谷窯跡では珍らしくこの凹み穴が二次的に一部重複しながら拡張されたような状態が確かめられた。この窯の構造は本来須恵器窯の形態をとっているので、瓦窯に転用されたようになった二次操業の窯の仕事かと思われる。

また窯構造に関連して注意されるのは、低所から高所へ、緩傾斜から急傾斜へという推移をたどることが窯構造の技術だけでなく、須恵器生産技術にも変化を及ぼしたものであろうということである。このような窯の構造や立地の変化は、窯にあたる風力を強くし、窯内の火力を急激に上昇させ、短期間で焼成するという結果を招く。したがって焼成される須恵器も同一個体における各部の器壁の厚みを一様にするような製作上の技術的進歩が必要である。塚ノ谷第4号窯から第1号・第2号という須恵器の編年的流れのなかにみられる須恵器製作技術の進歩は、このような窯構造、立地との問題もかかわっているとみられる。

塚ノ谷窯跡群の立地からみて、この地域に吹きこむ風を利用するとすれば、西南方向或は南方向から谷を吹きあげてくる風を利用するのが最も効果的である。そこで隣りの筑後市において九州農業試験場が午前9時に観測した最近四年間の気象月報を参考してみると、

1964年

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均風速(月平均) m/s	2.4	2.1	2.7	3.2	2.2	2.9	4.0	2.8	2.4	2.4	2.0	1.8
風速(月最大) m/s	7.5	8.2	9.0	10.7	8.7	12.7	11.0	11.0	9.2	6.8	6.8	7.7
最多風向	NNE	NE	NN	NNE	NN	SSW	SW	NNE NE	NN	NN	NNE	N
最多風向の日数	9	6	10	9	6	6	8	6	8	8	8	6

1965年

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均風速(月平均) m/s	2.3	2.5	2.5	2.7	2.4	2.6	4.4	2.3	2.6	1.9	2.2	2.2
風速(月最大) m/s	11.0	8.3	9.7	8.0	7.3	9.3	11.3	9.8	8.3	7.3	9.0	10.0
最多風向	NNE E	N	N	NNE	N	NNE SW	SW	SSW	NNE	N	N	NNW
最多風向の日数	6	6	4	7	5	6	12	5	8	8	7	5

1966年

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均風速(月平均) m/s	2.3	2.3	3.0	2.6	2.7	3.1	3.1	2.3	2.6	1.9	1.9	1.7
風速(月最大) m/s	8.0	10.0	11.0	9.3	9.7	10.0	9.3	9.0	7.8	7.3	13.0	7.3
最多風向	N E	E	NNE	NNE	NNE	N NE	SW	SW	NE	NE	NNE	NE E
最多風向の日数	7	5	7	9	6	6	12	6	7	6	6	6

1967年

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均風速(月平均) m/s	2.2	2.1	2.5	2.9	2.1	2.6	3.1	2.2	2.7	2.6	2.2	1.7
風速(月最大) m/s	13.2	8.7	14.0	8.8	8.3	10.3	12.0	8.5	8.3	8.0	12.2	10.0
最多風向	E	NNE E	NNE	N	N	NNE	N NW	S	N NNE	NNE	N	N
最多風向の日数	7	5	5	7	7	8	5	15	8	9	7	6

以上の結果を総合してみると、9月以降、翌年5月までは風向きを利用するのはまったく不利である。西南から南方向の風向きは6～8月、特に7・8両月に限られる傾向がある。しかも同風向の日数も比較的多い季節である。このことから、季節的に窯操業の時期をえらぶとすれば旧暦の夏期後半から秋にかかる頃が最適ということになろう。工人達が農業にたずさわっていたとすれば、農繁期前の良い時期ではある。

次回の調査にのこされた問題としては工房跡の所在、陶土の採取地探索などがある。そのためにはまだ考古学以外の科学部門の知識の援助が必要であろう。今回の窯跡群調査は端緒についてばかりである。次回調査の機を得てさらに問題の解決をはかりたい。

(小田富士雄)

Ⅱ 築後における須恵器の編年（別添付図参照）

須恵器の編年的研究の端緒をひいたのが1953年刊行の「対馬」⁽¹⁾によってであったことは、今日研究者のよく知るところである。後期古墳にはほとんど普遍的にみられる須恵器が編年研究の尺度として最も適当なものであるという觀点を示し、具体的に西日本地域の古墳から発見される須恵器の四期分類を確立した。この後にわかつに各地の須恵器研究が盛況を呈し、1960年代を迎えてしばらくまで学界を著しくにぎわした。このような動向のなかで先の「対馬」執筆者の樋口隆康氏は、1958年に再び須恵器編年をとりあげられ、先の編年は全国的な大綱を示すに急であったために地域別編年まで及ばなかった点を補充しようとした⁽²⁾。乃ち九州・畿内・中国・中部以東の地域に分ち、あらたに五期編年を提唱している。

九州地方の須恵器研究は以上の研究史を継承してはじめられるようになった。しかしこれまでの地域的編年研究にもかかわらず九州内における各地の須恵器の実態を満足させるにはいたっていない。編年資料として各時期を代表する適確な資料の提示がないことが研究の進展に支障となっていることは否定できない。また地域区分についてもどのような区分法を採用するか。これまで古墳出土資料を主体としているが果して適当であるのかなどの検討がなされている。現在筆者等が企図しているのは律令時代の九国区分を踏襲しているが、今日まで肥後⁽³⁾と豊前⁽⁴⁾についての須恵器編年案が公表されている。また九州地方では從来須恵器窯跡の調査が著しく立ちおくれているため、先ず古墳資料を主体として編年せざるをえない現状であった。しかしながら古墳資料の場合、追葬が行われている場合も少ないので、二乃至三時期にまたがる須恵器の副葬が認められることとなって、厳密な意味で各時期の須恵器様式を分類するには限界があった。このことは細分化の傾向がすすむにしたがって、その限界の占める割合も大きくなつてゆくのである。このような限界を越えるためには須恵器の生産遺跡を調査することによって、古墳よりもはるかに純粹度のたかい須恵器の組合せを得ようとするものである。したがって須恵器窯跡の発掘資料によって編年を組立てようとする試みがいち早く畿内でなされたのであった⁽⁵⁾。しかしながら窯跡調査が著しくおくれている九州地方にあっては、先ず古墳資料で編年を組立てながら、一方で窯跡調査を早急にすすめてゆき、編年の補正をはかるという方法をとらざるを得ない現状である。それでも近年九州各地で窯跡調査もようやくはじめられるようになった。先ず九州各地に在る窯跡の地名表を作成し⁽⁶⁾、さらに各地で発掘も行われるようになって窯構造の実態もある程度うかがわれるようになった⁽⁷⁾。しかしながら一地域において窯資料によって各時期の須恵器を編年できるほどの窯跡調査例はほとんどない。現在、窯資料によって古墳時代から歴史時代にわたる編年がかなり可能になってきたのは豊前地方である。

筑後後方における須恵器研究はこれまでほとんど行なわれていない。そのなかにあって、樋口隆康氏は八女市吉田の岩戸山古墳が繼体天皇21年（527）に叛乱を起して翌年葬された筑紫国造磐井の墳墓であることに着目し、この古墳から発見される須恵器を六世紀前半頃に比定して、須恵器編年の第Ⅱ期とされた⁽⁸⁾。これは記録に照して年代を知りうる九州唯一の古墳としてきわめて重要な意味をもつてゐる。したがって古墳資料にもとづく限り、岩戸山古墳の須恵器は編年資料として最適のもの

といえよう。しかしながら第二次大戦直後の混乱期に、ほとんど全部の資料が持ち去られて行方不明になるという不幸にあったため、地元では十分な記録をのこすこともできなかった。その後、筑後地方の須恵器研究はまったく進展していない。

ところで筑後地方における須恵器窯の調査にいたっては古墳研究の比ではなく、まったく立ちおくれ状態である。これまでに調査が行われた窯跡を列挙すれば、

1962年 久留米市上津町池田窯跡⁽¹⁾

1965年 八女市忠見区三助山窯跡

1966年 八女市忠見区牛焼谷窯跡

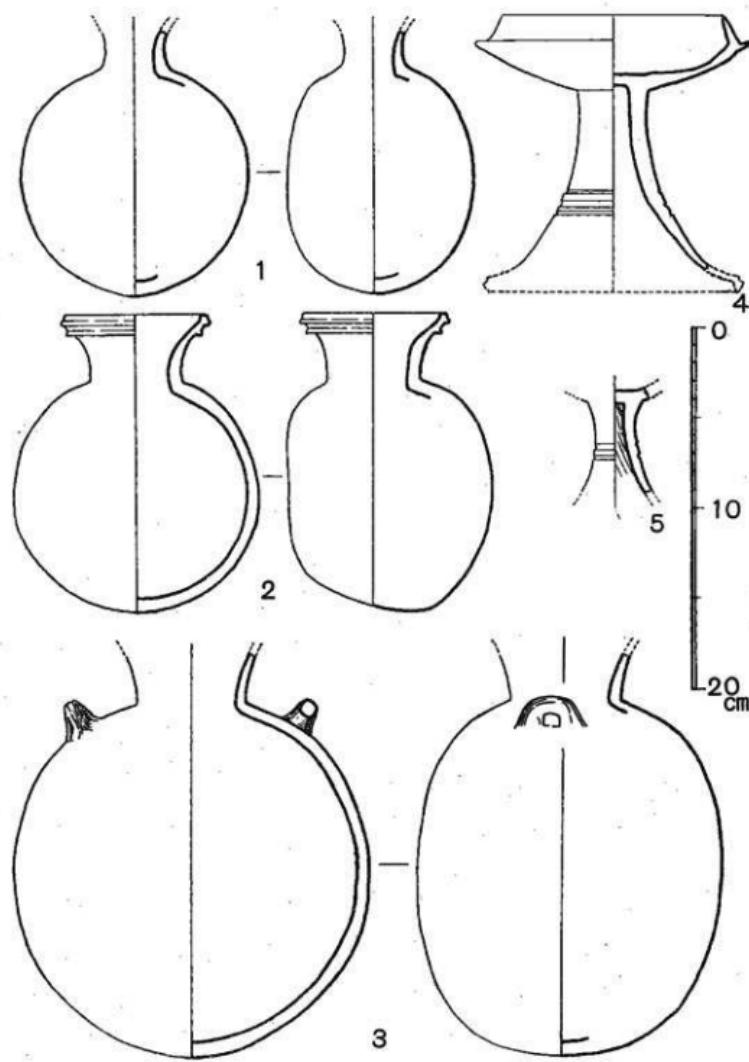
池田窯跡は上津町から鏡水に至る原野の一部を切って住宅用道路を設けた際に窯の前部が削りとられて発見されたものである。すでに焼成部をのこすだけとなっていたが、くりぬき式無段登り窯で35°～37°の急傾斜をなしている。遺物は壺、高杯、杯などが発見されており、報告書の付図によれば第Ⅲ期に比定されるものかと思われる。

三助山窯跡、牛焼谷窯跡も開墾にともなう発見で、ほとんど遺物蒐集に主力を注ぐような応急措置であったために、窯構造を十分究明するにいたらなかった。牛焼谷窯跡はその後保存されることとなったので、今回の調査で余力をさいて再調査を行なったのである。

このような状況であるから、本格的な須恵器窯の調査は今回の調査が実質はじめてと申してもよいであろう。したがって我々は筑後地方で空白状態にある須恵器の編年研究をすすめるために、灰原などを手がかりとしてできるだけ時期の異つた須恵器を生産する窯を発掘対象にすべきことを留意したのであった。結果的にはこの意図は達せられて成功したのである。今回の調査によって第Ⅲ・V・VI期に比定される須恵器資料を把握することができ、これまでの空白状態から一挙に六世紀後半から七世紀代を埋める成果を収めるにいたった。この意味で筑後地方における須恵器研究には劃期的な調査であったといえる。

筑後地方における須恵器は第Ⅰ期に属するものもないではないが⁽²⁾、遺跡の性格が不明である。つづく第Ⅱ期の資料としては、樋口隆康氏が筑紫国造雪井の墳墓に比定される岩戸山古墳出土の大形器台を紹介された⁽³⁾。この古墳は上述したように年代を知りうる唯一のものであるから、編年研究上の基準となる重要な位置を占めている。しかし現在では資料が散逸してしまい、この時期の各器形を知ることができなくなってしまった。

第Ⅲ期の資料としては、岩戸山古墳の東にある乗場古墳出土の須恵器があげられる（第33図）。ここでは三個の提瓶と二個の高杯が知られているが、提瓶の横断面における片面の扁平性はまだあまりあらわれない。また口縁の上端が平らになり二条の隆帯がめぐる特徴をもつたものがある。高杯には大小二種あるが、颈部の立上がりが第Ⅱ期のそれほど高くなく、内傾度も著しい。八女古窯跡群の須恵器でこれまで知られている最も古式のものはこの時期からはじまるようである。三助山窯跡群と塚ノ谷第4号窯跡の須恵器がこの時期に登場する。三助山では岩崎光氏の調査では十基に余る窯跡の存在を報告されているが、遺物の散逸をふせぐための蒐集が主であったために厳密に須恵器を窯別に把握されていない感がある。この蒐集資料のうちで最も古式のものは第Ⅲ期でも、塚ノ谷第4号窯資料と対比してさらに古式の特徴をもっている。特に提瓶・高杯に乘場古墳の出土品と類似したものが



第 33 図 乗場古墳の須恵器 (1~4・東京国立博物館、5・八女市教育委員会)

あることは注目されるところである。塚ノ谷4号窯の須恵器は身にかえりをもった蓋杯が非常に多く発見されているが、縦じて身の立上りは高くやや古式の特徴をのこしている。しかし、共伴する高杯・甕・提瓶などは小形化の傾向が著しく、組合せてみる限り、塚ノ谷第4号窯は第III期後半に比定するのが妥当であろう。したがって第III期は前半に三助山窯跡群のなかの一部をあて、後半に塚ノ谷第4号窯をあてることができる。第III期をA・B二小期に分けた所以である。B期のなかで注目されるのは他地域における同時期の組合せに比較して、杯と他の器種との差が一見時期差の如くに感じられることがある。A期に高杯に大形品があり、脚に二～三個の細長い透孔の入るものを見ると、塚ノ谷第4号窯に開いてはこのような例は一例もなく、小形で脚も細く下端が外側上方にはね上る特徴をもったものがほとんど全部を占めている。また甕にしても口縁部などにはやや古式かと思われる特徴をのこしているが、他地域の資料には容易に対比しえない。これまで第III期を二小期に分けたのは、A期には第II期の特徴を一部に継承するものがあり、B期にはいわゆる古式須恵器の特徴が消えてIV期以降に急速化する量産と粗製化への傾向がみえはじめ、また小形化へすすむ様相をもみせはじめると、いう推移のなかで認識してきたのであった。このような観点に立つならば、塚ノ谷4号窯の須恵器は一部にA期の様相をとどめながら、大勢は急激に小形化と量産と、それによって必然的に生ずる粗製化の傾向を示している点が指摘されて、ある意味では八女地方における特殊な動向かとも思われるのである。

第IV期の資料はこれまでの八女古窯跡群の資料に関するかぎり一例も発見されていない。九州地方ではこの時期に蓋杯の多くが身に蓋受けのかえりがなくなり、蓋にあらわれて逆に身受けとなることが注意されている。乃ち蓋と身の構成が逆になる場合が多くなる。筑後地方におけるこの時期の様相は、すでにIII B期においてかなり地域色を強く出しているので、それにつづく時期として注目される。将来第IV期の窯跡を発見することがさしあたっての課題となろう。

第V期は塚ノ谷第1号窯跡須恵器の大部分が相当する。蓋杯では第III期にみられた身に蓋受けある種類の組合せは消滅して、平底或は丸底の直立口縁をもつ杯と、上端をおさえた擬宝珠掘みをつけ、身受けのかえりをもつ蓋を組みあわせた蓋杯がほとんど全部を占めている。形の大きさにも小・中・大の三種がある。この時期の蓋杯の形態は第III B期の蓋杯のなかにすでにあらわれているので、この時期になってはじめて出現したものではなかった。第III B期との相違は、この時期になって厚手づくりになり、蓋の内側につくかえりが小さくなっている。高杯もまた第III B期にあらわれはじめた脚部の器形を承けている。このほか壷・直口壺・提瓶・平瓶・大甕なども第III B期から系譜をたどりやすい傾向を示している。このようにみてくると、これまで一般に第IV期にかなり明瞭な転換の特徴をとらえていたが、八女古窯跡群では第III期後半にさかのほる可能性がつよいと思われる。したがって将来発見されるであろう第IV期に相当する須恵器群は第V期にかなり接近した組合せを予想することができるであろう。一般に各時期を通じて蓋杯が最もよく時期の特徴を示している傾向があるが、これまで第IV期のなかで第III期を承けた大形から、第V期に一般的な小形化への変化がみられるという点を参考にすれば、第V期の蓋杯にみられる三種の大きさの存在は第IV期をうけて小形→中形→大形の推移を考えることができる。

第VI期須恵器の成立は外側に張り出した付高台の出現で特徴づけられる。歴史時代に普遍的になる

蓋付椀の出現時期として、その始源期は一線を劃すべき重要な時期というべきであろう。換言すれば坏から椀へ転換する一時期として第VI期を設定する意義があると考えられる。これまでの古墳出土資料についてみても椀を伴わない第V期の蓋付椀を出土する場合があるから、この方面からも一時期を劃しておくことは有効であると考えられる。第V期の代表としてとりあげた塚ノ谷第1号窯跡の資料のなかに蓋付が少量生産されている。この椀に伴なう蓋は第V期の坏に伴なう蓋そのものといつてもよい形態ながら、大きさにおいて第V期の大形品よりもさらに大形につくられていて椀以外にはセットを組みえないので明らかに両者の組合せが成立する。しかも蓋における撮みや身を受けるかえりの形態から第VI期の最古式に位置づけられるであろう。さらに皿形の出現もこの時期にあると思われる。その他の器形については現在の知見をもってしては第V期から分離するほどの積極的な手がかりがない。さらに今後の調査、研究に課されるところである。

塚ノ谷第2号窯跡の資料はおなじくこの時期に比定され、次期までは操業されていないので、第VI期の単純資料と考えられる重要な遺跡である。先ず蓋付椀についてみれば、椀よりも蓋における変化が注目される。塚ノ谷第1号窯跡のこの時期初頭に位置づけた蓋付椀(A式とする)にくらべて、撮みが扁平な鉗状となり、身を受けるかえりが次第に小さくなつて退化してゆく傾向がある(B式とする)。もう一つの形態は蓋にあっては身受けのかえりがなくなり、口縁部付近で急に折れ下つて直角かそれに近い角度の口縁を形成する。この形態から急に蓋の扁平度が目立ってくる。また椀にあっては付高台のはね上り気味に張り出すぐせがなくなって、下端面が完全に平面に接触するようになる(C式とする)。このようにして第VI期の蓋付椀には様式觀からはA→B→C三種の変遷をたどることができ。この変遷を考えることによって次の第VII期の蓋付椀の出現はきわめて自然に導き出せるであろう。しかしながら塚ノ谷第2号窯跡他の器種も蓋付椀のB・C二種にそれぞれ対応するほどの変遷をたどることは現在までの資料をもってしては不可能である。蓋付椀以外にたしかめられている器種は坏・高坏・壺・壺・提瓶、平瓶、大甕・鉢・皿などである。坏の形は第V期ときわめて対照的で、後続する第VII期に接近した形成をとる。薄手・平底と丸底とあり、特に平底のものは整形技法がすすみ、器壁の厚さもほぼ一様を保つている。高坏は第V期からたどられる形式であるが脚の開きかたに変化がみられる。塚ノ谷第2号窯跡資料はこの時期の好資料ながら、蓋付椀・高坏のほかはいまだ不十分の感があり、今後補充の必要があるであろう。

牛焼谷窯跡の須恵器は蓋付椀が主で坏・甕の破片がみられる程度である。この窯跡から発見された蓋付椀は塚ノ谷第2号窯跡の資料と同類であるが、ここではC式のみに限られる。したがって塚ノ谷第2号窯跡よりも操業期間は短くなり、第VI期後半に比定される。牛焼谷窯の生産主体は瓦であつたらしく、須恵器の量が非常に少いのはそれに起因するのであろうか。

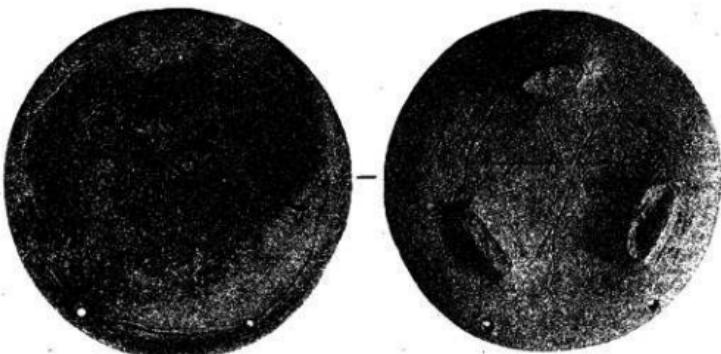
以上の編年区分によって第III期から第VI期に及ぶ須恵器の変遷をたどることができた。これを実年代にあてはめるとすれば、第III期は6世紀中葉から後半に及ぶ時期、第V期は6世紀終末から7世紀前半代にかけての時期、第VI期は7世紀後半代を中心とする時期にそれぞれ比定されるであろう。一方では熱残潤磁気の測定研究もすすめられているので、その結果とあわせてさらに将来検討しなければならない。

須恵器の編年に関連して注目されるのは塚ノ谷第4号窯・第1号窯に特に多く発見された刻線記号

である。これまで俗に窯印と称されて来た記号であるが、その意味については定説をみない。同一窯内から発見される記号も種類が多く、また同一器種でもいくつかの記号がみられる。これらのことを考えあわせて、いわゆる窯印と称される記号は製作工人が自身の作品を識別するための符号であったと思われる。このような方法は近代の陶器窯にあっても幾人かの工人の作品を同一窯にあつめて焼成する場合に行われた形跡があることが参考されるであろう。

今回の調査で須恵器の編年を重点の一つとしてとりあげてきたが、円面鏡や瓦の共伴が知られて新たな問題を投すこととなったのも見のがせないところである。円面鏡の発見は塚ノ谷第1号窯と第2号窯である。第1号窯では四種、第2号窯では二種の円面鏡が発見されている。これまで九州で発見されている円面鏡はほとんど奈良時代に属し、須恵器編年からいえば第VII期にあたる。ただ先年紹介した福岡県中間市漸戸の横穴出土と伝える円面鏡は形態も従来の円面鏡とは異っており、時代も6～7世紀の交に比定されて須恵器編年の第V期にまでさかのぼりうるかと思われる重要な資料であった⁽¹⁾ (第34図)。塚ノ谷第1号窯は須恵器編年の第V期を主体としながら第VI期初頭まで操業されているので、円面鏡は第VI期には焼成されているが、第V期にまでさかのぼりうるかどうかが重要な問題となろう。調査中の所見でもどちらの時期に属させるかをきめる確証は得られなかったが、第V期にまでのぼせうる可能性は捨て難い。周縁を一段ひくして海をめぐらすが、周縁を低いまにするもの、海陸を同一面につくつて境界線を設けて両者の区別をするものとあり、やがて周縁を高くして海の深さを多くとるように配慮したものへとたどられるのである。塚ノ谷第2号窯では脚部が大きく外側する点で第1号窯とのものと顕著な相違を示している。このようにみてくると、円面鏡の製作は確実なところ、第VI期初頭からはじまっており、第VII期への連続も無理からぬ変化を示しているといふべきであろう。いずれにせよ窯跡で円面鏡が発見されたのは九州では初見であり、かつ最古式といつてもよい時期にあたっている点を注意しておきたい。

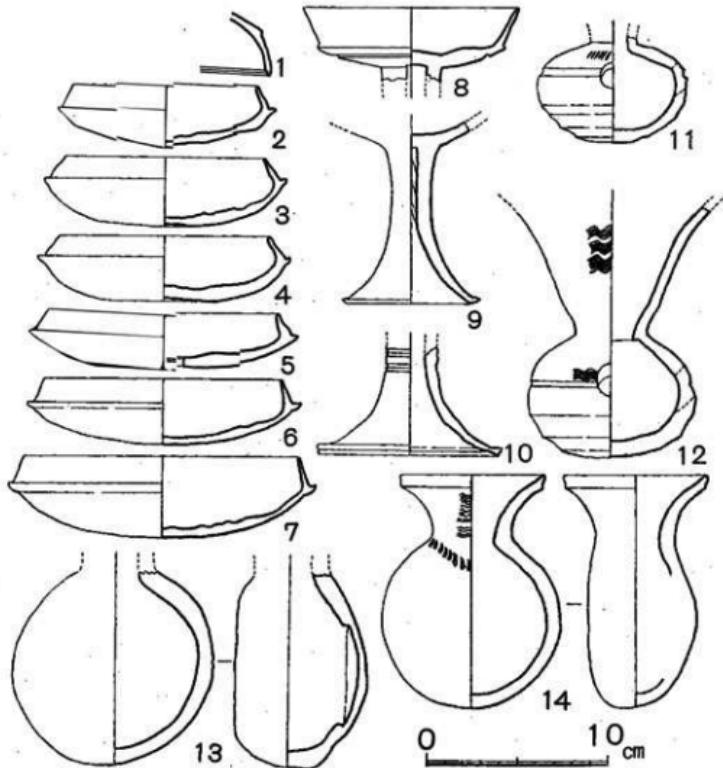
牛焼谷窯で生産された瓦は行基草丸瓦と平瓦で、軒先瓦などの瓦当文をともなうものは一例もない。平瓦の裏面には正方形格子目文様の叩きがあって、我々が大宰府地方で老司式と称している白鳳



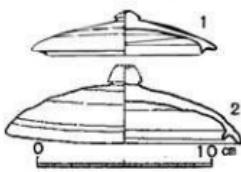
第34図 福岡県中間市漸戸出土の陶製円面鏡

様式の瓦にともなうものであった⁽¹³⁾。このような叩きをもった平瓦はかなり九州での分布は広いけれども、八世紀代にまでつづいて使用されているので実年代の比定となるとむづかしいものがあった。牛焼谷窯では第VI期後半の須恵器をともなうところから七世紀後半代にほぼ限定できるであろう。その供給先にいたっては八女地方ではいまだこのような瓦を出土する遺跡がないので将来発見が期待される。

最後に八女古窯跡群で生産された須恵器と、その供給関係についてふれておかねばならない。第III A期における三助山窯群のあるものが乗場古墳の出土須恵器と近いことは先に指摘しておいたが、第III B期の塚ノ谷第4号窯の須恵器についてはいまだ供給関係を見出しえない。特に蓋坏・高坏について著しい特徴があるので、発見されれば判別は容易であろうと思われる。八女古墳群のなかでこの時期の比較的まとまった資料を採集できたのは立山古墳群中の御藏塚・立山古墳である(第35図)。しかしながら坏・高坏・瓶・提瓶の器種について比較してみても、塚ノ谷第4号窯の資料とはやや異つ



第35図 立山古墳群の須恵器 (1~7・御藏塚、8~14立山古墳)

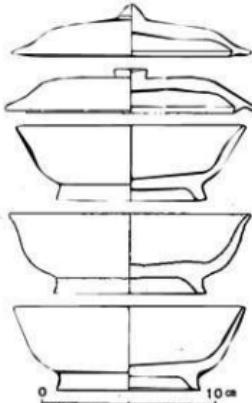


第36図 平原、日当山古墳群
採集の須恵器

た様相を示している。いまのところこの地方の古墳資料には符合すべきものが見出せないので、或は古墳以外の遺跡に求めるべきかも知れない。ただこの東にあたる平原古墳群出土と伝えるものなかには塚ノ谷第4号窓の杯の蓋で撮影を有し、身をうけるかえりを備えたものと類似した資料が一例たしかめられた(第36図1)。この古墳群はすでに開墾によって湮滅してしまったので十分な検討が行なえなくなってしまった。第V・第VI期の資料についても今の

ところ八女古墳群のなかに對比すべきほどの資料が知られていないが、平原古墳群或は日当山古墳群の採集と思われる菟集品のなかに塚ノ谷第1号窓にみる第VI期A式とした蓋付椀と同類の蓋を一例発見することができた(第36図2)。また岩崎光氏の教示によれば、八女古墳群の東端にあたる童男山古墳群のなかに塚ノ谷第2号窓にみるような蓋付椀(第VI期B・C式)の資料があるらしいといわれる。筑後地方において第VI期の須恵器を副葬した墳墓として筆者等の注目していたものに三井郡小郡町三沢・古賀の土壤墓出土資料がある(第37図)。蓋付椀であるが大体第VI期A式に相当するものであろう。このようにみてくると八女古墳群とその供給関係の問題は今後に多くを究明しなければならない現状である。筑紫国造家一族の墳墓と目される八女古墳群にしてもこのような観点から調査研究はほとんど進められていないと云えよう。次回以降の調査ではこの方面にもかなり強く調査を及ぼしてゆき、筑紫国造と須恵器生産の関係などの歴史的な究明の手がかりを得たいと考えている。

(小田富士雄)



第37図 三井郡小郡町三沢・古賀
の土壤墓出土須恵器

- (1) 水野清一・樋口隆康・岡崎敬「対馬」1953
- (2) 樋口隆康「須恵器」(世界美術全集1) 1958
- (3) 原口長之「肥後の須恵器の編年試案」(西日本史学会創立十周年記念論文集) 1959
- (4) 小田富士雄「九州の須恵器序説—編年の方法と実例(豊前の場合)」(九州考古学22) 1964
- (5) 森浩一「和泉河内窓の須恵器編年」(世界美術全集1) 1958
- (6) 森浩一・石部正志「後期古墳の討論を回顧して」(古代学研究30) 1962
- (7) 小田富士雄「九州地方古代窓地名表(第一稿)」(九州考古学29・30合併) 1966
- (8) 小田富士雄「九州(窓業)」(日本の考古学VI) 1967
- (9) 樋口隆康「九州古墳の性格」(史料38巻3号) 1955
- (10) 波多野聰三「久留米市上津町池田須恵器窓地名表」(プリント刷) 1962
- (11) 鶴久嗣郎「筑後銀糸寺藏の須恵器」(九州考古学16) 1962

10 小田富士雄「福岡県瀬戸横穴古墳出土の円面鏡」(考古学雑誌48巻1号) 1962

10 小田富士雄「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(2)」(九州考古学2) 1957

八女古窯跡群発見須恵器種類一覧表

器種	塚ノ谷1号	塚ノ谷2号	塚ノ谷3号	塚ノ谷4号	牛焼谷	三助山
杯・蓋	I-a, b II-a, b			a, b, c		I-a, b, c, d II-a, b, c III-a, b, c
・身	I II-a, b	a, b		I-a, b II-a, b		I-a, b, d II
高杯	I, II, III, IV	○		I, III II-a, b	○	a, b, c
楕	○	a, b			○	a, b
蓋	I-a, b II-a, b	a, b, c, d		I-a, b II, III	○	
皿(盤)	○					
埴				○		a, b
塔	I, II, III	○		○		
盤	○	○		○		○
脚付盤				I, II		
鉢	○			○		
提瓶	○	○		I, II		○
平瓶	○			○	○	
甕	I-a, b, c II-a, b, c	○	○	I, II	○	a, b, c
円面鏡	I, II, III	a, b				
瓦					○	

付、九州発見古窯出土遺跡地名表

1962年に九州発見の古窯出土遺跡を調べて文献6でまとめたときには筑前5、筑後2、豊前1、肥後4という分布を示して計14遺跡を数えることができた。その後数年を経過した今日、八女古窯跡群で古窯の発見があったのを機に再び前回の地名表を補訂し、さらに新しい遺跡を加えて将来に備えることとする。

1 筑前・筑紫郡太宰府町水城	陶製・円面窯（奈良）	文献 3
2 筑前・筑紫郡太宰府町源世 郡府棲跡	陶製・風字窯（奈良～平安）	文献 1
3 筑前・筑紫郡太宰府町櫻寺（住居跡）	陶製・風字窯（平安）	
4 筑前・筑紫郡太宰府町天満宮境内	石製・風字窯（平安）	文献 4
5 筑前・筑紫郡太宰府町通古賀・一ノ上（住居跡）	陶製・円面窯（奈良～平安）	
6 筑前・福岡市平和台（鴻臚館跡）	石製・風字窯？（平安）	文献 8
7 筑前・朝倉郡大福村（孤塚古墳）	石製・四葉窯（舞台）	文献 2
8 筑前・中間市瀬戸（横穴古墳）	陶製・円面窯（古墳）	文献 6
9 筑後・三瀬郡筑邦町荒木・西ノ原（住居跡）	陶製・円面窯（奈良）	文献 7
10 筑後・久留米市合川町阿弥陀（筑後國府跡）	陶製・円面窯（奈良～平安）	
11 筑後・八女市忠見区（塚ノ谷1、2号窯）	陶製・円面窯（白鳳）	文献 9
12 豊前・北九州市小倉区朽網御祖山（窯跡）	陶製・円面窯（奈良～平安）	
13 肥後・荒尾市府本大別当（A号窯）	陶製・風字窯（平安）	文献 5
14 肥後・玉名郡小岱山麓（窯跡）	陶製・風字窯（平安）	
15 肥後・熊本市大江町熊本高校	陶製・円面窯（奈良）	
16 肥後・八代郡西片町沖	陶製・円面窯（奈良）	
17 肥後・菊池郡潤水町住吉神社境内	陶製・円面窯（奈良～平安）	
18 肥後・球磨郡錦町下り山（窯跡）	陶製・円面窯（奈良～平安）	
19 日向・西都市妻町（経塚）	石製・長方形窯（平安）	
20 大隅・肝属郡高山町荒瀬・西山ノ上	陶製・風字窯（平安）	

〔文 献〕

- 内藤改恒「本邦古窯考」115頁、1944
- 渡辺正氣・古賀精里「筑前国朝倉郡孤塚古墳」（福岡県文化財調査報告第17編）1954
- 朝日新聞社編「天平の地宝」図版217。1961
- 渡辺正氣「福岡県太宰府天満宮境内発見の滑石窯」（九州考古学11.12号）1961
- 三島格「肥後の須恵器資料(一)」（熊本史学21.22号）1961
- 小田富士雄「福岡県瀬戸横穴古墳出土の円面窯」（考古学雑誌48卷1号）1962
- 鏡山猛「筑後荒木出土多脚円面窯の一例」（九州考古学16）1962
- 高野孤庵「小蔵窯について」（福岡県文化財調査報告書第31集・史跡福岡城跡発掘調査概報）1964
- 八市教育委員会刊「塚ノ谷窯跡群」1969

(小田富士雄)

編集後記

本年1月10日に発掘調査を終つて以来、執筆者の分担原稿が提出されるまでわずか2ヶ月余の短期間であった。年度末の調査であったから当然のことながら報告書の作成もかなりの無理をしなければならなかつた。しかも今回の調査員の大半は窯跡の調査経験は初めてという悪条件であった。

しかしながら我々は研究者である以上、文化財行政上の緊急調査として事務的に発掘し、簡単な報告を提出することで終らせるところには満足できない。この機会に筑後地方で空白な須恵器編年を確立したいという学問的な意欲をみのらせようとする意図を当初から抱いていた。参加された調査員諸氏も編者のこの意図に協力され、この短期間に遺物の整理、実測、複原作業を完了し、執筆までたどりついたのであった。この間にも調査員諸氏にはそれぞれ勤務先における年度末仕事の整理、大学における学期末試験、さらには発掘調査とあいついで重なる最中に数回にわたって討論、協議をつづけて意見の調整をはかり、文字通り日夜にわたる苦闘であった。最後まで編者の無理とさへ思えるほどの要求に一致して協力いただいた調査員一同のチーム・ワークの結晶であったと感謝に耐えない。かくして初めての調査経験者が大半であったにもかかわらず、学問的にも一応の水準を保つた質量ある報告書を世に送ることができたと信ずる次第である。

また本書の発刊によって若い研究者を学界に送り出すことができたとすれば、苦しい作業を要求した編者にとっても重なる喜びである。調査員諸氏にはさらに次回以降の調査では今回の経験をよき踏台として新しい問題を提起し、研究を深めてくれるであろうことを確信している。今回の調査から報告書の発刊までは編者にとっても一つの冒険であった。これをよく支持し激励を惜しまれなかつた調査指導の先生方、八女市教育委員会の方々にも衷心より感謝申しあげる次第である。

おわりに、編集から印刷所との接渉や校正の段階で、編者が発掘調査その他で出張するが多く、ために調査者の一人真野和夫君には多大の協力をわざらわせて本書ができあがることとなつた。明記して謝意を表する次第である。

(1969. 3 小田富士雄)

塚ノ谷窯跡群

一八女古窯跡群調査報告 I —

昭和44年3月25日発行

発行 八女市教育委員会

福岡県八女市大字本町586番地

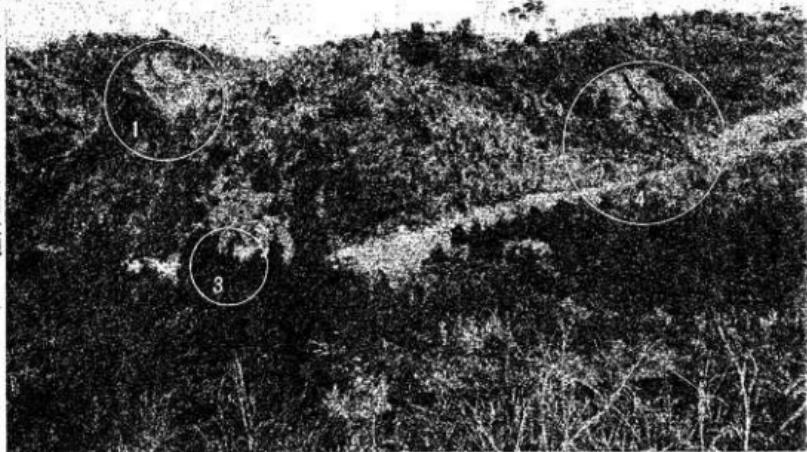
印刷 福岡印刷株式会社

福岡市舞鶴1丁目2の5

図 版



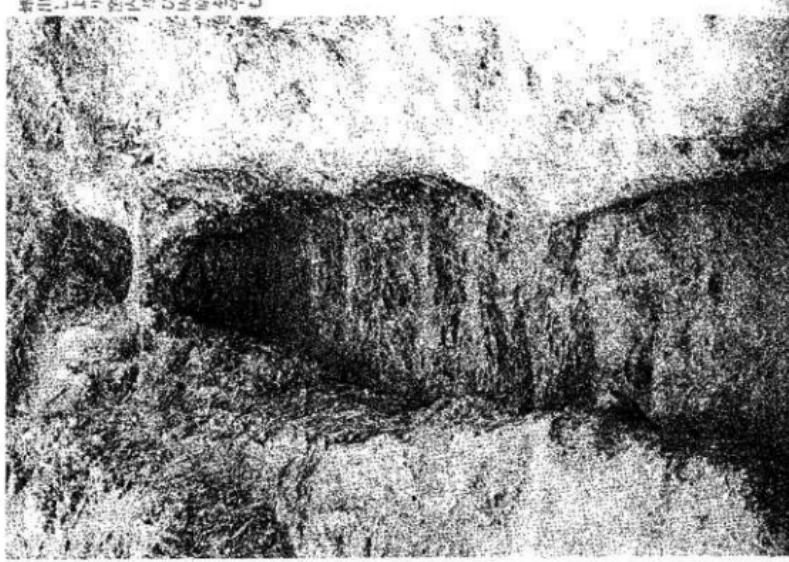
図版第二 塚ノ谷第1・3・4号窯遠望



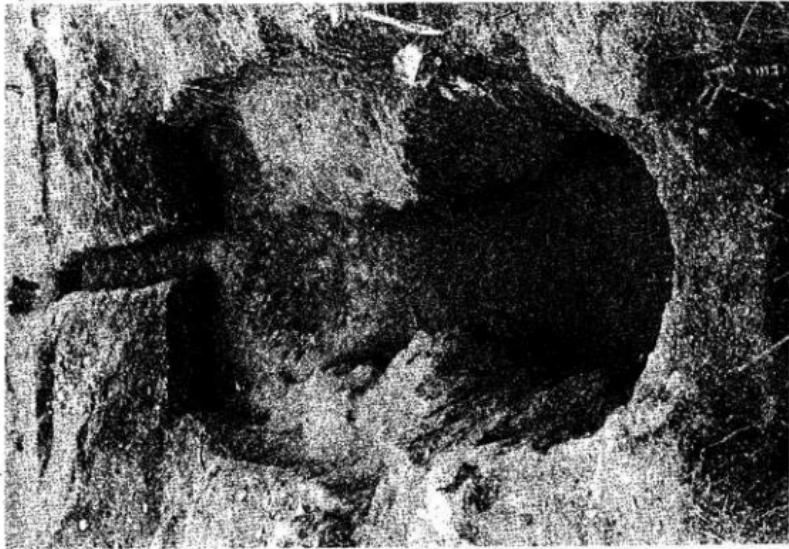
第1・3・4号窯遠望（東南より）



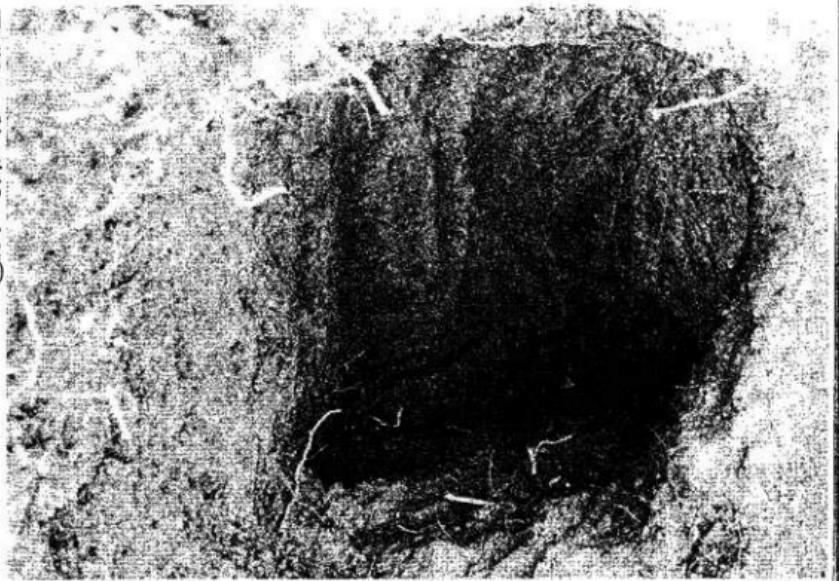
第1号窯遠望（第2号窯より）



鉄口より洞内を覗む



図版第四 塚ノ谷第1号墓(2)



外に压入



内空隙 (埴輪田工跡)



焚口付近の遺物出土状態

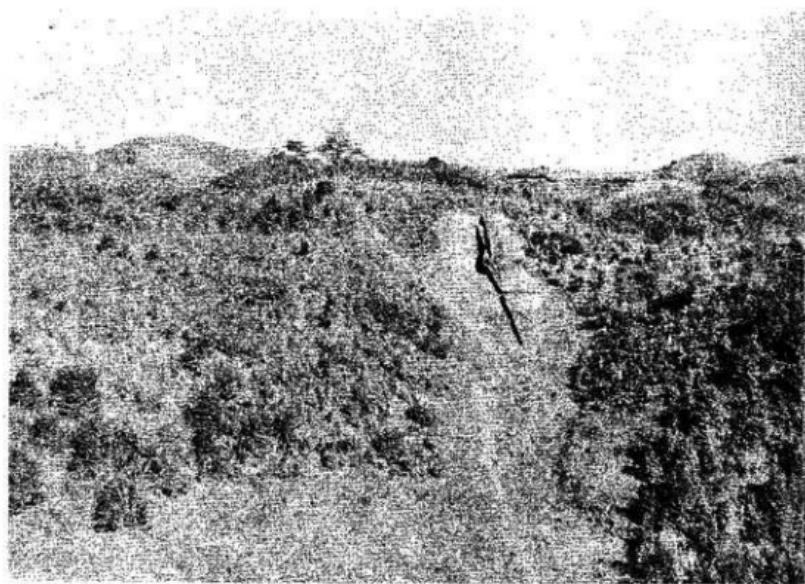


全上部分(円面鏡、椀など)

図版第六 塚ノ谷第2号窯景観



第2号窯遠望（第1号窯より）

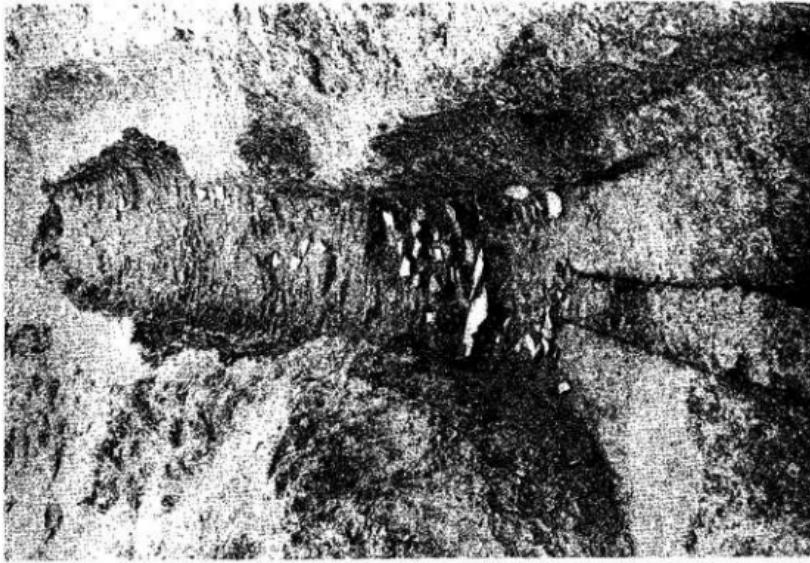


全上（西南より）

(二) 漢中へ向 七十番図

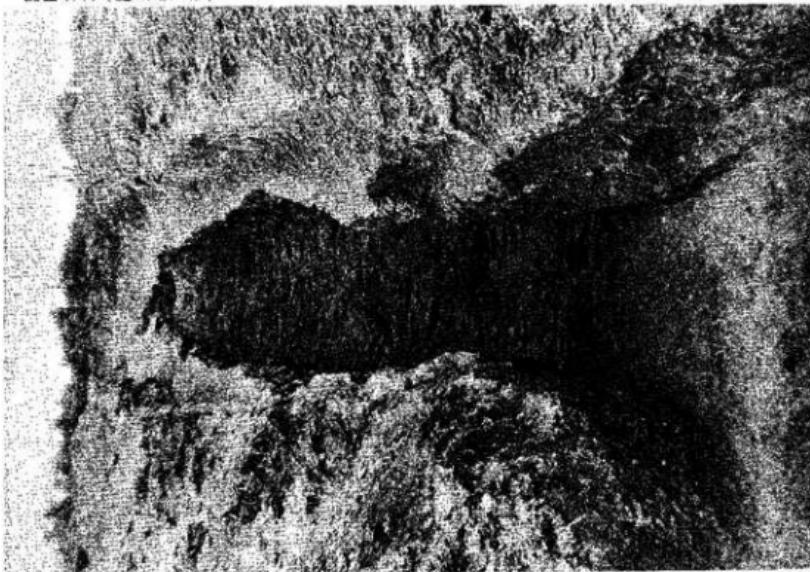
校口より望む

漢内全景 (遺物出土状態)



校口より望む

漢内全景 (調査終了後)



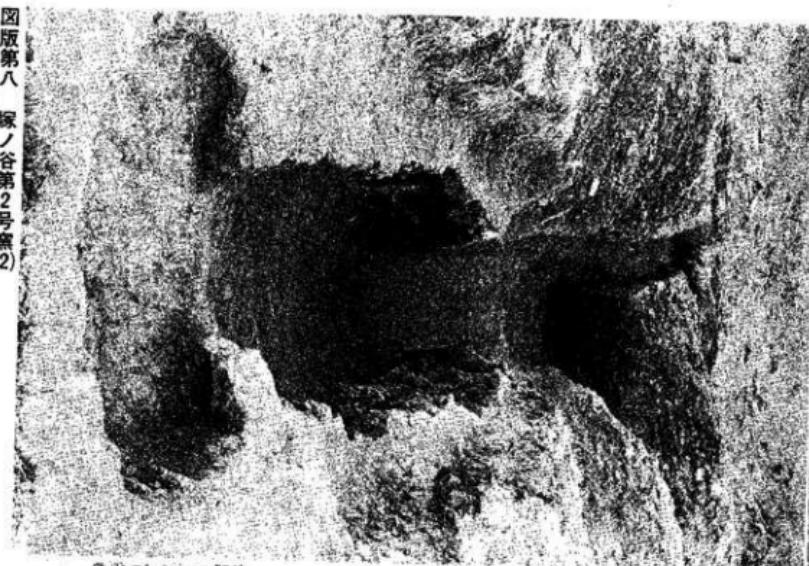
圖内全坑



焼出し上万より切りひ

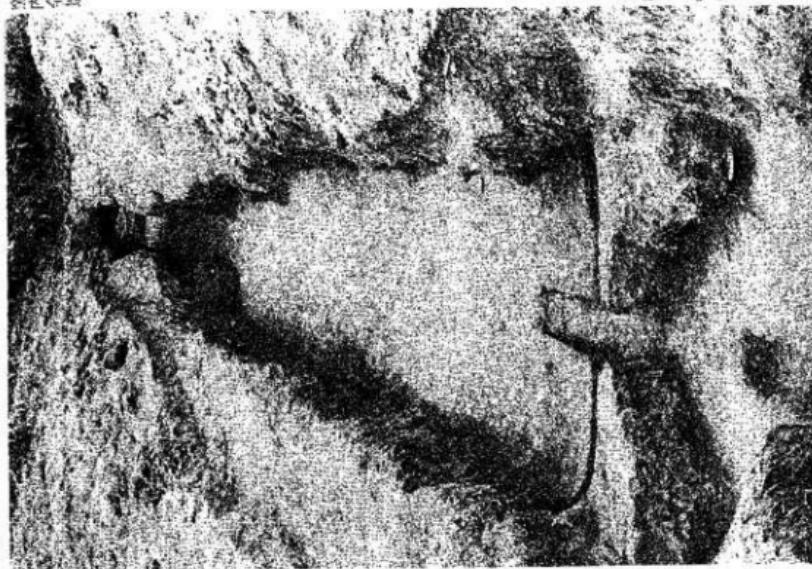
圖内全坑 (調査終了後)

焼出し上万より切りひ

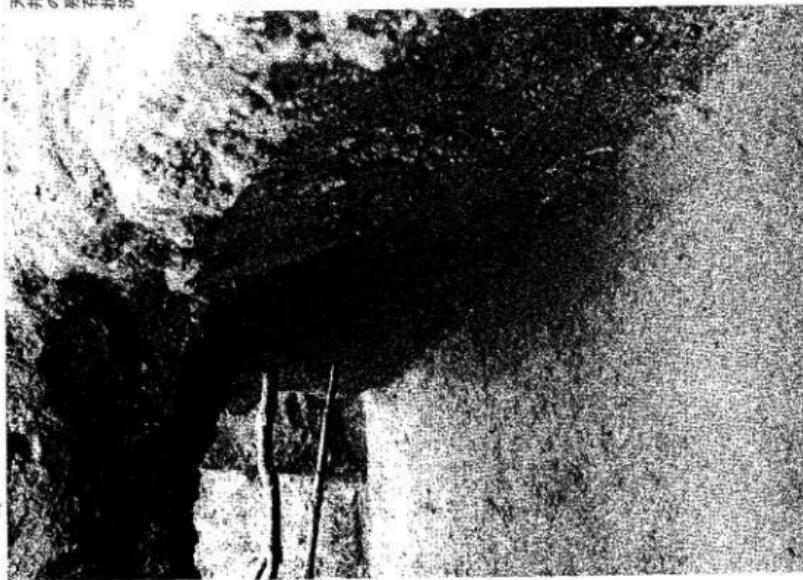


圖版第八 塚ノ谷第2号窯(2)

二點半版第九圖
第44場ノ谷内全貌

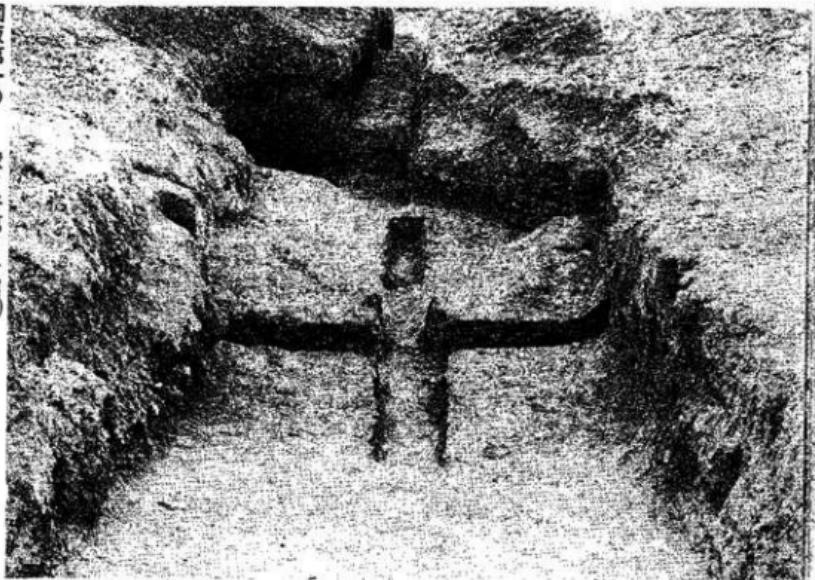


天井の現存状況



図版第一〇

塚ノ谷第4号窯(2)

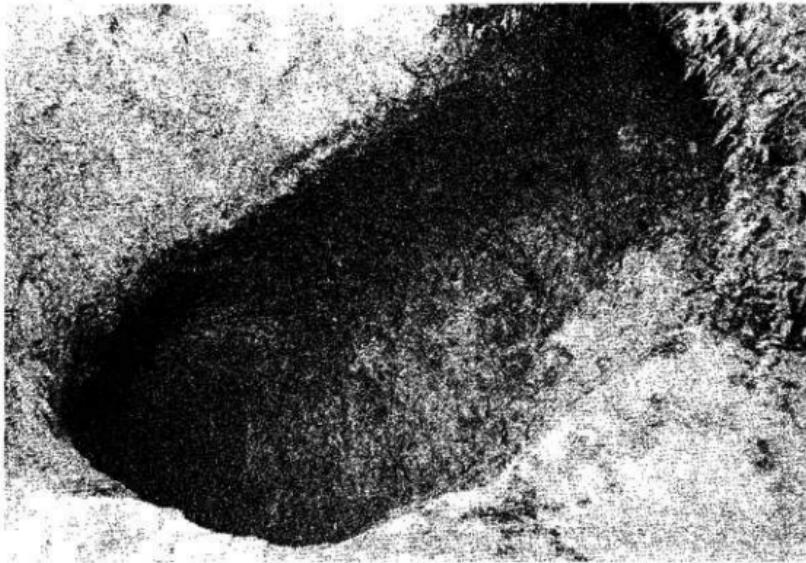


窯口付近（窯内より）

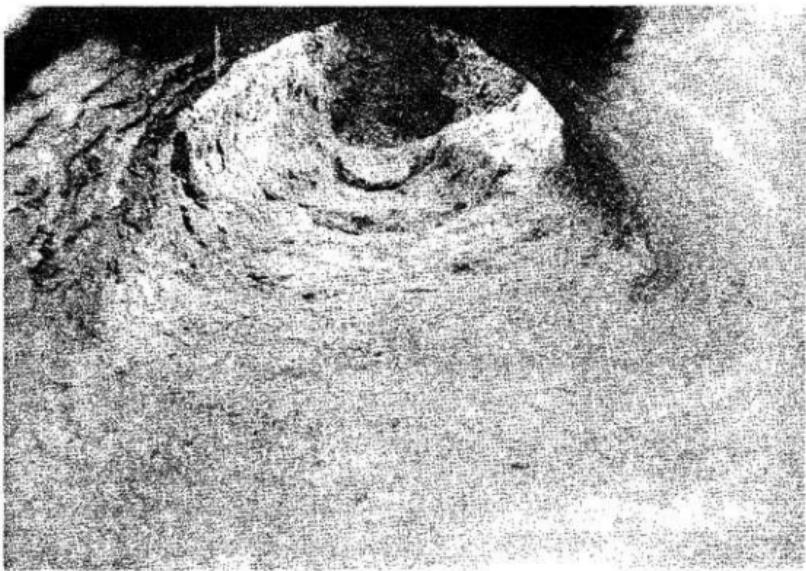


窓口前方の凹み

図版第一三 牛焼谷窯(1)



煙道部（南より）



窯内全景（焚口より）

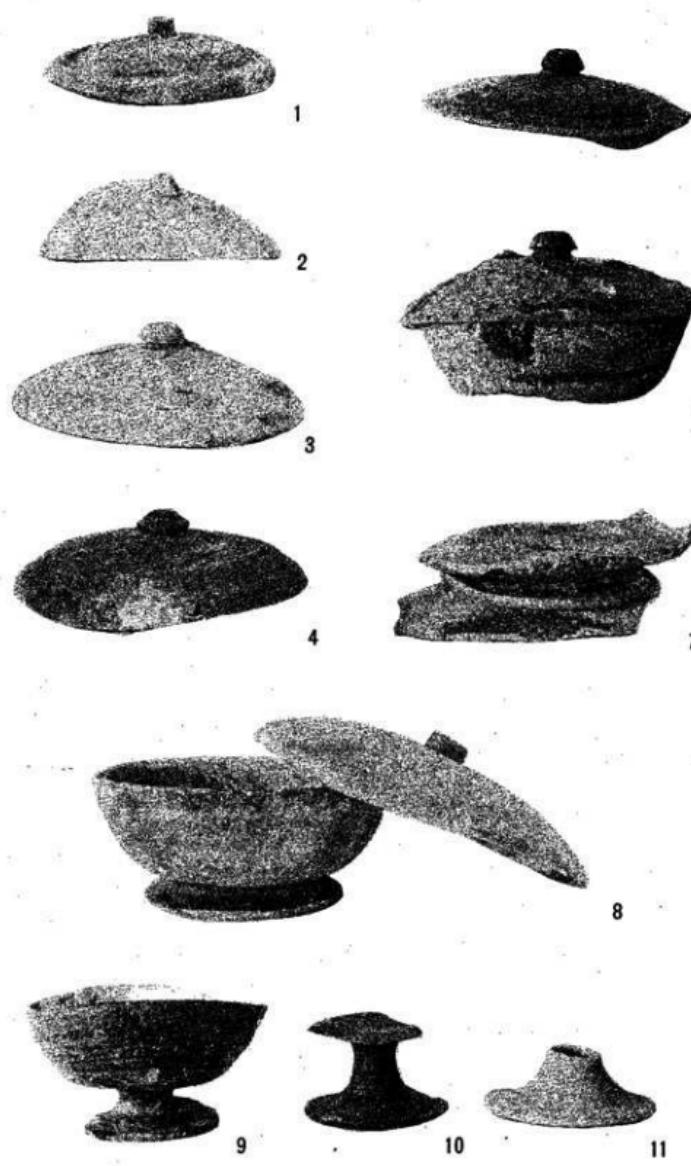
図版第一四 牛焼谷窯(2)



上方より焚口、四み火を覗む

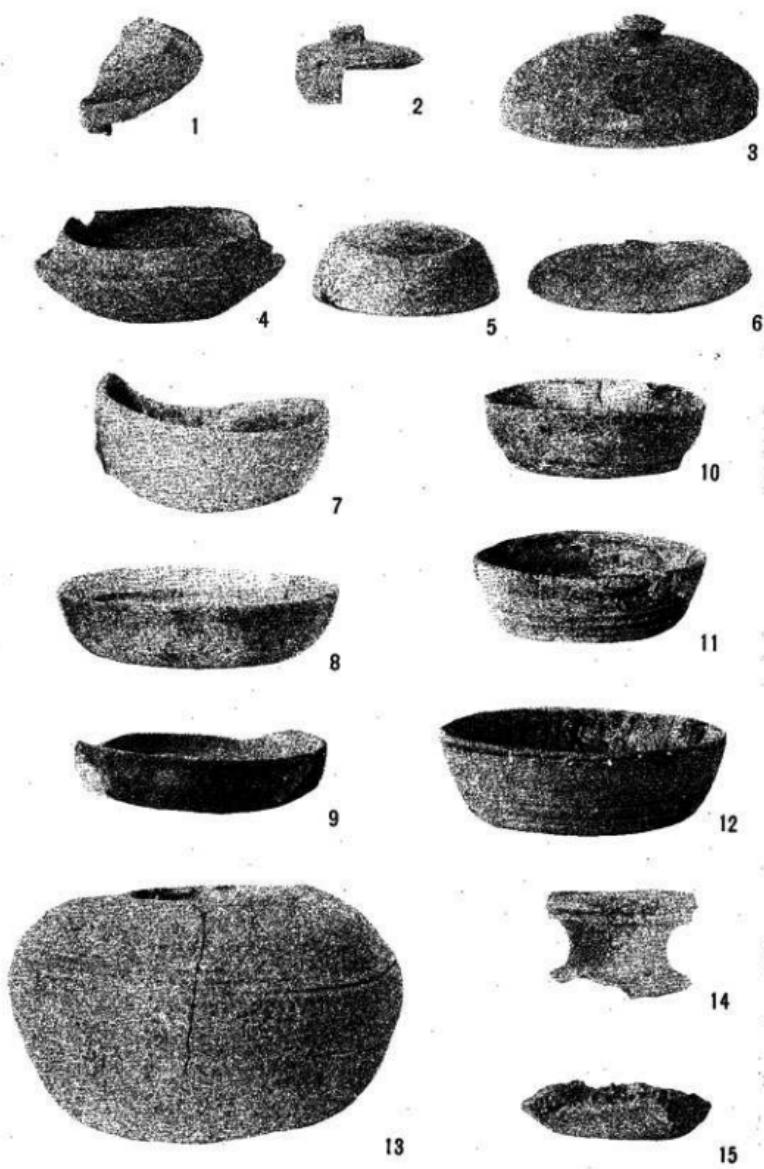


口部ニモ落部を覗む

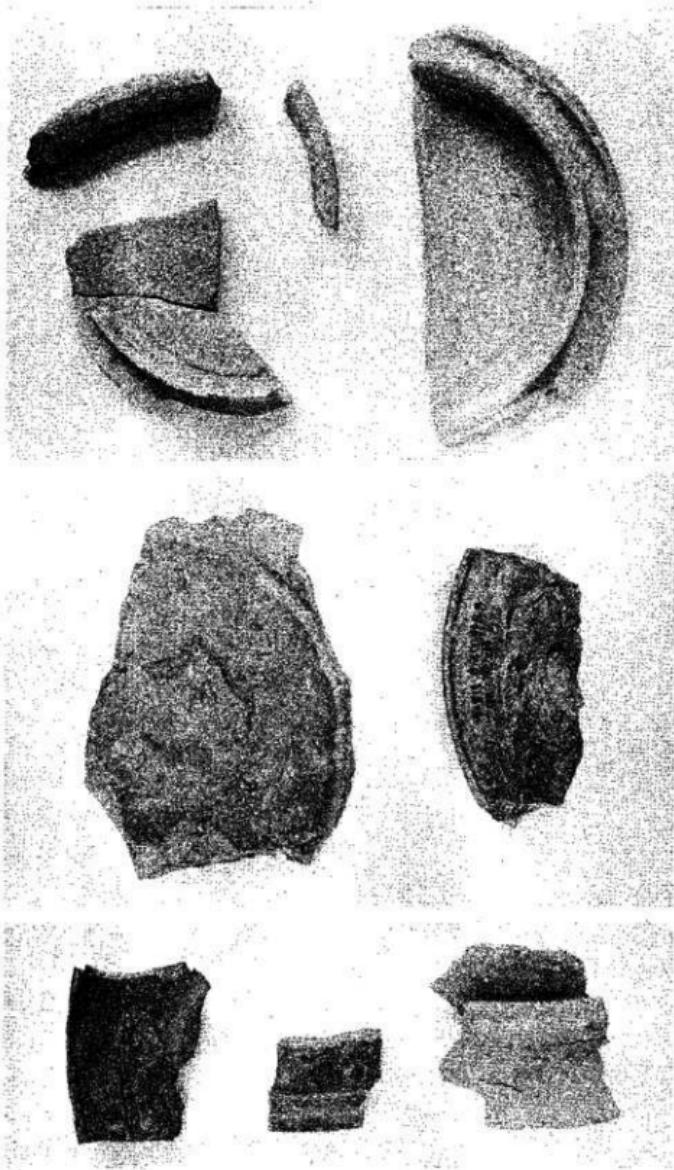


圖版第一六 遺物(2)

塚ノ谷第1号窯 須恵器



圖版第一七 遺物(3)塚ノ谷第1号窯 円面碗



図版第一八 遺物(4)

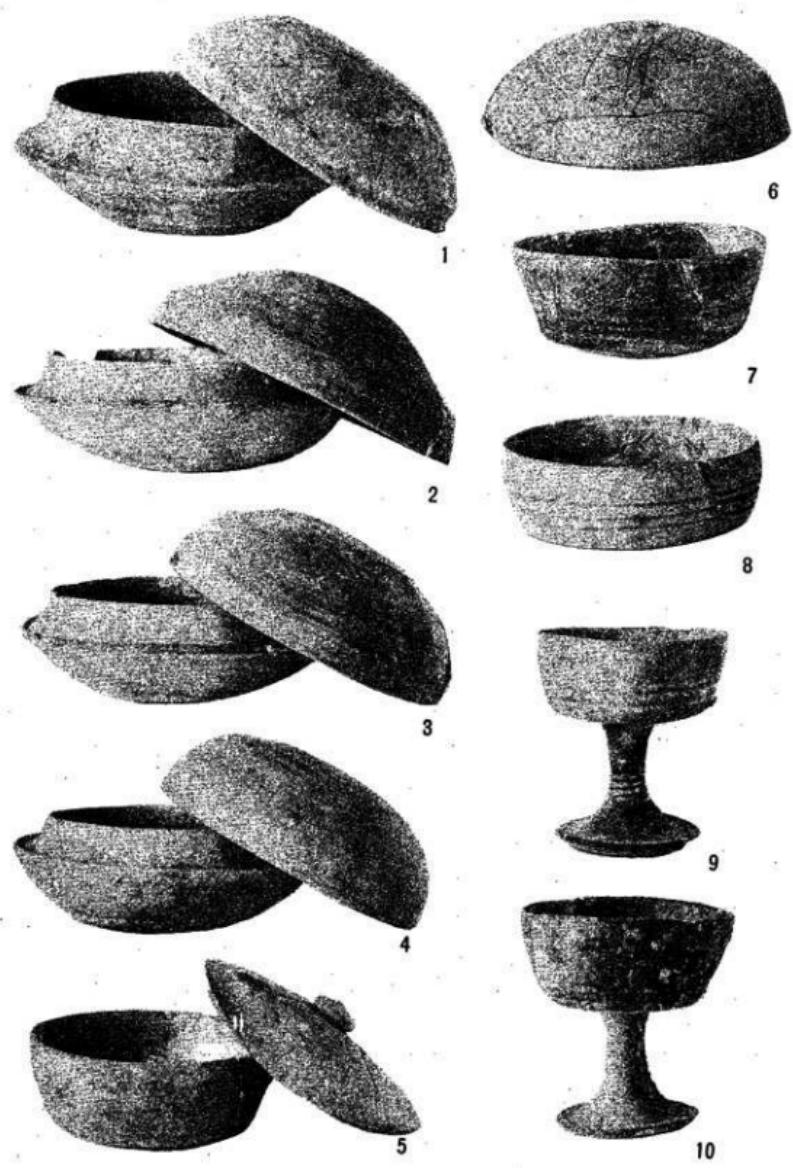
塚ノ谷第2号窯

須恵器・円面鏡



圖版第一九 遺物(5)

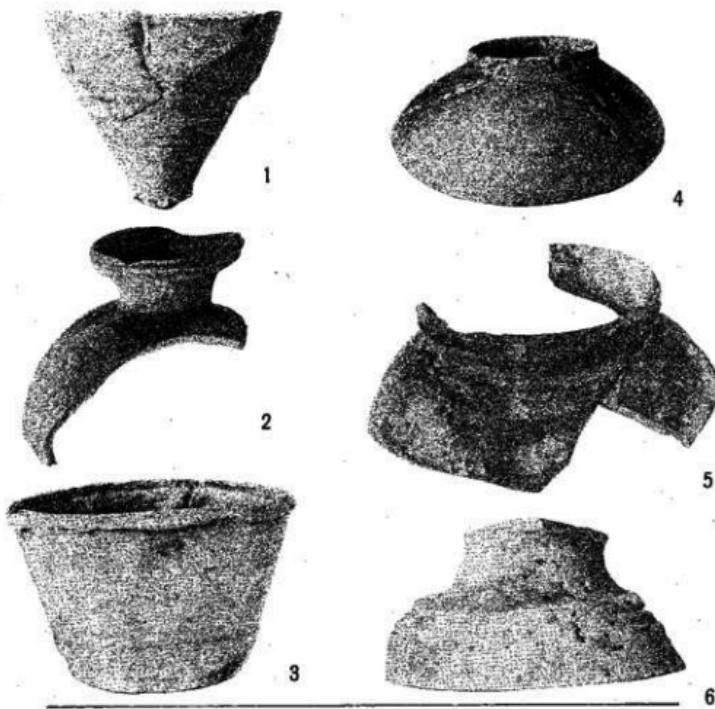
塚ノ谷第4号窯 須恵器



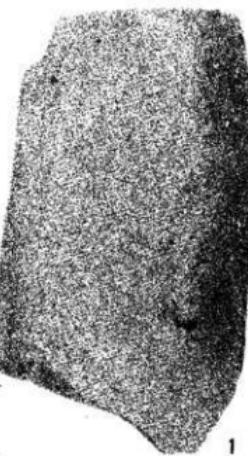
圖版第二〇 遺物(6)

塚ノ谷第3・4号窯
須恵器

(1-6・第4号窯、7・第3号窯)



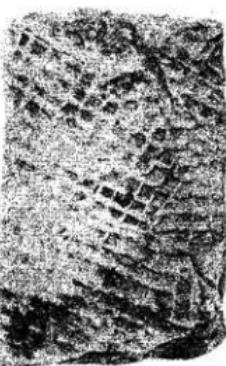
圖版第二一 遺物(7) 牛燒谷窯 瓦



1



2



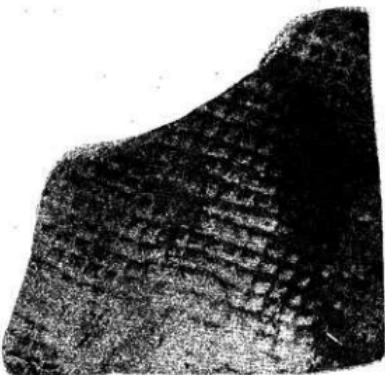
3



4



5



6

八女古窯跡群須恵器編年図
(昭和44年3月現在)

「第ノ多頭鏡」別添付

